

神々の 代理戦争

突然振り込まれた三千万、
それは命の金だと女はいった。命を賭けた
ゲーム、その裏に隠された国家権力の陰謀。

小川 真知貴

1. [本文1](#)

神々の代理戦争

- 第一章 神々の与えた条件
- 第二章 三つの事件
- 第三章 動き出した神々の代理戦争
- 第四章 戦いの始まり
- 第五章 神さんの目的
- 第六章 絡繰り
- 第七章 見え隠れ

『神々の代理戦争』

第一章 神々の与えた条件

—

東京の街に続いた寒い冬が終わり、春の足音が忍び寄っていた。その季節感とは裏腹に、東京第二地検特捜部の部長である東^{あずまよしひこ}義彦の顔色は曇っていた。

東は地検の部長室に一人でいた。その東が、机の上にある電話機の受話器をフックに戻したのは、今しがたであった。東の細められた目が、電話機のそばに置かれた緑色の封筒に移った。その封筒をじっと睨んだ東が呟くようにいった。

「神々の代理戦争とは馬鹿げた話しだ……」

東は両手を、机の上で組んだまま封筒を見つめ考えていた。封筒のそばにはメモがあった。そのメモは電話をかけてきた女からいわれるままに、東が書き留めたものであった。メモの内容は頭に入っている。メモを読むわけではなかったが自然と東の目は、そのメモに注がれていた。

——アジア資源調達機構の不正経理を調べれば、政治家が浮かんでくる。

女はたしかに、そういった。女の情報が正しいものであれば、アジア資源調達機構と政治家の絡む汚職事件に発展する。それも大物政治家が複数、絡んだ大きな事件になる。女の言葉を東は何度も頭の中で繰り返していた。

東京地検にいても、政治家を対象とする案件に、携われる事は滅多にない。地検特捜にいるからには、政治絡みの事件を扱いたいのは、特捜検事の誰しもが持つ願望であった。女の話が事実であれば、東にとっても、またとない大きなチャンスになる。その一方で、東を不安が襲っていた。相手は、東自身の過去も調べていた。それは東にすれば、歓迎できる話しではない。それだけに油断のならない女だと思った。

二

警視庁に勤める高木^{たかぎのりひさ}憲久は、友人である西原^{さいばらもと}基樹から呼び出された。時間は夜の十一時を回っていた。少し遅れたと思いながら暖かくなりだした夜の街を、西原が告げてきた幸町にあるバーへと急いでいた。

高木を誘った西原は、政権与党である政輪党の重鎮、斉藤努代議士の秘書をしている男であった。もともと、高木と西原は同じ大学に通っていた。だからといって親しいのかといえ、それも良くわからない。大学時代でも、それほど親しい付き合いがあった訳ではない。ただ、西原

が齊藤代議士の秘書になってからは、代議士事務所と警視庁が近い事もあって時折、二人で酒を飲んだりしている。高木にしても西原にしても、お互い仕事柄、自分の仕事の内容をべらべらと話せるような職業ではない。そのために気晴らしとなる無駄話などをするには、どちらにとっても都合が良い存在であったのかも知れない。

高木は西原が伝えてきたバーを見つけた。高木の知らない店であった。店内はさほど広くはなかった。カウンター席には丸い椅子が六脚が並び、フロアーには四名用テーブル席が三つあった。

西原は奥のテーブル席に一人、座って酒を飲んでいた。週の初めである為か客は、西原の他にはカウンター席に、二人連れの年輩の男がいるだけであった。

西原は店に入って来た長身の高木に気付くと、軽く片手をあげた。高木は、それに答えるように頷き、そのまま店の奥に進み西原の前に座った。

カウンター内に並ぶグラスや酒瓶が、間接照明の薄明かりによってほのかに浮かび上がる。テーブルや椅子などの調度品は、相当良い物が使われているように見えた。派手でないが、重厚な趣のあるバーだと高木は思った。

高木は西原と同じウイスキーを注文した。

グラスを口にしている西原は中肉中背で、平凡な顔付きをした男であるが、秘書という人に接する仕事柄であるのか、頭髪は綺麗に揃え、着こなしもなかなか堂に入っている。

しばらく雑談があった。酒が進むと西原が、声を低くしていった。

「なあ、高木、お前は警視庁にいるんだよな」

西原が、このような言い方をするのは珍しかった。仕事内容を聞くのは、お互い野暮との暗黙の了解があるような二人である。まして、高木が警視庁にいるのは西原も承知している。何か相談でもあるのかと、高木は西原をみた。

高木の目を見た西原も、当然だよなと言いたげに、高木の言葉を待たずに自ら頷き話しを続けた。

「神々の代理戦争なる話しを聞いた事はないか？」

「何だ、それは？」

まるでゲームのタイトルでも思わせる言葉に、高木の目が少し細められた。

高木憲久。短くした頭髪や、その目の鋭さなどから、よく見ると普通の会社員とは少し異なる雰囲気を持っている。店に入ってきてからも、ほとんど表情を変えるでもなかった。何処かさめた感じを漂わす男であった。

「知らないのなら構わない」と慌てて西原が打つ消すようにいった。

「話し始めたのだから言えよ」

「そうだな、……仲間内のある先生の話しだ」

西原は、少し口元を噛みしめ、そのように断ったうえで話し始めた。

「その先生の話しによると、緑の封筒が事務所に届き、神々の代理戦争の指名を受けたと、書かれた手紙が添えられていたそうだ」

西原は、ある先生とはいったが、政治家秘書が、このように話す場合は、得てして本人が仕える政治家先生の話になる。となれば斉藤代議士に起きたものだろうとの想像は、高木にもできる。

「何か代議士を脅すような事が、書かれていたのか？」

「いや、封筒には携帯電話が入っていたらしい」

「それで連絡は？」

「女が、その携帯に電話してきた。女の話では指名を受けた九十八人は、お互いに戦わないと駄目だそうだ」

「物騒だな、戦うとは殺し合いでもしろと言っているのか？」

「それは判らん、神さんのしもべと称する、その女の話しだと処分という言葉を使ってきた」

「神さんのしもべ？ また、けったいなものを持ち出したな」

余り表情を表に出さない高木にしては珍しく、少し呆れた顔で聞き返した。

「女が、そう話したというのだから仕方あるまい」

「それはそうかも知れんが、――それで、その女とは会ったのか？」

「いや電話だけだ」

「金品の要求とか、何か脅される。本当に、そのような事はないのか？」

「ない、はっきりと女はゲームだと言った」

「ゲームね、ゲームか……」

西原にしても代議士に関わる問題である。仮に、そこに不都合があっても話せないのは、高木にもわかっていた。しかし、ゲームと言われたのでは高木にしても、それ以上、突っ込んだ話しも聞けなかった。

「その先生も悪戯だろうと話していた。おそらく、そうだと俺も思った。ただ、お前は警察にいる。何処かで、そのような噂を耳にしてないかと思ったので聞いた」

「……緑の封筒が送られた事件など知らない。神々の代理戦争なる言葉も聞いた事がない」

ぶっきらぼうな言い方ではあったが、事実、高木はそのような噂に触れた記憶はない。

「それなら、それで構わない。ただ、少し調べられないか？」

「被害届けは出せないのか？」

正式なルートでの相談であれば、応じようもある。しかし、幾ら友人の頼みとあっても、被害届もでてないのに、勝手に警察が代議士の近辺を、洗ったりするのはできない。

「出すほどのものじゃ、ないだろう」

「それじゃ駄目だ。こっちだって政治家先生の身辺をうろつき、おかしい事になれば警察組織に跳ね返ってくる」

「それはわかっている」

高木は「取りあえず警察に、その様な情報があるかは調べてみる。それで良いか？」と、問うた。代議士に関わる問題だけに、高木としても深入りは避けたかった。できるのも、そこまでであった。

西原も、それで良いと答えた。

三

四月十六日、三寒四温とは、まさに、この日にあるような言葉であった。数日続いた暖かい日も今日は、昼間から一転して寒さが戻っていた。それは夜になってもかわらなかった。

寒いというよりも冷たいのであった。そんな冷たい夜に、警視庁公安部の大畑は、ある男と会うために日比谷公園へと向かっていた。

公園内に入るとベンチに座る男女や手を繋ぎ歩く、若い男女の姿などがある。何か、そこだけは寒さとは関係のない、やはり春先なんだなと思わせるものがあつた。

大畑は、こっちはこれから大仕事だというのに、世の中は暢気なものだと、行き交う若いカップルを横目で見ながら、それでも人目を避けるように、公園内の隅にある日比谷野外大音楽堂に向かった。

公園奥にある夜の野外音楽堂。さすがに、この付近ともなると人影はなかった。

音楽堂の正面は二千人から収容のできる長椅子型の観客席が扇状に設けられており、最後部は立ち見席のスペースとなっている。その周囲は木々に覆われている。

大畑が観客席に近い道路から音楽堂に近づくと、一人の男が立ち見席から、正面の音楽堂の方を見ている姿が目に入った。大畑は、遠目から男の横顔を確認した。間違いないと思った。

大畑は男に近づいた。それに男も気付いた。男は用心のためか、街路灯の光の届かない木々の影に向かって歩いた。大畑も男に従った。

光が僅かに漏れている、薄暗い木の陰で大畑が男に話しかけた。

「持ってきて貰いましたか？」

「ああ、メモリに全てコピーしてある」

男は、そう言うと胸元のポケットを探りメモリカードを取り出し、それを大畑に手渡した。

大畑は渡されたメモリカードに目を落とした。その瞬間であった。大畑の胸に鋭い痛みが走った。ウツともグツともつかない小さな声が大畑の口から漏れると、大畑の体は太い幹に持たれかかるように崩れていった。

翌早朝、散歩で訪れた近くの住民によって、大畑の遺体は発見された。

四

警察官が公園内で殺害されたとの報道があつた数日後に、今度は世田谷で会社役員が殺される事件が起きた。

休日の朝だった。遅い朝食を済ました神坂^{かみさか}順平はアパートの自分の部屋で、配達された新聞に目を通していた。順平の大きな目が新聞の一カ所に止まると、そこから動かなくなった。

順平の口から「嘘だろう」と、独り言が小さく漏れた。

新聞には、東京で起きた殺人事件が報じられていた。殺されたのは会役員、黄田真一となっている。

順平の表情がにわかに曇りだした。順平は立ち上がると、部屋の隅に積んだ新聞の束から、数日前に警察官の殺害事件を報じた新聞を探した。順平は警察官殺害事件の載った新聞と、会社員の殺された新聞を交互に見ながら、険しい表情のまま、あの女の話は嘘ではなかったと思った。

神坂順平は茨城県に住む、今年二十九歳になる平凡な会社員をしている男である。周囲からは余り物事に拘らない、何処かひょうひょうとした性格のように見られていた。

おそらく、その見方は、それほど間違ったものではないのであろう。彼自身、出世欲とか人との競争などといったものには疎い性格をしていた。信条というほどのものではないにしても、順平は無理せず人並みの生活ができれば、それで良いとの考えがあった。事実、彼は、それなりの大学も出ていたが都会で就職をするのを嫌い、卒業すると生まれた地元に戻って、小さな会社に勤めだしていた。

競争社会に身を投じなかった彼の弁解をする訳ではないが、そこには順平の生まれた土地柄が影響をしていたのかも知れない。

順平が生まれたのは茨城県おみたまし小美玉市である。茨城県に近い他県の人で小美玉市を知る人は少ないだろう。ただ、ある時期新聞などでも九十八番目の地方空港が作られたと大きく報じられたので、茨城空港のある町と言え、そうかと思ひ当たる人も居るかも知れない。

小美玉市は自衛隊基地や空港があっても長閑な町である。広陵とした関東平野にあって、目立つのは畑や田といった田園風景である。

順平は、そのような長閑な街で、わりと大きな農業を営む家の次男坊として生まれ育った。子供の頃から農作業の手伝いなどをしてきたせい、長身のために痩せているように見えても、結構骨太のしっかりとした体はしている。自らも、体力や運動神経には自信があり、これまで大きな病気などもせずに育ってきた。

それらの生まれながらの環境が、せせこましい人との競争という考えを奪っていたのかも知れない。

大学を出ると地元に戻り会社員となったが、農村地帯にある会社である。それほど大きな会社に勤めた訳でもなかった。田舎の自然の中で生きようと地元に戻ったときから、人と比べても仕方ないとの気持ちは益々強まり、自分は自分との割きりのなかで、古くからの友人達に囲まれ、のんびりとこれまで生きてきた。

その順平に神からと称する、奇妙なやや大きめの緑の封筒が届いたのは一ヶ月ほど前であった。

順平は、その時の事を思い出していた。

その日、順平は会社の友人達と、近くの居酒屋で酒を飲んでいて、しばらくぶりの飲み会、まして明日は休日である。会社勤めをしている順平にしても、こんな楽しい日は、そうそうない。酒のピッチもあがっていった。場所を変え二次会をすると、後は解散。その後はお決まりのコースのように、気のあった男女七人の同僚達と近くのカラオケボックスで酔い冷ましを兼ねて歌っ

ていた。

順平が気持ちよくアパートに帰ったのは、夜中の二時を少し回っていた。

アパートの部屋に戻った順平は、テーブルの上にある膨らんだ緑の封筒に気付いた。一瞬、あれと思った。部屋の様子を見回した。部屋の様子に変わったところは感じられなかった。

部屋に入る時に鍵はかかっていた。鍵穴に差し込んだ鍵が、カチッとロックを解除する感覚が酔いの残った頭にあった。少し小首を傾げながら順平は、緑の封筒を手にした。封筒には宛名も、差出人もなかった。順平は、酔いもさめやらない頭で、何だ、これかと思いつつ封を切って、中の物を取り出した。

中には携帯電話機と手紙が入っていた。何だろうと思いつつ、中の手紙を読み出した。

”神坂順平様 神々の代理戦争へようこそ

神からの訓告を致す。光栄にも君は神から九十八番目の戦士に選ばれた。これから三年間は神の代理として頑張つて貰いたい。なお、大会の詳細は神のしもべより聞いてくれたまえ。それでは健闘を祈る”

巫山戯けた短い文面が目飛び込んできた。誰かの悪戯だとは思つた。しかし、それよりもどうして、この部屋に、このような物が置かれていたのか、それが不思議であった。

順平は部屋の合鍵を彼女に渡すとか、友人に渡すなどはしてない。他人が留守の間に勝手に部屋に侵入している。

普段は余り物怖じしない順平であったが、さすがに薄気味悪い思いに、^{いぶか}訝しげな目で部屋の中を眺めた。部屋の中に変った様子は感じられない。それでも順平は、ふらつく足で立ち上がると机やタンスを調べてみた。別に部屋から消えたものはなかった。

そのときであった。突然、封筒で送られてきた携帯電話が鳴った。静かな部屋に響く携帯の呼び出し音に一瞬、ドキリとしたが、順平は携帯電話を手にした。

「……もしもし、誰だ、お前は？」

「見て貰いましたか、招待状を」

柔らかな女の声が流れてきた。一瞬、順平は戸惑った。

「……………」

「御免なさい、私は神様の使いね」

女はかるやかに話しかけてきた。響いてきた声からは若い女のように感じた。

「……手紙を置いたのは君か？」

「そうです」

「何のために」

「それは、これから話します」

「カミって何だ。代理戦争とは何だ」

おかしい話をする相手に、順平は用心をしながら、少し口調を強めた。

「……落ち着きのない奴だな、どれから答えてよいか判らないだろう」

矢継ぎ早に質問をする順平に少しムツとしたのか、電話から伝わる女の口調が急にぞんざいになった。

「こんな夜中に、そう興奮しないでよ。本当に私は神の使いなんだから。最初に話します。招待の御褒美として三千万、貴方の銀行口座に振り込んだわ。後で確認してね」

三千万と聞き、この女は、何をいってるのかと思った。

「誰が見ず知らずの人間に、そんな大金をくれる？」

「足りないか？ 幾らなら良い。まだまだ、出すよ」

「あのな、そんな問題ではないだろう。つまらない冗談は言うなという事だ」

「これは冗談じゃないよ。それは命の金だよ。貴方の命を三千万で買ったのよ」

「……俺の命の値段、何なんだ、それは？」

「頭の悪い男だな、貴方は神様から選ばれた。それは貴方が、これから九十七人の相手と勝負をしないと行かない。負ければ命を失うのですよ」

荒い言葉や丁寧な言葉を、巧みに入り混ぜて話してくる。何なんだ、この女はと思いつつも酔いがそうさせたのか、あるいは勝手に部屋に置かれた封筒が気になったのか、女の馬鹿げた話しに、順平は電話を切れなかった。

「九十七人を相手にする、えらく中途半端な数だな。手紙に九十八番と書かれていた。そうすると俺は最後に選ばれたのか？」

「そうだよ」

「何で、俺はビリなんだ」

「それはですね、それは……」

「何を言いよどんでいる？」

「基本、沖縄の神様は人が良いのです」

「訳が判らない。何故、沖縄の神様が突然でてくる」

「妾^{わらわ}は、ニライカナイ様に仕えるしもべなり」

「何だ、そのニライ何とかとは？」

「たわけ者が、汝はニライカナイ様より御指名を受けながら、そのお方を知らないのか？」

「だから、そのニライさんは、なんだと聞いている」

「……沖縄では偉い神様なんだけどな」

「俺は茨城の生まれだ。沖縄の神様に親戚はいない。選ばれる理由がない」

「理由ならあるぞ。尤もな理由が」

「どんな理由だ」

「つまり、お前を選んだ神様の指名順位が九十八番目であった。神様も下々の事を知らないとならない。そこに飛び込んできたのが茨城空港の開港、それが国内九十八番目。神様いわく、茨城の地から代表を出すと、お決めになった」

「そんなチャライものか、いや、まだ判らない、そこから何故、俺になった」

「沖縄の神様は、物事をごちゃごちゃと考えるお方ではない。だから、順平の名字に神の一文字

があるのを見て、これは良いと指をさし、お前が決まったのだ」

「あのな、その何処が尤もな理由なんだ。それは単なる行き当たりばったりだろう」

全く人を馬鹿にしたような話しである。人を信用させるなら、もう少し上手い嘘をつけと言いたかったが、一方では女の巧みな話術につい引き込まれてく自分を感じていた。

「いや、その閃きは、すこぶる合理的な考えだと、お前は思わないか？」

「思えるわけないだろう。だいたい沖縄の神様の指名順位が最後だった理由はなんだ」

「それはだな、その神様にも色々あってな、何だかんだと言っても本州の神様の数が一番多いからな」

「数が多いのと指名順位は違うだろう」

「その、なあ、太古から日本の神様には三つの派閥がある。その最大が本州、北海道には北方先住民の文化、沖縄は琉球文化があり、それぞれに神様が居る」

「それは地域格差というやつだな」

「いや、いや、神様に格差は存在しない。だけど、神様も集団である以上、序列は決めないとならない。その序列を決めるのが、この代理戦争になる。沖縄の神様が最後であったのはだな、北海道の神様も沖縄の神様も、底抜けに人が良いから、つつい本州の神様の言葉に言い負かされた。今回も、それで後回しになった。あげく北海道の神様と沖縄の神様でジャンケンをした。結局、それにも沖縄の神様は負けた結果だ」

女の口は滑らかに回る。いつのまにか、その巧みな話術に順平は引き込まれていた。

「ただな、九十八番でも神様から順平が選ばれたのは奇跡だ。それは間違いない」

「奇跡？ どうして」

「本当に頭の悪い奴やな」

「何度も頭が悪いと言うな。俺にだって多少のプライドはある」

「そうか、それならはっきり言う。だいたい神様が変わって戦う人間を選んでいる。神様達は、指名順位の早い方から、この国のトップレベルの人間を指名するに決まっているだろう」

「すると俺も、日本の中では九十八番目に偉いのか？」

「だからお前は馬鹿だというんだ。余り言いたくはないが、沖縄の神様は一風変わっている。何せ茨城空港が出来たのを祝い、茨城の地から人を選ぶのを思いつく程のお方だからな」

「それがおかしい。茨城空港が出来たのは随分昔だ。今更、お祝いもないだろうに」

「これ、これ、滅多な事めつたを言うでない。何十年経とうが神様が祝いたいと言ったのだ。その何が悪い。それに対して下々が文句を述べるなどは神様に対する冒涇ぼうとく意外のなにものでもないぞ」

「……お前の話を聞いていると頭が痛くなる。まあ、一風変わった神様が俺を選んだ。それは、それで構わない。しかし、何故、人が神様が変わって闘わないとならない」

「昔は神様が直接、闘って序列を決めていたが、神様はどの神様も強いから何百年も戦わないと決着がつかない。そのうちに戦うのに飽きてしまう神様もいた。それでは困るから人間に代理をさせようとなった」

「いい迷惑だな」

「そう言うな、神様が決めたのだ。――一応、ルールを話すぞ。期間は三年間、その間に相手の自由を奪えば、奪った人間のポイントとなる。ポイントが最高の者が優勝者。極めて簡単なゲームだ」

「自由を奪うとは何だ？」

「相手を殺せば、自由は奪える」

「さて、これは人殺しのゲームか？」

「いや、違う神様の序列を決める大会だよ」

「人を殺せと言っている」

「どのように解釈しようが、構わんが、これはあくまで神様の序列を決めるものだ」

「……そんな話し、誰が信用する」

「そう、そうよね。皆、最初はそう言うよ。いきなりでは可哀想だね。それじゃ、まず明日は、銀行口座を調べてきてね」

「何を言っている」

「今日は、ここまでにしておいてあげる」

そう言うと女は電話を切っていた。

――新手の詐欺。順平は送られてきた携帯電話を握りしめ、そのような考えが浮かんでいた。

五

翌朝、順平はベットの中で目覚めた。昨夜は酒に酔っていた。おかしい夢を見たと思った。ベットの上から眠たげの眼をテーブルに向けると、そこには緑の封筒と携帯電話があった。順平は目を細めてしばらく眺めていた。

夢ではなかったと口元を噛みしめた順平は、のろのろと着替えを済ませるとベットの縁に腰を下ろし、昨夜の女との会話を思い返していた。時間を見た。九時になろうとしていた。順平は外にでると近くの銀行に入り、ATMを操作して預金口座の残高を調べてみた。

表示された残高に順平は驚いた。すぐには金額が判らなかった。しかし、そこにはゼロが七つ位ついた金額が表示されている。何度か見直してみたが、一度表示された桁が変わるものではなかった。

これは何だと思った。やはり最初に浮かぶのは新手の詐欺ではないのかという考えであった。――いい気になって使ったら、後から莫大な請求がくる。しかし、よく考えると駄目であった。契約書がない。何も契約をしてない。間違っって振り込んだものだから返せでは、儲けなどは出せない。仮に、こっちが返金に応じなかったら相手は損をするだけ。勿論、金を持って逃げられても相手の損。これだけ大きな金額を振り込むのは、相手に取っては余りにも大きなりスクであった。

わからない。何が何だかわからない。――俺の口座番号はどうして知った。それもおかしい。ただ、女の話は嘘ではなかった。

気味が悪い、それが、その時の正直な順平の気持ちであった。

順平は、残高証を握りしめ部屋へと戻った。部屋で座り込むと、再び、昨晚の女との会話を考えた。

そのとき昨日送られてきた携帯電話が鳴った。おそらく、また、神の使いと述べた女からだと思いつつ、携帯電話を手にした。

「はい、順平、ペンとメモ紙を用意する」

電話にでると女は弾けたような明るい声で言った。言葉は雑だが透き通った綺麗な声であった。

「金が振り込まれていた。どうなっている！」

「だから言ったでしょう。それは自由に使って構わないと」

「巫山戯るなよ！」
ふざけ

「おう、こわー」

「茶化すな！」

「それは順平の命の金、何度同じ事をいわせる。頭悪いな。お、ま、え、は」

「……………」

順平の怒りなどは、全く無視であった。順平にすれば女から知られている立場。順平は相手を知らない。そこには最初から大きなハンディがあった。なんといっても状況的には、圧倒的に女が有利に決まっていた。怒りが通じない相手となれば、カリカリしているのも虚しい。——こりゃ、駄目だなと諦めた。

「今から、お前と同じように神様から指名を受けた五人の名前を告げる。まあ、それが当面のお前の相手になる」

「……五人だけか？ 九十七人居るのだろう」

「ゴチャゴチャ言わない。まずはメモを取る」

「……………」

やはり、三千万という金の力は大きかった。悪戯ではとてもできるものではない。訳が判らないながらも、女に従うよりなかった。順平はペンとメモ紙を用意した。

「準備はできたか？ では告げる。聞き逃すなよ」

「まず国会議員から行くよ。はい、林田寛一郎」

「林田って、総理大臣の？」

「国会議員に、もう一人、林田寛一郎が居るのか？」

「居ないだろうな、……しかし、そんな馬鹿な」

順平の戸惑いなどにはお構いなく女は続けた。

「はい、次ぎ行くよ。同じ代議士、川上晋蔵、東京地検に行つて東義彦。はい、警視庁高木憲久、最後は会社役員黄田真一、はい、今回は、この五人だよ」
きだしんいち

「……この五人は、全員に知らせているのか？」

大きな金額が振り込まれているとなれば、順平としても女の話をもげにはできない。電話を受けながらも、自らの置かれた立場を知ろうと必死になっていた。

「鈍い男だな、林田君に林田君を知らせてどうする。それにそんな事したら、この五人だけが皆から狙われる。バラバラに教えている」

なるほどなと思った。今、知らされた五人とは、エントリーされた全ての人間が知る訳ではない。この五人は、あくまで自分に知らされた五人であって余所の人には、また違った五人の名前を教えているらしい。

酷いルールだと思った。狙う相手は教えても、狙ってくる相手は教えない。そうするとエントリーされた人間は、自分が誰から襲われるかわからない中で、自分が知った五人だけを狙う以外にない。メモをした内容をみた。そこには代議士、警察、検事など相当たる職業が名を連ねている。

「もう一度、聞く、これは悪い冗談か？」

「冗談で三千万払うか？ 必要ならもっと出すとも言ったろう」

「金の問題じゃない。……しかし、これは余りに酷い、いや汚い」

「何が酷いのよ？」

「検察や警察が戦いの相手では、警察に駆け込む事もできない」

「ピンポン、そうよ。この仕組みから抜け出せなくするには、警察や検察も必要なのよ」

送られてきた招待状を見た。余計な事は何も書かれてない。これでは、この手紙を手に入れた人を殺すゲームだと警察に駆け込んだところで、相手にはされないだろう。まして、その警察にも相手が潜んでいるとなれば、迂闊に警察にも行けない。

段々と大変な事に巻き込まれていると思うのであったが、今ひとつ順平はピントこなかった。それは女が気の抜けるような茶々や、合いの手を入れたりし、深刻に受け取れないような話し方をする為であるのか、それとも余りに馬鹿げた話しである為なのか、順平にもよくわからなかった。

「総理大臣は別として、他の人間も大物か？」

告げられた五人の事であった。

「超が付く大物だよ。ただ、それではお前が可哀想だから、今回はお前でも狙える小物も、少し混ぜたから安心しな」

「教えるのは職業と名前だけか？」

「基本は、そうだ、あとは勝手に君が調べる」

「調べられなかったら？」

「本気で相手を狙う気になったら、そのときは相談しな。年齢、住所くらいは教えてやるよ」

「……親切だな」

「当たり前だろう、このゲームは神様のものだよ。間違った相手を殺すような事があってはならない。世の中には同姓同名の者もいる」

「しかし、それって、俺の住所なども知られるんだろう」

「当然、そうなるわ」

「……親切と言ったのは取り消す。余計なお世話だろうに」

「くぐぐ言わずに運命を受け入れ、相手を倒すのです。その為に身を隠す、人を雇う、武器を買う、資金は幾らでもありますから」

「待て、待て、そんな事より、もう俺も狙われているんだな？」

「いえ、貴方は、すこぶるラッキーです」

「ラッキー？」

「最後の指名だったから、今は誰にも貴方の名前は知られていません」

「どうして？」

「頭の悪い奴だな」

「こっちは訳が判らないのに、その言い方はないだろう」

「少し考えればわかるだろうに、いいか、指名を受けた順から、神の手紙は送られている。そのときに同時に相手の指名が伝えられる。しかし、最初に指名を受けた人間は、最初の一人なんだから、相手は、まだ存在してない。伝えようにも相手が居ない」

「神さんから指名をされた順に、連絡をしているのか？」

「そうだ、だから二番目に指名された人間は、最初の指名を受けた一人だけが知らされた。五番目の人間は、前の四人だけが知らされる」

「俺には五人の氏名が知らされている」

「六番目の人間からは全て五人の名前が告げられている。しかし、お前は最後の九十八人目に指名された。最後の指名の為、知らせる相手が居なくなった」

「なるほど、しかし、そうすると指名された最初の人間には知らせないのか？」

「ハンディだ、最初に選ばれる人間は強い人間、後から選ばれたお前が可哀想だろう」

たしかにハンディの意味なら、それもありかも知れない。総理大臣や代議士などの人種は、簡単に素人が狙える訳がない。

このときの順平にすれば、仔細しさいについてまで気にかける余裕はなかった。ともかく、まだ誰にも知らされてないと聞き安心が先立っていた。

「ラッキーでいいのかな、それで行くと、俺の名前は永久に出ない」

「おめでたい人間だ。それではゲームにはなるまい」

「しかし、規則的に言えば、俺の名前は出ない」

「二ヶ月後には新たな五人の名前が知らされる。そのときは、お前の名前も、当然知られる」

「何だ、また、名前を教えてくるのか？」

「当たり前だろう。お前の名前が永久にわからないんじゃ、メチャメチャお前は有利になる」

「それでもいいと俺は、思うけどな」

「つべこべ言うな。その後も二ヶ月に一度、一年間は、全員に五名の名前を知らせる。一年経てば誰もが三十人の敵を知る」

時間の経過とともに敵の名前を知る。しかし、それは一年後には、自らも多くの人間から狙われるとの意味でもあった。

最後に選ばれた妙によって、名前が外にでないのは結局、最初の二ヶ月だけであった。さす

がに、そんなに甘くはないなと順平は唇を噛んだ。ただ、どんな理由であれ二ヶ月は、誰にも自分の事は知られないとなれば、多少なりともほっとするものがあった。

「ところで、お前の立場はなんなんだ」

この減らず口叩く女は、単なる説明員に過ぎないのか、それとも別の役割を持つのかであった。

「私ですか？ 私はお前を選んだ神のしもべ、だから、お前に勝ってもらわないと困る立場。まあ、お前のアドバイザーかな」

アドバイザーにしては、何とも頼りない神のしもべだと思った。

「では君は、俺以外の神から指名を受けた者との接触はないと思って良いのだな」

「ありません。そんな事したら、余所の神様のしもべに叱られるわ」

他の指名をされた人間と、この女が自由に接触できたのでは、自分の情報が筒抜けになる。本当か、嘘かはわからないが、とにかく今は、女の話信じるよりなかった。

「では、もう一度、確認する。次の名前が知らされるまでは、俺は安全なんだな」

「そうです。連絡は神さんの携帯電話を使い、私が五人の名前を知らせます。そのとき、貴方の名前も他の人に知られる時です」

「何で、携帯なんだ。文章でくれ」

「手紙は大変なんだよ」

「変わらないだろう」

「細かい事に拘る。お前の悪い癖だぞ。それと良く聞け。お前は神の御加護により有利な条件からのスタートとなった。それを活用しない手はない。これが私の最初のアドバイスだ。この期間を有効に使い相手を仕留めるのだ。わかったか？」

「神の御加護？ そんなものが本当にあるのか？」

「馬鹿な男だ、どうしても神様の存在を信じないのか？」

「そんなもの信用できる訳はないだろう」

「どうも、お前は疑り深い性格で救いようがない」

「……………」

「それでは一つ、神の予知能力を見せてやる」

「予知能力？」

「そうだ。これは特別だぞ」

「……………」

「お前に知らせた人間で最初の犠牲者は、会社役員の黄田真一だろうな。期間は、ここ一ヶ月の間だ」

「黄田真一？」

「私の占いに出たから間違いはない」

「俺は殺さないぞ」

「誰がやるのか私は知らない。しかし、お前がやらなくても誰かにやられるのは確かだ。ただ、良

く聞けよ。この男も、力の無い男だ。その意味ではお前と一緒にだ。力が無かったら、この男のようになる。それを順平も肝に銘じておけ」

「それは脅しか？」

「アホか、妾が親切で教えているものを。仕方ないな。それなら、もう一つ教えてやる」

「何を」

「おそらく、黄田と同じ頃に東京で警察官が一人死ぬ。それも、この大会によって殺される運命にある男だ。総理大臣なんかも近々襲われる口だな」

「そんな馬鹿な！」

「また信用をしないのか？ 本当に救いようのない男だ。それでは神の力をもう少し見せましょうか？」

「神の力？」

「そう、いいか、この後に携帯電話の電源を切りなさい。そして携帯電話に向かい神のしもべ、九十八番と強く念じるのです」

「それで何が起る」

「いいから言うとおりにしなさい」

順平は、女に言われるまま、携帯電話の電源を切ると神のしもべ九十八番と念じた。

「順平、聞こえるか、私だ」

順平は、はっとした。一瞬、自分の頭の中に、さっきの女の呼ぶ声が聞こえたと思った。

「順平、返事をしろ、聞こえているのだろう」

聞き間違いではない。手にした携帯電話を見た。電源は切れている。いや、間違いなく携帯電話からの声ではない。その声は確かに頭に響いてくる。

「……………」

「妾はいつでも、お前の馬鹿な頭には入れる」

「……………」

「これが神の能力だ。少しはわかったか？」

「……………」

「何とか言えよ、順平」

聞こえている。確かに女の声は鮮明に順平の頭に語りかけてきている。順平は、この感覚はなんだと思った。一瞬、超能力という言葉が順平の頭をよぎった。

「……こんな能力があるのなら、何故、携帯電話など渡す」

「あのな、お前だってフルマラソンの距離を走れと言われたら疲れるだろう。しかし、同じ四十キロの距離でも車なら楽だ、違うか？」

「それは、そうだけど」

「神の能力を使えば、私も多くのエネルギーを消費する。お前の為に私が、そこまでの義理はない。楽をするために携帯電話に代理をさせて何か悪いか？」

「悪くはないが……………」

こちらが話した事が電話無しで、正確に通じている。何とも不思議な感覚に内心、順平は戸惑っていた。

「だったら神様からの授かり物の携帯電話であるぞ。大切に扱えよ」

「この電話を使えば、お前を呼び出せるのか？」

「はい、では電話番号を言うから、頭にたたき込みなよ」

「さて、メモするから」

「心配無用。必ず覚えられる」

「俺の記憶力は、そんなに良くない、一度聞いたくらいでは覚えられない」

「お前の頭が悪いのは知っている。神の力で覚えさせてやるから安心して聞け。電話番号を言う。はい、五一〇を押したら次は、八そして一〇五九二だ。……どうだ、すぐ覚えたろう」

「……覚えた。しかし……」

「しかし、なんだ？」

「これは神の力でも何でもなし。単なる語呂合わせだろう」

「正解！ ゴット、ハ、テングクニでした。一言言ったろうメモなど不要だと」

そう言うと女の声は順平の頭から、すっと消えていった。

最後に女にしてやられたと思いながらも、電源を切った神さんの携帯電話を握ったまま、しばらく順平は眉をひそめ立ちすくんでいた。

会話はともかくとして、不思議な現象であった。確かに女の声は頭に響いてきた。それは紛れもない事実であった。

テレパシーという言葉聞いた事がある。器具を使わずに頭と頭で会話ができる能力。超能力の一つとされるものである。状況からすれば、女はそのような力を使い、語りかけてきたとしか思えない。

奇妙な能力、これを人に話してもおそらく信じては貰えない。しかし、順平自身、間違いなく経験した。自ら経験をただけに否定のしようがなかった。順平にしても常識的には神々の集団というものが、存在するとは思えない。しかし、人の能力を超えた特殊な能力を使える人間を、神と称するなら、それは神であるのかも知れない。

しばらく目を細めて考えていた順平であったが、話しの内容が内容である。リストにあがった五人の経歴は調べる必要があった。

インターネットを使い告げられた名前を調べた。川上晋蔵野党代議士、警察庁田所参事官、世田谷で黄田金融を営む黄田真一。警視庁の高木憲久についてはわからなかった。ネットで調べられないとなれば、おそらく警察幹部ではなく、現場に近い警察官であろうと思った。

六

それが三月十五日に神坂順平の身に起きた出来事であった。あれから一ヶ月、女が小物と称した黄田真一が死んだ。そして、もう一人、大畑という警察官が殺されていた。

今日までは平静を装い、いつもの生活をしてきた。しかし、ここにきての警察官殺害や会社役

員殺害の発生は、さすがに順平にしても大きな衝撃であった。女の話しを全て信用した訳ではないが、神々の代理戦争という名の元に何かが始まろうとしてる。それは紛れもない事実であった。いや、すでに始まっているのだ。

順平は、女から告げられた五人の名前を記した用紙を前に、どうしたものかと思案した。しかし、何をしたらよいのか浮かばない、かといって逃げるにしても五月十五日までは、自分の名前は外にはでないとなれば、まだ余裕があった。

会社もあれば生活もある。もう少し様子を見る、それが順平の出した、そのときの結論であった。とはいえ気持ちが滅入るのも仕方なかった。

翌日、重い気持ちを引きずり順平は職場へと向かった。淡い春の日射しが眩しい日だったが、順平の気持ちは沈んでいた。

朝、順平の同僚である ^{さくらいあやこ} 櫻井綾子が順平の顔色の悪いのに気付いた。恋人という訳ではないが、会社ではわりと親しい二人である。

櫻井綾子はわりと小柄の娘である。性格は明るく、からっとしていた。順平の方が少し年上であったが入社当時に若干、綾子とはいわくがあり、それ以来、順平は綾子に対しては頭があがらなくなっていた。

「順平君、どうしたの？ 顔色が悪いよ」

「そうか？ べつになんでもないけど」

「ほんとう？ 少し青いよ」

「……………」

一瞬、順平は迷った。迷ったが、何れ会社を辞める事になるかも知れない。綾子には、そうなる前に話しておこうと思った。

「綾ちゃん、少し話しがある」

そう言うと順平は、部屋の隅の方に歩いた。まだ、会社が始まるまでには時間があった。部屋にいる従業員の姿も疎らである。それでも周囲の人には聞かれたくはなかった。

普段、人目を避けたりしない順平であっただけに、少し心配そうに綾子は順平の後に従った。

「俺、会社を辞めるようになるかも知れない」

驚いたように見た綾子の顔が、急に真剣な表情に変わった。

「いきなり、どうしたのよ」

「詳しくは話せない。どうも何らかの事件に巻き込まれたらしい」

「事件？」

事件と聞き黒目の多い愛らしい瞳をくりくりとさせ、食い入るように順平を見た。

「しばらくすると総理大臣が襲われる。そうなったら俺も身を隠す。会社にもいられなくなると思う」

順平の話しに眉をきゅっと寄せた綾子が、睨み付けながらいった。

「冗談ばかり言って、私、真剣に心配していたのに」

総理大臣が襲われる。考えて見れば会社の立ち話で、このような話しをいきなりしても、信じ

る人は居ないだろう。それは綾子にしても同じだと順平も気付いた。

「バレたか」と順平は笑いを浮かべた。

「まったく、もう」

口元を尖らせて、再び、順平を綾子が睨んだ。

「御免、余り、綾ちゃんが真剣に聞くから、つい。……少し気分が悪いだけ、心配はいらない」
そう話すと順平は、綾子のそばから離れた。

第二章 三つの事件

七

さくらいけんご 櫻井健吾が九州の警察署から、警視庁人事課監かんさつ察室に転属となったのはこの春からであった。

櫻井が配属された監察室とは主に、警察内部の不祥事や警察官に対する指導などを行う、いわば警察内の警察といった部署にあたる。その櫻井に公安部の大畑から電話があったのは、大畑が亡くなる前日であった。

その電話で大畑は櫻井の予定を聞いてきた。何か問題が生じたと感じた櫻井は、急ぎなら、これからでも構いませんと話したが、大畑の方で、これから人に逢うので数日後にして欲しいと言ってきた。それで二日後に会う事にしていた。ところが翌日、その大畑の遺体は日比谷公園で発見された。

櫻井にしても大畑からの電話は気になった。前日の電話と絡んだものであれば、監察員である自分に伝えたいとなれば、それは警視庁内で、何か問題があったと受け取るのが普通の考えになる。

大畑の遺体が発見されたのは警視庁から、それほど離れてない日比谷公園であった。大畑は正面から鋭利なナイフの様な物で、心臓を一つ突きにされていた。抵抗した様子もなく、ほぼ即死であったというのが、検視官の見立になる。

殺害された大畑は公安部に所属する捜査員。公安所属の捜査員は、隠密性の高い仕事に従事している為に、事件関係者に逢う場合でも、警察官としての身分を隠したまま会う様な場合が多々あり、それだけに身を守る術も熟知しているし、いつでも細心の注意をしているのが公安の捜査員であった。その大畑が抵抗もせずに、たった一撃で殺害される。そこに先にあった電話の件を考え併せると、もし大畑が逢おうとしていた人物が、警察関係者などの顔見知りであれば、それなりに殺害された状況に納得がいく。

あくまで監察官である自分のところに電話があった。そこからの推測とはいえ、そうなると現職警察官を同じ警察組織の人間が殺害した可能性もでてくる。

勿論、捜査官という危険と隣り合わせの立場にいた大畑の死は、自分への電話とは無関係なところで起きた可能性も否定はできない。しかも、現時点では何の証拠もなければ、大畑が誰に逢おうとしていたのかさえわからない。捜査に予断は禁物である。そして捜査は現場の警察官が

行う。自らの与える影響力を考えれば、櫻井は自分の考えを捜査本部に話せるものではなかった。大畑殺害の捜査本部ができると、捜査本部には自分の考えは述べずに、大畑から殺害前に電話のあった事だけを櫻井は告げていた。

それに櫻井は大畑の電話に、もう一つの引っかけりがあった。

警視庁には自分以外にも多くの監察員はいる。その多くの中から、転属間もない顔さえ知らない自分に、大畑は電話をしてきた。これをどのように考えるかであった。

櫻井は自分の考えを元に大畑が、何の事件を追っていたのか内々で調べ始めた。

櫻井は大畑の件を調べているうちに、大畑と組んで捜査にあたっていた高木憲久という男に注目をした。二人は先輩、後輩の間柄で、高木が公安部に所属していたときは、二人で組んで捜査にあたる親しい間柄にあった。しかし、おかしな事に、その高木憲久は櫻井が警視庁に来る数ヶ月前に、公安部から刑事部に移っている。

おかしいと考えるには理由があった。国家公務員試験に通ったキャリアと呼ばれる幹部職員であれば公安であっても移動命令によって、簡単に移動をする。しかし、高木は、現場からのたたき上げ、所謂ノンキャリア。

公安部の警察官になるには、警察学校でも上位であった者が、自ら望んで特別な講習を受けて始めてなる事ができる。高木も、その狭き門をくぐり公安警察官になっている。その男が僅か数年で公安から刑事課に移動となった事に、櫻井は何か腑に落ちないものを感じた。

八

大畑の死は現職警察官の殺害である。警視庁内は色めき立った。事件の捜査は捜査一課、吉田課長が陣頭指揮を執る事になった。そこには同僚の死に対する復讐心や、警察の面子にかけての思惑などが渦巻き、警視庁としても、多くの捜査員を投入していた。

その捜査員の中に高木の姿もあった。高木は公安部では大畑の先輩であっただけ、大畑の死に対して深い憤りを持っていた。

高木は数ヶ月前の移動を、思い出さずにはいられなかった。

高木の上司であった鴨田は、刑事部係長に空きが出た。君に取っては悪い話しではないと言って、高木に刑事課への移動を勧めた。当時、高木は何故、自分が刑事部への思いがした。しかし、刑事部捜査一課は殺人などの凶悪犯を扱う、警視庁の花形部署である。まして、その係長であれば公安部からとはいえ、抜擢であるに違いはない。高木にしても異存はなかった。

今更、あのとき、ああだったらと考えてもどうにもならない。それでも、もし自分が刑事課に移らずに、大畑と行動を共にしていたら、あるいは大畑の死はなかったのではと考えると、いっそやりきれない気持ちになる。

刑事部に移ってから大畑との接触は途絶えていた。公安部はテロや思想的な犯罪について捜査を行う部署であり、その活動は極めて隠密性が高く、公安として独自に捜査を行う。刑事部は、一般的な犯罪を扱う事から、仕事の内容が異なる。隠密性の高い公安は、よほどの事でもない、警視庁内の他部署と連携して捜査にあたる事も無ければ、公安が得た捜査情報を他部署に渡し

たりする事もない。それだけに公安部員は同じ警察仲間との接触もさけるほど慎重である。それは、高木自身公安に居ただけに誰よりも知っていた。接触は失っていたが、大畑が殺されたとなれば話しは別である。後輩の死であるだけに、何が何でも敵は取りたいとの強い気持ちで捜査に望んでいた。

そんな高木であったが、大畑殺害の捜査から外れる事になった。警視庁管内で、大畑の死から数日後に、会社役員が殺害される事件が起きた。その事件を高木のいる四係が担当する事になった為である。高木は悔しいと思った。しかし、自分も組織の一員であり、部下を持つ立場である。大畑の件は同僚捜査員に任せ、殺された会社役員の事件を追い出した。

高木達が調べ始めた黄田真一は、世田谷で金融業を営んでいた四十二歳になる男であった。殺害されたのは、夜の十時くらい。事務所を出たところを、何者かによって背後から鋭利な刃物によって数カ所、刺され殺害された。

殺された黄田の評判は良くなかった。金融業を表看板にして、裏では法外な利息で貸し付けをしていた。取り立ても厳しく黄田を恨む人間は多くいた。そのうえ目撃者もいなかった為に初動捜査では、まだ、これといったものは出てなかった。

警視庁が二つの殺人事件を追うなかで、今度は、現職の総理大臣が五月の連休を使い、地元群馬に戻った際に狙撃されるという大きな事件が起きた。

幸にして総理大臣を含めて怪我人はなかったが、現職総理大臣に対する狙撃とあってマスコミは大々的に報じた。

3

総理大臣襲撃を知った順平は、急に落ち着かなくなった。仕事をしていれば気も紛れた。しかし、連休とあって、考える時間は山ほどにある。しかも、女の言った五月十五日は、刻々と迫っている。さすがに順平にも焦りの色が現れていた。まずは神のしもべなる女に、総理や黄田の件を確かめてみる。それが順平の最初に浮かんだ考えであった。

順平はゴット ハ テンゴクニと携帯電話の番号を押した。

「もし、もし、九十八番か？」

「ちょっとまでよ、番号で呼ぶのは失礼だぞ」

少し怒ったような女の声が聞こえてきた。

「勝手に言うな。俺は九十八番目に選ばれた。その俺に取り憑いたしもべなら九十八番だ。違うか？」

「たしかに、順平から見たらそうなるかもな。しかし、嫌だな、その呼び方。どうも、番号で呼ばれると囚人にでもなった気がする」

「お前の名前なんか、どうでも良いが、お前が言った二人にトラブルがあった。あれは本当に、代理戦争によるものか？」

「当然だろう」

「何故、当然なんだ。俺には理解出来ない。総理大臣がリストにあがるのも疑問がある。総理大

臣を指名しても、とても総理大臣が人を殺すとは思えない」

「総理が圧力を掛ければ警察でも自衛隊でも使えるでしょう。やはり、この国で一番、力があるのは総理大臣。神様から指名を受けた人間を次々に逮捕できるかもね。だから、それだけ人気もあるわ。それに総理なら警護も万全よ」

その言葉に、順平はえっと思った。

「ちょっと待った。それ、おかしくないか？ これは殺し合いと違うのか？」

「野蛮人め、規則的には必ずしも殺す必要はない。相手の自由を奪えば、それで良い。例えば刑務所に送る、毒を盛って植物人間にする。無人島に隔離をする。相手から戦う力を失わせれば、それで勝ち。勿論、手っ取り早く殺しても構わないけどね」

「そんな馬鹿な……お前な、前に相手の自由を奪うのは殺す事だと言わなかったか？」

「そんな話ししたかしら？ 別に殺しても自由は奪えるわ。言ったとしても間違っていないわよ」

「いや違う。これは重要だ。そこはきちんと言うべきだ」

「私を責めるな。確認をしなかったお前が悪い」

都合が悪いとみたのか、急に女の口がぞんざいになった。

「しかし、逮捕でもよいとなれば、話しは全く違うぞ」

「わかった、わかった。うるさい奴だ。じゃ、今、はっきりと言う。逮捕でも構わない。これで文句はあるまい」

女は、投げ槍的に告げた。神の使いにすれば^{しよせん}所詮は他人事である。確認しなかった自分が悪いと言われれば、その通りなのかも知れないが、ただ、これは大変な事になったと思った。人を殺すとなれば、殺す側も相当の覚悟が必要になる。それが逮捕でも構わないのなら、逆に容易に手出しができる。そうなると、俄然^{がぜん}、権力を持つ代議士や警察関係者は有利になる。

うーんと唸る順平の声がした。

「わかっただろう。順平のような社会の底辺でうろうろする人間より、権力者に指名が集中するのは当たり前。私は前に言った。お前が選ばれたのは奇跡だと、常識的に見て、お前が勝ち残るチャンスは、私には皆無にうつる。だから、私はお前が神様から選ばれたのが不満だ」

「おい、おい、神様が選んだ人間に、それは無いだろう。それこそ神様に失礼ではないか？」

「つい口を滑らした。これは神様には絶対に内緒だぞ。いいな」

「心配するな、どうせ神様と俺は、直接話せないのだから」

「そうだよ。話せる訳はない。心配をして損をした。まあ、私の気持ちは別としても職責だけは、全うするから安心しろ」

どこまで本気なのか、まったくつかみ所のない女であった。

「なあ、九十八番、これでは組織が使える人間と俺では余りに、ハンディが大きいとは思わないか？」

「うるさい奴だな。うちの神様は一式のドンでお前を選んだ。ハンディなど考えたら、お前は選ばれない。それに、さっきから九十八番、九十八番と番号で呼ぶ、非常に気分が悪い」

「じゃ、何と呼べばよい」

「そうだな、沖縄の青い海、青子と私を呼べ」

「あおこ？ おかしな響きだな。あおこって、沼などに繁殖する藻だろう」

センスのかけらも無いのかと、話しながら順平は苦笑いを浮かべた。

「藻じゃない、青色の子供だ、その何処がおかしい」

「まあ、別にお前が青子でいいのなら、俺は構わないけど」

「……さて、……では沖縄の子で、沖子はどうだ」

やはり、何処か、この女はピントがずれていると感じた。

「どっちでも構わん」

「あのな、これから、しばらく付き合う女の子の名前を、どっちでも良いとは何事ぞ」

ああ言えば、こう言う、全く面倒な女であった。

「わかった、わかった。沖縄を代表する子供。沖子、最高の名前だ。それに決めろ。ただ自分の名前だ、間違うなよ」

「アホか、私は神の使い、間違う訳はないだろう」

「それならよいが、ところで沖子、この戦いにペナルティはないのか？ 戦うのが嫌だと思えば、金を持って三年間ひたすら逃げる手もある」

幾ら金を積まれても、犯罪に手を染めるなど出来ないと考えていた順平にすれば、確かめたかった事の一つであった。

「無理だな、二年後には強制的に、五十人が脱落させられる」

「落とされるとは？」

「ポイントの低い順から、殺されたり犯罪者にされる」

「それは、どう言う事だ？」

「お前な、これは神様が仕掛けたゲームだよ。例えば、順平に殺人の汚名を着せて逮捕させる。後ろから近づいて刺し殺す。何でもできる。なにしろ、お前が何処に隠れようと神はすぐ知る事ができる。それでも逃げるか？」

「酷い話しだな」

「そう、だから、金も与えている。二年間何もしなかったら、権力者なら権力の座から引きずり降ろされて死ぬか牢獄行き。だから、総理や代議士であってもポイントを、稼がないとならない。すばらしいシステムだろう」

内心、順平は巫山戯るなどと思った。雁字搦めで逃げる事もできないように仕組まれている。さすがに、順平の顔色も幾分険しい物になった。

「海外に出たら、どうなる？」

「こっちは神様。逃げ切れると思うか？ 何処にいてもお前の場所は判る」

「……………」

「やっと自分の置かれた立場が、理解できたようだな。どうする、順平」

押し黙った順平に冷たい声が掛けられた。

「まあ、それがルールなら仕方ない」

「もう、質問はないね？」

「ある、お前は、本当に、こっちから聞かないと何も話さないからな」

「いや全部、話したと思うけどね」

「いや、話してない。大体、お前の言う大会のスタートはいつで、終わりはいつだ。肝心な事だ」

「あら、それも話さなかった？」

「話してない」

沖子の話しによると神々が大会の話しを決めたのが、今年の年始めの一月一日であったと言う。そこから十日ほど神々が指名する人物の選考を行い、一日に三人から四人の指名を順次したと述べた。

「すると、最初の指名は一月十日になるのか？」

順平は全く計算があわないと思いながら聞いた。

「神様の世界は、今でも旧暦のままだから一月一日は、あんたらの使ってる暦だと今年は、確か二月五日にあたるのかな」

「そうになると、そこから十日が最初の神様が代理人を指名した日となるから、こっちの暦では二月十五日が大会のスタートした日。三年後の二月十五日が終了だな」

「おそらくそんな所だ」

「おそらくかよ。全くいい加減だな……あれ、さてよ。俺の所に連絡が来たのは三月十五日だったよな」

「そうだよ。神様が指名した順に連絡をしている。最後のお前に連絡が行くまでに丁度一ヶ月を要した」

「……なあ、沖子。お前、何か勘違いをしてないか？」

「わらわが勘違いをしている？」

「ああ、たしかに俺に対しては、新たに五人の名前を知らせてくるのは、二ヶ月後であれば五月十五日になるよな」

「そうだ」

「それじゃ、大会のスタートしたのが二月十五日なら、一番初めに指名を受けた人にはいつ知らせる」

「それは二ヶ月後の四月十五日になるな。あれ、今日は五月三日……あれ」

「あのな、沖子。もしかして俺の名前は、すでに外に流れているのと違うか？」

「そのようだな。ピン、ポン」

「ちょっと待てよ！」

「そう怒るな。こうして話してられるくらいだから、お前は、まだ、殺されてないし」

「当たり前だ！」

「怒るなというのに。まあ、仕方ないだろう。そうになると、とりあえずは、すぐに、その部屋を

でる事だな」

沖子は、何でもないように言った。それが、また、順平を腹立たしく感じさせた。

「待て、俺には会社がある」

「そんな悠長に構えていて良いのか？ 逃げるが勝ちとも言う。それに下界は、今は連休ではないのか？」

腹は立ったが、今更、沖子と言い争っても仕方なかった。すでに名前や住所が誰かに知られているとなれば、何をおいても逃げるよりなかった。

「神様ばかりか、お前も、相当いい加減だ！」

少々呆れながら、沖子に順平は苛立ちを浴びせると電話を切ろうとした。

「なあ、順平、私はお前のアドバイザーだ、少しだけ話を聞け」

「あのな、俺は逃げないと駄目なんだ。お前とゆっくり話している暇はない」

「そう焦るな。逃げるのに車は駄目だぞ。ナンバーから足が着く」

「……わかった」

「それにな、お前の携帯電話の電源を切らなかつたら、お前の居場所は特定される」

「携帯も駄目か？」

「そうだよ、警察関係者や電話会社関係者なら調べられる」

携帯電話は、そのエリアをカバーする基地局、要は受信アンテナのある中継基地のようなものが、無数にあってネットワークを構築している。携帯電話を持っている人が、あっちこっちへと移動すれば、何処にあるか判らない携帯電話を呼び出すには、全国、全ての基地局で、その携帯電話を呼び出す電波を出さないとならない。一台の電話機のために全ての基地局を動かす。それでは余りにもシステムにとっての負担は大きい。その問題を解決するには、電話会社は、携帯電話が何処に動いたか事前に知っていれば、携帯電話の動いたエリアの基地局に対してだけ呼び出しを行えば済む。

現在の携帯電話の仕組みは携帯電話の電源を入れた時から、その携帯電話のIDのような物を近くの基地局に送信して、携帯電話の位置を常に携帯会社のシステムに知らしている。これが一般に言われる微弱電波である。従って、携帯電話を管理する会社は、携帯電話から常時でいる微弱電波から携帯電話のある基地局の位置を知ることができる。いざとなれば、その情報は警察でも利用が可能だと、女は順平に告げた。

「いいか、順平。お前の敵は、警察にも携帯会社にも居るかも知れない。そこまでの用心をしないと、生きてはいけないぞ」

「……俺から車や携帯まで奪う気か？」

頭ではわかっていた。しかし、田舎での車無しの生活は何とも不便なものになる。それだけに愚痴もでる。しかし、それに答えず沖子が淡々と続けた。

「タブレットパソコン、モバイル系、ネットにつながるの、これも駄目だな」

「警察が絡めばそうだな」

「携帯電話にしるパソコンにしる、まあ、ピンポイントで場所を特定するのは難しいけど、それ

でも移動経路や範囲の特定はできる。使うならその覚悟はしろよ」

「……俺から、全てを取り上げるのか？」

「私は忠告をしているまで、使いたければ使えばよい」

「お前は、俺のアドバイザーと言ったな」

「そうだ。私の立場としては、順平には生き残ってもらわないと困る」

「俺の携帯は使えない。それはわかった。この、お前が送った神さんの携帯電話はどうなんだ」

「神さんの携帯電話は特殊なものだ。使っても警察などに調べられない。安心して使いな」

「神さんの携帯で、よそに掛けるのは駄目か？」

「余所とは、私以外にか？」

「そうだ」

「無理だな。専用だ、余所とはつながらない」

「そうか、わかった。取りあえず逃げる」

沖子との電話を切ると、押し入れから大きな鞆を取り出し、それに必要なものを一纏めにした。携帯電話の使い納めだと思いながら、自分の携帯電話でタクシー会社に電話をしてタクシーを呼ぶと、携帯電話の電源を落とした。

田舎町の事である。車が使えないとなれば、電車などの交通機関の発達した場所でないと不便になる。順平は、県庁所在地でもある水戸に行く事にした。タクシーの中では、常に後ろの車に注意をした。追われている様子はなかった。それでも順平は、タクシーを降りると、しばらく駅周辺の人混みや、人通りの少ない路地を歩き、追跡者のないのを確認してから、駅近くのホテルにチェックインした。

部屋に入った順平は、フーと大きく息をした。とにかく沖子には驚かされた。まさか、すでに自分がターゲットになっているとは思わなかった。一応、当面の危険は去ったとはいえ、いよいよ神々の代理戦争の渦中に身を投じたと思うと、急に不安が襲ってきた。

ホテルの窓から外を見ると、楽しそうな人で溢れていた。五月の連休期間中である。会社勤めの人にとっては待ちわびた休み、無理もない情景であった。それだけに自分は何故、こんな部屋で缶詰にされなければ成らないのだと、その理不尽さに苛立つ心を抑えられなかった。

順平は五月の連休後半の数日はそれでも、じっとホテルの中で我慢をしていた。人から自分が狙われる。順平にすれば初めての体験だけに、人混みに入るのが怖いと思ったからであった。

九

総理大臣襲撃のニュースに触れ、櫻井綾子も驚いていた一人であった。連休に入る数日前に、会社で順平が述べた事が現実になった。偶然との思いも一瞬頭を過ぎたが、あのときの順平の様子を考えると、もしやとの不安になる。

綾子は何度も、順平の携帯電話に連絡をしたが、順平の携帯電話には繋がらなかった。綾子は順平の友人である尾道や有田にも聞いてみたが、やはり順平とは連絡が取れないと聞かされた。

不安な気持ちは日増しに強まった。そんな自分の気持ちが嫌で、連休が終われば順平は、何事

もなかったように元気な姿を現すと言い聞かせていた。しかし、連休が終わっても、会社に順平は姿を現さなかった。

その頃、順平は水戸のホテルに居た。連休が終われば順平にしても会社への連絡をしないとならない。順平はホテルの電話を使い、勤め先である中原商事に電話を入れた。

しかし、順平にしても会社にどのように話して良いかわからない。綾子なら上手くやってくれるだろうと思うと、綾子を呼んでもらった。

順平からの電話と知った綾子は、それだけでもほっとした。

そんな綾子に順平は済まないが、しばらく会社を休むと伝えた。しかし、しばらく休むと言われただけでは、綾子にもどうしようもなかった。

「前に話した事が原因なの？」と、小声で綾子が聞いてきた。

総理大臣が襲われると告げられた事を指してであった。

「まあ、そんなところだ」

「今は、何処にいるの？」

「水戸、ともかく逃げた。くわしい話しは後ですから、会社にはしばらく休むと、適当に話しておいてくれないか？」

「すぐ片づくの？」

「それも、わからない」

「じゃあ、いつまで会社に休みを出すのよ、それに連休明けよ」

綾子にしても、適当にと言われても困るのであった。まして、連休明けでは、何日も休む口実は、なかなか浮かばない。

――そうだよな、連休直後だもの。困ったなと順平も考え込んでいた。

「……取りあえず足の骨でも折った事にしておく？」

「そうだな、それでいいや。後は綾ちゃんに任せるから」

綾子も仕方ないと思った。

「それで、いつ会えるの？」

「少しバタバタする。少し待つて欲しい。後から必ず連絡するから」

「……なるべく早くしてね」

順平からの電話が切れた。順平は無事だった。その事に安心したが、一体、順平の身に何が起きているのかと思うと、再び綾子は不安になった。

取りあえず会社への連絡は終わった。さて、どうするかと順平は考えた。

翌日、順平は水戸のホテルを出ると、そのまま水戸駅から常磐線で東京の秋葉原の電気街に向かった。水戸から秋葉原は乗り継ぎさえ良ければ一時間半もあれば行ける。

連休明けの日中のためか、電車はわりと空いている。それでも、順平にしたら気持ちのよいものではなかった。電車の中でも自然と周囲に目を配る。人が目の前に立てば、はっとする。電車に乗っている一時間半という時間が、これほど長い時間とは思わなかった。すっかり萎縮してい

る自分を感じた。人から逃げ回る生活が自分を変え始めたと感じた。

それでも順平は、今に見ていると自分自身を、奮い立たせていた。

順平は電車を降りると秋葉原の電気街に足を進めた。そこで幾つもの電器店を回り電子部品などを多数購入すると、また、水戸のホテルへと戻った。

順平が秋葉原に行ったのには理由があった。神のしもべと称する女は逃げても場所が判ると言った。今の時代である。携帯電話を送りつけて場所を特定できると言われれば、携帯電話に位置を検出するGPS機能が仕込まれている程度の想像はつく。

元々、順平は理工系の大学を出ているので、その辺の知識は持っていた。GPSの件だけではない。沖子は専用の電話だと述べた。実際に違う場所に掛けても使えなかった。おそらく一般の携帯電話とは違う周波数や信号方式を使っている。その辺についても調べてやると思った。その為に、順平は、測定機器や電子部品などの必要な機材を、秋葉原の電気街で探してきた。

十

水戸のホテルに戻った順平は、様々な電子部品や機器をホテルの部屋で、夢中で組んだ。パソコンのプログラムも書いた。勿論、携帯電話を調べる為にである。

それは、逃げ回る退屈な日々から、しばらく振りに解放された日々でもあった。狭いホテルの部屋ではあったが、目的を持って何かに夢中になれるのは、こんな素晴らしい事であったのかと、思わぬ発見に順平の顔に生気が宿っていた。

「できた！」

静かな部屋に声があがった。乱雑に置かれた、様々な剥き出しの電子部品を前に、満足そうな顔をした順平の姿があった。

(まずは、使われている周波数がどのようなものか調べないと……)

電子部品と繋がったパソコンを起動させ、計測用のプログラムを立ち上げた。

「よし」と自分に言い聞かせると、順平は神さんからの携帯電話で女を呼びだした。

「九十八番出てこい」

「おい、九十八番はよせと言った。沖子さんだろう」

「ああ、済まない、それじゃ沖子」

「さん、はどうした？」

「何処かに忘れてきた」

「呼び捨てとは腹の立つ男だ。じゃ、少しお仕置きをしないとな」

「……………」

「お前、この前、逃げる事を話したな」

「ああ」

「今、お前が何処に居るか当てようか？」

「何処だ」

「水戸駅近くのホテルだろう。どうだ、これでも逃げられるか？」

どうしても女と話す時は、携帯電話の電源を入れないとならない。携帯電話にGPSの機能があれば、場所が知られて当然だと思ったが、その事を話す必要はなかった。

今日の話は楽であった。別に沖子から聞きたい話がある訳ではない。携帯電話の信号を調べる為の通話である。順平にすれば単なる無駄話でよかった。

「驚いたようだな、神から逃げられるとは思うな」

「そっちで居場所が判るのなら、たしかに逃げようもないな」

「そうだ、ところで順平は数日前に、東京の秋葉原に何のために行った」

その言葉に順平はあっと思った。秋葉原に行った時には、用心して神の携帯電話の電源は切っておいた。電源を入れたのは水戸のホテルに戻ってからである。それは絶対に間違いない。てっきり携帯電話のGPSで居場所を調べていると思っていただけに、順平を慌てさせた。GPSで位置を追っていたのでなければ、跡を付けられたのか？ いや、そんな事はない。人に見張られるのを恐れた順平は、常に用心をしていた。山手線では閉まるドアに飛び乗るような事もしていた。

「……………」

「どうした、何を黙っている」

「……あのな、神様のしもべなら、俺が秋葉原に行った理由などお見通しだろうと思った。それが判らないのに驚いた」

何でもよかった、自分の気持ちを悟られないように、適当に言葉を繕った。

「言っただろう。神様の力を使うのは疲れる。聞いた方が楽だから聞いた」

「だったら好きなように調べてくれ。それよりも、ルールは前に話した以外にないな」

順平は、秋葉原の話から話題を変えたかった。

「ああ、相手を葬ればよいだけだ、手段はどんな手でも良い」

「よし、わかった。それだったら先制攻撃を仕掛ける」

「ほう、やっとやる気を出したか、さあ何をする」

「簡単だ、これから俺の知っている相手に連絡をする」

「連絡？」

「別に、敵と連絡を取り合ってもルール上の問題はないだろう」

「何をしても勝ち残れば良いのがルール、まあ、問題はないな。しかし、それでどうする」

「告げられた人名のリストを交換しあう」

「やはり、お前は馬鹿だな。お前の知っている相手が、全てお前を知っている訳ではない。お前は知らない相手にまで、お前の存在を教えるのか？ それが判らないとは呆れる。それに、敵であるお前に本当のリストなど出してくると思うか？」

「なるほど、そのような考えも出来るか。困ったな。では後ひとつ聞きたい二年後には五十人脱落させると言ったな」

「ああ、そうだ」

「沖子は、そのときボーダーラインをどの程度と見ている」

「最低一人、処理すれば残れるな」

全員で九十八人、半数の人間が一人を倒せば、その時点で四十九人が残る。複数の人間を倒す者も居るだろうから、間違いなく一人倒せば半数には残れる。

「二年で一人だな」

「やる気になったか？」

「沖子から、俺は、どのような情報が得られる、例えば、逃げた相手が何処に隠れているとか？」

「それは駄目だな、私が話せるのはルールや、身を守る術とか世間一般の話しだけだな」

「まあ、勝手にやれという事か」

「そんなところだな」

「ところで、この大会はいつから始まった」

「そんなものを聞いてどうする？」

「戦術を練るための参考にする」

「お前の頭でか？ まあ、いいだろう」

沖子の話した事によれば一回目は、一五七〇年から一六〇〇年の三十年の期間を掛けて行ったという。

「ずいぶん長い期間だったんだ」

「そうか、別に長いとは思わないが。まあ、最初だから三〇年でやろうと決まった」

このとき参加者は戦国武将と呼ばれた人物が中心で上杉謙信、武田信玄、織田信長、羽柴秀吉、明智光秀、徳川家康などであったと話した。

「最後まで残ったのが、羽柴秀吉、後の豊臣秀吉と徳川家康だった。かなり豊臣秀吉はいい線までいったんだけどな」

「たしか、秀吉は関ヶ原の前に死んでしまった」

「ピンポン、一五九八年、神が決めた期限の二年まえだな、結局、そのとき勝利したのが家康だった。良く聞けよ。その時、家康をリストアップしたのは、なんと沖繩の神様だ」

「それは凄いな。沖子が仕えるニカ何とか様か？」

「ニライカナイ様だ。……残念だけどニライカナイ様ではなかった」

「同じ沖繩の神様というだけか、それじゃ意味ないだろう。そのときニライ様は誰を押した」

「……武田信玄」

「……武田？ 長篠の戦いで負けているな。違うな、長篠で負けたのは武田勝頼か？」

「そうだ」

「そうすると武田信玄は、そのずっと前に亡くなっている」

「大会が始まって三年目の一五七三年に消えた」

「三十年続く大会の僅か三年目かよ」

「早かった。早いが、それがどうした？」

「開き直るなよ、開き直る位なら最初から、はしゃぐな」

「つまらん男だ。しかし、家康を選んでいたのは沖繩の神様に違いはない」

「わかったよ。それが最初なのは、今回は二度目か？」

「いや、今回は三度目、次は幕末から明治にかけてだったな。一応三百年を越えない範囲と期間が決まっている」

「年代では？」

「一八五〇年から一八八〇年の三十年だ」

「おかしいだろう、何で今回だけ期間が三年なんだ」

「別に期間は、神が決める事、かまわんだろう」

「そうはいかない。俺だって関係者の一人だ。今まで三十年でしてきたのに、今回だけ三年とは余りに短い」

「それはだな、神からの手紙を作る際に事務手続きのミスがあった」

「手続きミス？」

「事務方が三十年とすべきところを、ゼロをつけるのを忘れた」

「それで三年かよ」

「別に何年でも文句はあるまい、すべて神が決めた事。ただな、神様も、三年で一人だけの優勝者では可哀想だと思ったのか、今回は十人が残れるようにしてある。これまでは一人だけだぞ。ずいぶん神様は優しいと思わないか？」

「何だよ、残れるのは優勝者だけではないのか？」

「何人残ろうが、お前には、関係なからうが」

「すぐ消されると思っているのか？」

「じゃ、逆に聞くが、残れる自信があるのか？」

「自信ではないが、こっちは命がけ、その十人に残るよりないだろう。ちなみに前回の参加者は誰だ」

「西郷隆盛、吉田松陰、木戸孝、大久保利通、坂本龍馬、高杉晋作など、勝ち残ったのは伊藤博文だ」

「そのとき沖子の神様は誰を推薦した」

「……吉田松陰」

吉田松陰は長州藩士の思想家で、明治維新の精神的な指導者のような人、ただ、沖子の言う年代の初期に政府の逆鱗げきりんに触れ幽閉ゆうへいされていた。一八五〇年の末には死罪となった人物である。

(これも、また早々とリタイヤしているな)

「順平、何故、聞いてこない」

「いや、別に聞いても仕方ない」

「……ああ、そうだよ、このときも早かった」

「そう、ふてくされるなよ」

(沖子の神様とやらは、いつでも最下位近くの争いをしている。なぜ、自分みたいな者が選ばれたのか、わかるような気がする)

ふと、そう思った時、順平は妙な感覚に襲われた。

(これは架空の話だ、それにどうして、こうもあっさり引き込まれる?)

架空の話しと頭ではわかっている、そこには自分が選ばれてもおかしくないという状況を巧みに組み入れている。だから、ついつい話しに乗ってしまう。

順平は、間違いなく今、自分は沖子の話術の巧みさに操られていると感じた。

「三〇〇年を越えない時期に開催される大会か、メチャクチャ運が悪かったな……」

前回は一八八〇年であれば、単純に三〇〇年を足すと西暦二一八〇年になる。そこから三〇年を引いても、第三大会は二一五〇年頃の開催になる。開催時期が百年以上早い。こういう事を平気で話してくる。どうせ旨く逃げるのだろうと思いながら、順平は沖子に問うてみた。

「早すぎだ、開催時期が、余りにも早すぎるぞ」

「あのな、神様は、そんな細かい事は気にしない方々だ。ごちゃごちゃ文句を言うな」

なるほどと思った。ここで神様を持ち出してきた。何か不都合があれば、人と違う神様を引き合いに出し、全て終わりにできる。

(神という言葉を与えられたときから、俺の頭は麻痺させられていた……)

順平は、やられたなと思った。沖子の話は、間違いを含めてきっちりと計算がされている。それが今日の話しではっきりとわかった。

詳しく歴史まで調べている女が、幾つもの間違いを平気で話したりはしない。まして、嘘で固めた話なら矛盾のない理路整然とした話しができる。ただ、理路整然とした話しは堅苦しくなり、こちら警戒してかかる。しかし、冗談とも本気ともつかないような話しに間違いまで含んでいけば、こちら真剣みがそがれ気軽に応じられる。

巧みに心理を突いてくる女、順平は大変な女を相手にしていたなと思うと、思わず苦笑が浮かんでいた。

「……しかし、リストに載せられた身とすれば、文句の一つも言いたくなる。なあ、ここで相談だ。沖子、神様に進言して開催時期を後百年遅らせてくれ」

「馬鹿か、神様の決めた事、変更は出来ない」

「駄目か？」

「駄目だ」

「……俺、何もする事がなくて死にそうだ」

「適当に、金を使って遊んだらいい」

「狙われている。そんな気分になるかよ」

「どの道、短い人生になる、今のうちに楽しめ」

「沖子！ お前、俺がすぐに消えると思っているのか？」

「あ、た、り、ま、え、だ」

「お前は、俺に勝って欲しくはないのか？」

「今の言葉は、私の心からの感想。また、これが良く当たる」

「……………」

「どうした、順平」

「まあ、お前が、そんな気持ちでは、とても俺は勝てない」

「諦めたか？」

「こっちは、命がかかっている、簡単に諦められるか」

「やっとやる気になったと見える。良い事だ。とはいえ、お前は小物、そのハンディがある。神様も咎めたりはしまい。ご褒美だ、数日早い頑張れるように、次の五人を教えるよ。ハイ、メモの用意」

そう言うと沖子は、五月十五日に伝えてくる予定の、五人の名前を告げ電話を切った。

十一

沖子という女にはやられたとの苦い気持ちが起きた。しかし、それよりも順平にとって不味いのは、携帯電話の電源を切って東京に行ったのに、それを知られていた事であった。

携帯電話による位置探査でなければ、これからも順平の居場所は沖子に知られる。携帯電話でなければ、いったいどうやって場所を知る事ができたのだと、小首を傾げながら順平は考えていた。

そのとき、順平の目は携帯電話の周波数を調べていたパソコンの画面にあった。順平の目が計測プログラムの画面に釘付けになった。

(何だ、これ、……携帯電話から電波がでている)

そう思った順平は手にしていた携帯電話を見た。携帯電話の小さなモニタ画面には何も表示がない。当然である。何か気味悪さを感じた順平は、沖子との話しを終えると、携帯電話の電源を切っていた。しかし、パソコンの計測画面には、今でも携帯電話から電波がでているようになっている。――こんな手を使っていたのかと、少々順平は忌々しそうな表情に変わった。

電源を切っても電波が出ているとなれば、それは電源スイッチでモニタ回路と音声回路だけを遮断させれば済む、簡単な仕掛けとなる。携帯電話機に慣れ親しんだ者なら、携帯電話の電源スイッチを押して表示画面が真っ黒になれば、電源は切れていると思込む。その思い込みを利用したものだった。

順平は、少し口元を尖らしながら、携帯電話から出ていた周波数を調べだした。順平の手元には秋葉原で買い込んできた携帯電話に関する書籍が置かれていた。

その書籍と、携帯電話から出ていた電波周波数を付き合わせてみた。

(周波数が変えられている)

二度、三度、頭を縦に動かし納得の表情をした。その口元からは小さな声で「神さんなら、こんな仕掛けは必要ない」と呟いた。

携帯電話の仕組みに詳しくない人なら携帯電話に使われている周波数は、何か一つの周波数だけが使われていると考えてしまうかも知れない。しかし、実際は携帯電話会社は国から周波数を帯域として与えられている。

周波数帯域とは、周波数の集まった幅の事である。携帯電話会社は仮に八ギガヘルツ帯であれ

ば八、三〇〇ギガヘルツから八、六〇〇ギガヘルツのような幅で国から周波数帯域を与えられる。携帯会社では、この帯域の電波を例えば〇、二五ギガヘルツ刻みの周波数として使うと十二の違う周波数を携帯電話に割り振る事ができる。

トランシーバーは近くで同一周波数のものを使うと混信が起きて通信はできなくなる。携帯電話も同じで近くで携帯電話が使われていれば混信などを防ぐには、与えられた帯域の違った周波数を使わないとならない。携帯会社では周波数分割多重とか時分分割多重などと呼ばれる手法によって周波数を使いわけている。

神さんの携帯に使われていたのは、A携帯電話会社が得た周波数帯域のなかで、予備として未使用となっている周波数が使われていた。

その為に、A社の基地局を経由して通信を可能にしていたが、元々未使用の周波数のために、それを使えるように改造した携帯電話間でのやりとりしかできないのであった。

携帯電話を調べてわかったのは、神さんの携帯電話には、色々な技術が使われていたというものであった。それは、素人等が簡単にいじれるレベルのものではなかった。そこから見ても、また、数千万の金を自由に動かせるなどのこれまでの経過を考え合わせると、沖子の裏には、何か得体の知れない大きな組織が付いているのは間違いなかった。それだけに順平を益々不安にさせた。

当面の目的であった携帯電話は調べ終えた。さて、どうするかと順平は思った。この場所はすでに沖子に知られている。まして沖子の後ろにはおそらく大きな組織がある。

携帯電話から完全に電波をとめるは、今の順平は簡単にできる。しかし、電波をとめれば、それは沖子に知られる。それを避けるために取りあえず、今でも神さんの携帯電話からは電波を出していた。しかし、いつまでも出している訳にもいかない。順平は、携帯電話を持ってホテルからでた。

順平は慎重に周囲に目を光らせながら、しばらく歩き続け跡を付けている人間が居ないか様子をうかがった。付けられている様子はなかった。

いいだろうと思った順平は、携帯電話を取り出してじっと見た。その携帯電話からは二本のジャンパー線が伸びていた。それはGPS機能だけを切り離す為に順平が付けたものであった。何かあれば、この携帯は使う必要がある。その時でも居場所は知られたくない。その為のものであった。

すでに次の五人の名前を沖子から聞いていた順平である。当面は神さんの携帯電話に用はなかった。完全に携帯電話の機能をとめるだけであれば、携帯電話からバッテリーを外してしまえばよかった。姿を隠すと決めていた順平は、携帯電話のバッテリーを外した。これで沖子に場所を知られる事はなくなった。

順平は水戸から離れるために、タクシーに乗り那珂湊なかみなとし市に向かった。那珂湊市にあるホテル近くでタクシーを降りた順平は、近くの公衆電話から会社へと電話をして、綾子を呼んで貰った。

会社を休みだしてから十日余りが過ぎている。それも気にはなっていた。

綾子が電話口にでた。電話にでた綾子は、会社側でも詳しい怪我の様子を知りたがっている事や、順平の連絡先が判らずに困っている事などを伝えてきた。

順平も、そうだろうなと思った。ただ、今はどうにもならない。

「会社で病院の診断書が、必要だと言っているよ」

「だろうな……これ以上は会社に迷惑はかけられない。仕方ない会社は辞める」

「なにをいってるの！ もう少し私に話してよ」

「わかった、明日の夜、逢って貰えるか？」

「今日でも構わないわ」

「ある事情からパソコンが使えない。少し調べて欲しいものがあるんだけど」

「……それは良いけど」

順平は、沖子から新たに告げられた五人の氏名について綾子に、ネットで検索して欲しいと頼んだ。

十二

翌日の夜、順平は石岡市にある喫茶店で綾子と逢っていた。

見た目は仲の良いカップルの語らいに映る。しかし、話しの内容は深刻であった。順平は正直に、これまでの話しを綾子に打ち明けていた。

「順平君、私は、何処まで信じでよいかわからないわ」

「そうだろうな」

荒唐無稽に近い話しをしている。初めて聞いた綾子が訝しく思うのもわかるだけに、順平も苦笑いを浮かべるしかなかった。

神坂順平、悪い男ではない。いや、明るく闊達であるため、結構女子の間では人気もある。ただ、遊び好きである。

それほど綾子と順平の年齢は離れてない。綾子は短大卒で順平は大学を卒業している。その為に今の会社では綾子の方が、僅かに先輩にあたる。従って、入社当時から順平を知る綾子は良く、その金遣いの荒さを注意していた。

とにかく入社したての順平は、人当たりが良いせいか同僚の男友達も多く、会社帰りにはしょっちゅう酒を飲み歩き、週末ともなれば、やれ麻雀だゴルフだと男同士でワイワイ、ガヤガヤといつも集まって何かをしていた。そのために、お金に関しては、いつもオケラというのが入社当時からしばらく続いた順平の姿であった。

当時は良く綾子から借金をしていた。給料日には返すと言って。ただ、律儀であった。給料が入れば、どんなに手持ちがなくても、きちんと返しにきた。もっとも貸したお金を一旦、手渡され、そこで拝み倒される事も、ままあったが。ただ、どんなに困っても順平は、綾子以外からは借りようとはしなかった。それは綾子も知っていた。だから、順平にはつい甘くなっていたのかも知れない。

さすがに三十近くになると、余裕ができたのか、あるいは金銭感覚が芽生えたのか、順

平がお金を借りにくる事はなくなっていた。お金を貸すのは、楽しいものではない。しかし、それでも、順平が、全くお金を借りにこなくなると、それは、それで綾子にすると、少し寂しい気持ちにもなったものであった。

綾子との関係は、お金を借りなくなった今でも変わらない。年下でも姉さんの存在。そんな綾子であるから、順平も自分をさらけ出せる。

綾子にしても、順平が嘘を話す男でないのは知っているが、余りに話しの内容が現実離れしているため戸惑いは隠せなかった。じっと綾子は順平の顔を見ていた。眉は太く、鼻筋も通っている。少し角張った顔つきはしているが、年を追う事に男らしい顔つきになってきたと思った。

「はい、これが頼まれた五人をネットで調べた結果よ」といって綾子は、バックから数枚の印刷をした用紙を順平に渡した。

「ありがとう」

手にした印刷物に順平は目を通した。そこには自由建設党幹事長横島代議士、大丸代議士、警察庁金城次長、東京地検第二特捜部長東義彦検事など相当たる人物の名前があった。

「一人だけわからないわ。警視庁の佐田洋二郎という人はネットでは調べられなかったわ」

「そうか、おそらく、それほど高い役職ではないのだろう」

幾らネットが発達して情報が手軽に引き出せる時代とはいえ、現場などに勤務する人まで知るのは無理であった。警察関係者では、高木という男も調べられなかった。そうすると佐田という男も、また現場に近い人物となるのかも知れないと順平は思った。

「そう、これからどうするの」

「わからん。一つ判っているのは、そのうち俺は犯罪者に仕立て上げられる」

綾子が顔を曇らせ「滅多な事、いわないでよ」といった。

最初は元気そうに振る舞っていた順平であったが、さすがにしばらく振りに、親しい人と逢えた事で気がゆるんだのか、珍しく弱々しい顔を見せた。

順平は脳天気ともいえるくらい自由奔放な性格をしている。弱音を吐く姿は、日頃の順平からは尤も似つかわしくないものであった。それだけに、その姿に綾子はうずくような悲しみと不安を覚えた。

「これ、会社に頼みたい」

順平は、辞表とかかれた封筒を綾子に差し出した。

「本当に会社、やめるの」

「言っただろう。どっちみち追われるのは間違いない。これを見てください」

そう話すと順平はポケットを探り、皺になった銀行の残高証明書を取り出し綾子に見せた。

「……………」

「これが全ての証明だ」

綾子の顔色は青ざめていた。

十三

警視庁に勤める櫻井健吾は、東京で起きた会社役員殺害事件の件について、まさか茨城に済む妹から、話しができとは思わなかった。

妹の綾子から相談があると電話を貰ったのは、五月の大型連休の終わった直後であった。電話の内容は綾子の会社の同僚である神坂順平という男が、神々の代理戦争なるおかしな事に巻き込まれ困っていると、泣きつかれたものだった。

最初は余りにおかしな話しに、まともに取り合わずに聞き流していたが、その青年が数ヶ月前に、警察官殺害や会社員殺害を知っていたと聞かされたときは驚いた。ただ、良く話を聞いてみると、それらはすでに綾子と、その青年が逢った時には実際に起きて新聞などで報道がされていた事件となる。それでは疑えば、その青年が報道を元に綾子を担いだとも取れる。しかし、綾子が電話をしてきた、きっかけが総理大臣襲撃にあると聞き驚いた。その青年は総理大臣襲撃事件が起こる前に、総理が襲われると綾子に話したと言うのである。

本当に総理大臣襲撃を事前に知っていたとなれば、その青年の話した警察官殺害や会社役員殺害についても、俄然信憑性がぜんしんびようせいは高まる。もし、その青年が、これらの事件が起こるのを、本当に事前に知っていたとなれば、警察の人間として聞き流すのは出来るものではない。

櫻井は、順平に会ってみようと考えたが綾子は、今は、携帯電話も使えずに逃げているので、連絡は付かないと心配そうに話をした。逃げているとなれば、尚更であった。櫻井にしても、その青年の居場所を押さえておく必要があった。その為に警察を動かそうと考えた櫻井は、心と刑事課に籍をおく元公安員の高木に逢うことにした。

高木は現在、その青年の話した会社役員殺害の捜査をしている。高木については、それだけでなくとも一度は、大畑の件で話しを聞きたいと思っていただけに良い機会だと捕らえた。

櫻井は警視庁内の一室で、高木と向き合っていた。櫻井に大畑が死ぬ少し前に電話をしていたのは、高木も知っていた。高木は、櫻井から呼ばれたのは、それに関するものと考えていた。

「高木さん、これは真偽の方は不明です。ただ、一応知らせた方が良いと考えたのでお話しします」

高木は神妙な顔で頷いた。櫻井と会うのは初めてであった。

櫻井は太い眉に大きな目が精悍にみえた。人を見る目は公安の現場で鍛えてきた高木である。その目が、若いが結構、芯の強そうなキャリアさんだと教えていた。

「今、高木さんが追っている会社員殺害についての、奇妙な話しを聞きました。茨城の方でこの事件が発生するのを、事前に知っていた青年が居た様子です」

大畑の件で呼ばれたと思っていた高木にとっては、意外な話しであったが、追っている事件に関するものだけに高木の目が鋭く光った。

「その青年は、それだけでなく警察官殺害……これはおそらく大畑さんが亡くなった件、さらに

、総理が襲撃をされた件。この三件を事前に知っていた節があるのです」

高木の表情に明らかに不審の色が広がった。櫻井の話しが間違いなければ三つの事件全てに、その青年が何らかの関わりを持っている。それは見方を変えれば、あの三件は何らかの繋がりを持った事件ともなる重要なものであった。

「櫻井監察官、それは間違いのない話しですか？」

三件のなかには総理大臣襲撃なる希有な事件まで含まれる。捜査に携わる人間でなくとも驚くというよりも、そんな馬鹿など疑わしく思うのは当然であった。

「残念ながら、私も、その青年から直接きいた訳ではない」

「その話しの出所は信用できるのですか？」

疑念を押し殺すように高木がいった。

「私の妹からだ。妹の話によれば、その青年は神々の代理戦争なるおかしな事に巻き込まれたと話した」

高木の目が、一瞬、見開かれた。

「どうかしましたか？」

「その青年は、間違いなく神々の代理戦争と言ったのですね」

高木の口調には強いものがあつた。その口調の強さに、今度は櫻井が訝しげに高木を見た。

「高木さんは、神々の代理戦争を知っているのですか？」

それは高木にしても驚くべきものだった。神々の代理戦争なる言葉は、偶然に人の口にのぼるような言葉ではない。その言葉自体が何かの繋がりを持つのを暗示している。どうなっているんだと思いながらも、高木は西原から聞いた齊藤代議士の話を櫻井に伝えた。

高木の話が終わると櫻井も綾子から聞いたあらましを、高木に話した。

「こっちも神々の代理戦争だ……」といったきり高木は口を閉ざした。

一方は総理大臣の襲撃を予測し、方や代議士周辺から漏れている。これは嘘や冗談ではないと知った櫻井の表情も厳しいものがあつた。しばらく二人は、険しい表情のまま、二つの話しを繋ぎ合わせ考えていた。神々の代理戦争という名のもと、何か起きています。それは否定のしようのないものであった。

「……櫻井監察官の知っている名前とは誰ですか？」

「その青年によれば二ヶ月毎に五人が告げられる。話しの流れからして、妹が聞いたのは、その青年に知らされた二回目の五人となりそうです。そこには警察庁、金城康明次長や横島幹事長、大丸代議士、東京地検第二特捜部長、東義彦検事となっていた。これは妹が調べたから間違いはないと思う」

「すると総理大臣や黄田は一回目に、その青年が聞かされた人間となるのですか？」

「そのようです。ただ、残念ながら一回目の五人は、神坂の口から出たのを妹が記憶していたに過ぎないので、確実とは言えません」

櫻井は綾子から聞いた名前をメモしたリストを高木に示した。そこには横島、大丸代議士の名前や警察として佐田洋二郎などの名前があつた。

「政治家や警察関係者が多いですね。……神々の代理戦争、そんな馬鹿げた物が存在すれば、日本はメチャクチャにされてしまう……」

櫻井が硬い表情をしたままで頷いた。総理大臣を狙った事を取っても、これは新手のテロかも知れないと高木は考えていた。その考えは櫻井にもあった。

「警察内に指名された者が居れば、我々がもっと早く気付いても良さそうですが、それでもありませんでした」

「その青年には命の金といって、三千万の金が勝手に振り込まれていたそうです」

「勝手にですか？」

「何処かで口座番号を聞き出されたとしても、そこまでの相手なら周辺を洗っていたのもたしかでしょう」

周辺を洗うという事は、弱みを握って脅す事もできる。金と弱み、その様な物を使って口外できない状況を作りだしているのかも知れない。

高木も西原が、ある代議士と言葉を濁したのを、思い出していた。

「青年の話しを信じるなら、人に話せない、そのような状況が作られているのかも知れない」

神々の代理戦争の趣旨が、九十七名の自分以外の誰に狙われるかわからないものであれば、同じ組織に複数の指名者が居れば迂闊に話せない。いや、本気で、このシステムを誰かが考えたとすれば、周りに話せないようなトラップが、当然仕組まれていると考えるのが自然であった。

「そうかも知れませんが、警察を指名者に入れています。これでは警察にも話せなくなる。その青年も果たして、櫻井監察官に連絡をしてくるのでしょうか？」

「聡い人間なら、警察に対しての用心もしているだろうな」

少し困ったように健吾がいった。

「相当、厄介な問題になりそうですね」

「そう思う。これで指名者が本気で動き出したら、神々の代理戦争なる犯罪組織は裏に隠れて、実働部隊である指名された者による犯罪だけが表に現れる」

「嫌な構図です。警察にすれば難しい捜査になりそうです」

一般の殺人事件などでは、トラブルや怨恨などの動機がある。従って殺された人間を中心に、周囲を徹底的に洗えば犯罪者に行き着く場合が多い。しかし、今回のように誰を狙っても良いとの考えで事件が起きれば犯人と殺害された側に、犯行までの接点はない。犯行時という唯一の接点時に目撃者などがあれば良いが、なければ殺害された人間を幾ら調べても、犯人に結び付かない。そうなったら事件解決は難航するのは必至であった。

黄田殺害事件も、そのようなものであるのかも知れない。

「話しは変わりますが高木さんは、何か大畑さんと組んで、このような組織を追った覚えはありませんか？」

高木は移動前は、公安で過激派などの捜査をしていた。しかし、その頃、調べていた組織にも目立った動きはなかった。神々の代理戦争を企てる組織と言われても、心当たりはない。

「……心当たりはありません」

「そうですか、決めつけるには早計ですが、青年が大畑さん殺害を予告していた。ここから見て、大畑さんと神々の代理戦争に接点があったとは考えられませんか？」

高木が頷いた。

「高木さんも知っていると思いますが、大畑さんが亡くなる前日、私のところに電話がありました」

再び高木が頷いた。

「これはあくまで私、個人の考えです。大畑さん殺害に警察関係者が絡んでいる、そのような見方はできませんか？」

高木の表情が険しいものになった。同じ警察関係者によって大畑が殺された。警察の人間としては考えたくないものである。ただ、神々の代理戦争なるものと大畑につながりがある以上は、櫻井の考えを否定もできない。

高木は口を結んだまま、その事を考えていた。

「現状では、幾つかのケースが考えられます」

大畑が神々の代理戦争の手掛かりになるものを、掴んだために組織によって殺された。

大畑自身、神々の代理戦争の指名を受けていたために、他の指名者によって殺された。あるいは大畑に指名はなかったが、何かの拍子に警察内部の指名者を知ったなどであった。

「私は、青年が大畑さんの亡くなる時期を、知っていたのが気になるのです。大畑さんが神さんから指名を受けた者に殺されたとした場合、殺される時期の予測が果たして神さん組織にできるかとの疑問があります」

「神さん組織が、自ら手を下した場合は、予告が可能……」

「あるいは、こんな考えは出来ませんか？ 大畑さんや黄田という男は、このゲームのスターターの役割を果たしたとは」

「……それによって指名者は、ますます周囲に語れなくなる」

「ええ、最初は半信半疑でも、この二人が指名を受けた二人であると知れば、考えは変わります。あの青年のように」

それは最初から、殺害すると決めていた二人の名前だけは、全員に知らせておくというやり方であった。それによって指名を受けたものは否応なくゲームに参加しないとなくなる。

高木も櫻井の考えを否定するものではなかった。

「いったい大畑は、監察官に何を話そうとしたのだろう……」

公安の人間がわざわざ監察官に話しを持っていく。普通に考えれば警察組織に関するものとなる。

「……私は、これまでに櫻井監察官を全く、存じませんでした。失礼ですが櫻井監察官は、これまでも本庁にいたのですか？」

「いいえ、四月の移動で福岡から来ました」

その言葉に高木は直感的に大畑は、この監察官を意識して選んだのかも知れないと思った。

「高木さんも気づきましたか？ 何故私を選んだか、そこになにがしかの意味があるように思え

るのです」

目を細めた高木が、櫻井を見た。実際に大畑から櫻井が電話を貰った時期は、福岡から警視庁に移動となって数ヶ月足らずの時である。

大畑が警視庁内の不正を、相談するつもりであったのなら、それは内部告発になる。場合によっては、自らの一生にも関わる。その重大な事を話す監察官は、誰でも良いとはならない。当然、相談する相手の人となり経歴などは調べるであろう。

警視庁には組織内部を良く知るベテランの観察官も多く居る。しかし、大畑が選んだ監察官は、福岡から移動まもない若い櫻井。それは裏を返せば、前から居た警視庁の監察官には話せないものが大畑にあったとも考えられる。

「櫻井観察官は警視庁内に、神々の代理戦争に通じている者がいると考えているのですか？」

大畑が掴んだ警察の不正が、神々の代理戦争に絡んだものと仮定すれば、そのような考えも浮かぶ。

「私は、大畑さんが殺害された直後には、あの電話が単なる内部告発であれば本来、私でなく慣れた監察官に相談したのではとの疑問を持ちました。しかし、大畑さんが神々の代理戦争を知っていたとした場合は、迂闊な相手には話せない。そこで、遠い福岡から転勤してきた私を選んだとも考えられます」

「大畑は警視庁内にも注意をしていた。……どちらにしても、この件はよほど慎重にやらないと」

「ええ、この件に首を突っ込むとなれば、お互い身辺には、注意をしないとなりません」

簡単に周囲に話せる問題ではなかった。高木が厳しい表情のまま頷いた。

「鍵を握るのは神坂という青年。私の信用できる部下を使って内々に調べます」

「忙しいところ済みませんが、お願いします」と櫻井が頭を下げた。

十四

順平は、いつまでもホテルを転々ともしていただけないと思った。仕事を辞めた順平は、海沿いの那珂湊市の方で、住む場所と仕事を探そうとしたが、そこには金だけでは解決できない問題が待っていた。

部屋を借りようにも、仕事を探そうにも本人の確認を迫られる。まして、携帯電話の使えない順平は、連絡手段さえない。そうなる面接を受けた会社などから相手にはされなかった。それが人から逃げるといふ現実の姿であった。身を隠せば何とかなると考えた順平であったが、それもままならない。順平の表情には焦りが現れていた。

順平は那珂湊のホテルでじっくりと、これまでを振り返っていた。

携帯電話には、高度の技術が使われていた。その技術の高さや、簡単に三千万を振り込む手口といい、神々の代理戦争を仕掛けた組織は、その辺にあるちんけな組織とは訳が違う。

それは順平にとっては、さらなる戦^{せんりつ}慄を覚えさせるものであった。

これまでは訳が判らず、とにかく逃げる事を考えていた。しかし、単なる組織でないとなれば、簡単に逃がしてはくれまい。逃げるのも、ままならないとなれば今度は、身を守る術を真剣に

考えないとならない。

沖子から伝えられた代理戦争の趣旨は、相手の自由を奪うものであった。勿論それには殺害も含まれる。しかし、人を殺害するのは究極の選択になる。沖子から伝えられた人物の多くは、権力を使える立場にある人間。権力を持つ人間であればあるほど、万一を考えれば、殺人などの大きなリスクを伴う暴力的な方法は、使わないだろうとの考えが浮かぶ。その観点にたてば、取りやすい方法は警察等の権力機構を利用して、相手を逮捕させて自由を奪う事であった。

おそらく神々の代理戦争に関わる多くの人は、そのような手を使う。しかし、それはあくまで神々の代理戦争なるものが、組織の思惑通りに動き出したときであろう。

如何に組織の思惑どおりにエントリーされた人間をコントロールしていくのか、問題は、そこにあった。エントリーされた人間にすれば自らが犯罪者になる覚悟が必要になる。そんな危険な事に手を染めようとする人は、通常ではそれほど居ない。

その決心をさせるための見せしめが、小物と称された人間の抹殺にあったのだろうと順平は思った。そう考えれば、神々の代理戦争なるものが、沖子が語ったような単なるゲームではなくなる。このゲームを神さん組織が全てコントロールしているとしたら、エントリー者の位置情報を指名者に伝えるのもできた。沖子は黄田や警察官殺害を知っていた。指名者に黄田や警察官の位置情報を流していれば、ある程度、二人が殺害されるとの予測は可能であったのかも知れない。問題は、そうなると殺害された二人の他に、小物がもう一人居る。それは順平自身であった。

沖子は自分の名前が四月十五日に表に出るのを、間違えた振りをし五月十五日までは安全だと思わせる話をした。疑えば、それも、その間に誰かに狙わせる為であったともとれる。状況的には黄田や殺害された警察官と同じ運命を、辿っていても少しもおかしくはなかった。今、生きていられるのは、単に運が良かっただけなのかも知れないと思うと、順平の背筋には冷たいものが流れた。しかも、考えれば考えるほどに状況は悪かった。

逃げるのを考え、今は神さんの携帯電話から電波のどるのをとめてしまっている。電波をとめれば、それは当然、神さん組織も知る。その行為は場合によっては神さん組織に対する、宣戦布告となるかも知れない。

(どうやら俺は、神さん組織も敵に回したかも知れないな.....)

携帯電話を解析した事によって、場所を知られずになったが、新たな問題に順平の心は乱れていた。

ふと順平は、今のうちに友人に会っておこうと思った。それは順平が、得体の知れない恐怖に追い込まれ、次第に気弱になった現れであるのかも知れない。

順平は尾道おのみちしんじ信次に連絡をとった。尾道は地元の役所に勤める男で、わりと物事を沈着冷静に見る事のできる性格をしている。順平とは子供の頃からの仲の良い友達であった。

「やっと連絡をしてきたな」

尾道の落ち着いた声が聞こえた。

「おお、しばらく」

気持ちの減入っていた順平ではあったが、その気持ちを気付かれないように普段通りに振る舞っていた。

「何がしばらくだ。みんな、お前を心配している。携帯はまるで通じない。どうなっているんだ」

「非常に込み入った事になっている」

「わかっているよ。お前が置かれた立場は」

「.....どうして？」

「綾子さんだ。あの娘が心配してお前の行方を捜していた」

「そうか」

それを聞き多少、救われた気持ちがした。ああでもない、こうでもない細かい話しになれば、何処かで自分の気持ちは崩れたかも知れない。しかし、尾道がすでにある程度理解していれば、その煩わずらわしさからは解放される。

翌日の夜、尾道から指定をされた水戸駅南のとある場所で、順平は尾道の車を待っていた。見覚えのある尾道の白色の大きなワゴン車が現れた。

運転席から順平を見つけた尾道が、早く乗れと声を掛けてきた。助手席には友人の有田光一の笑いを含んだ顔が見えた。

有田は明るく戯おどけたところのある男で、余りくよくよしない性格などは、順平と似ていた。そして順平が逢いたかった友人の一人でもあった。あらたまつた挨拶をするような間柄ではない。

順平も”ヨッ”と手をかざし一声かけると、車の側面のドアを開け中に乗り込もうとした。

「綾ちゃんも来てくれたのか？」

車の中で微笑む綾子に向かって、そういいながら体を車に入れた。すぐに車が走り出した。

「俺が綾子さんにも声を掛けた。このまま車を、大洗の駐車場にもっていく」

「頼む」

大洗の駐車場とは、大洗町の海沿いにある大きな駐車場であった。夏場は県内最大の海水浴場になる場所のために地元の間人であれば、大洗の駐車場と言えぱ察しがつく。そこには水戸市から西に、国道五一号線を真っ直ぐに走れば、車でなら二十分くらいで行ける。車の中で話し合うに持ってこいの場所であった。ちなみに順平が職を求めていた那珂湊市は、大洗とは那珂川を隔てた隣接した市で、大洗の北に位置した漁港などのある市になる。

車が走り出すと会話が始まった。

「全く、お前も、困った問題に首を突っ込んだもんだ」

尾道が少々呆れたようにいった。

「好き好んで、首を突っ込んだんじゃないけどな」

「まあ、そのようだな。それより順平、綾子さんには礼をしなよ」

「そうだ、幾ら俺や尾道にしても、余りに変な話しで、お前から直接聞いたら、おそらく信用はできなかった。綾子さんからの話しだったから信じた」

「酷いな、俺は信じられないのか？」

「^{ひが}僻むな。日頃の行いが悪いからだ。それより綾子さんは警察に居る兄貴に頼み、今回の件を調べてくれている。それにも礼を言えよ」

尾道と有田は、互いに連絡を取り合い心配をしていたようであった。なんだかんだと言っても喜ばしかった。

「綾子さん、ここからは、此奴に話してやれ」

助手席から振り返り、声を掛けた有田に、順平の隣の席に座っていた綾子が頷き話しを始めた。

「順平君は、健吾兄さん、知っているよね」

綾子の兄は二人いる。実家は長男が継ぎ、二男は警察関係の仕事をしている。それは順平も知っていた。

「下の兄貴だよな」

「そう、今は警視庁に居るの。それで私、前に会ったとき色々聞いたでしょう」

順平が頷いた。

「あの後で心配になり、兄さんに相談をしたの」

「順平君、兄さんが直接、話しがしたいと言っているわ。お願い、お兄さんに相談してみて」

そう言うと綾子は、健吾の連絡先を書いた用紙を順平に手渡した。順平は、手渡された用紙をじっと見ていた。

「その順平の言う神々の代理戦争とやら、警察も知っているとなれば、俺達も、順平を信じないわけにはいかないだろう」

有田がいった。

「健吾さんは知っていたのか？」

少し怪訝な表情を浮かべた順平が、有田にいった。助手席に座る有田に順平の表情はわからない。有田は前を向いたまま、

「そうだよな、綾子さん、健吾さんも知っていたんだよな」

「ええ、だから連絡するように、言ってきたのだと思うの」

「まあ、良かったじゃないか、警察が動けばなんとかしてくれる」

「そうだな」といった順平ではあったが、しかし、このとき警察も知っていると感じた順平は、平静を装ってはいたが心中は穏やかではなかった。

人は、それほど強いものではない。大きな問題に直面したとき、それが間違いであれば良いと誰もが願うものである。順平にしても同じであった。疑いながらも、心の片隅では何かの間違いであって欲しいと願う気持ちがあった。しかし、警察も知っているとなれば、もはや、その自分に対する言い訳は通用しない。

「変な事に巻き込まれたと聞いたときは驚いたが、まあ、しかし、こうして順平の元気な姿を見られた。少しは安心をしたよ」

車は国道五十一号から離れるとすぐに、大洗の駐車場についた。シーズンオフの夜とあって駐

車場には、ポツリポツリと車が停まっているだけであった。おそらく、多くは夜のデートを楽しんでいるカップルか、あるいは夜釣りなどを楽しむ人の車であろう。

尾道は、駐車場の隅の方に車をとめると、車のライトを消した。正面には、月の光に映し出され白く砕ける波の頭が、薄ぼんやりと見えていた。

「順平、色々困り事がありそうだな、言ってみろ。お前は、変なところで遠慮する人間だからな」

言い当てた言葉であった。闊達で脳天気そうに見えても、わりと分別もあれば、結構周囲には気遣いをするのも順平であった。

「……携帯電話が使えないと住む場所も、仕事も探せない」

「仕事をするつもりか？ 大丈夫か？ 警察が知っているのなら、しばらく身を隠した方がよくないか？」

「無理だ、すぐには解決しない」

「そうだよ、有田、これは殺人事件が絡んでいる。これは始まったばかりだ、何処まで健吾さんが知っているのかもわからんし」

「しかし、仕事に就くのは、危ないだろう」

「そうだな、俺も仕事につくのは賛成できない、何か順平に考えがあるのか？」

「一応、俺も考えた。現代という治安の整った社会で、相手を葬る事がどのようにすればできるか、神さんの描いたルールをもとに考えてみた。もっとも簡単な方法は警察に相手を、逮捕させることだろう」

「そうか、相手は権力を使ってくるか？」

「人を殺せば、警察も調べない訳にはいかない。下手にやって、自分が捕まるようでは元も子もない。権力を使える人間は権力を使ってくる」

「しかし、すでに人が殺されているのだろう」

「あれは、何かの手違いだ。人を殺すのは余りにリスクが大きい。実際、あのよう新聞で騒がれ、警察も調べている。犯人は、そのうちに捕まる」

順平は友人達のまえでは、心配を掛けたくないとの思いから、深刻にならないように殺害の可能性を否定していた。

「それなら良いが、ただ注意は必要だぞ」

「わかっている」

「それと仕事は、どうつながる」

「無実の罪を着せられたときに、アリバイが無かったら、それで終わる。少々身を危険に晒しても、就労している時間は仕事仲間がアリバイを証明してくれる」

「なるべく一人にならないという事か？」

「そうなる」

仲間に関まれて、話している事が楽しかった。得も知らぬ安心感にも包まれていた。話題などは自分の事でなくてもよかった。

「ただ、すでに警察でも神々の代理戦争を知っているのなら、様子を見てからでも遅くはないのかもな。仕事につくのは少し考えてみる」

「その方がよい」

素直に順平は、尾道達に頷いた。

「はい、携帯電話、これで一部の文明の利器は使えるでしょう」

そう言って綾子が化粧箱に入ったままの、携帯電話を順平に渡そうとした。

「……綾ちゃん、これ綾ちゃんが契約したのか？」

「ええ、私の名前で契約していれば、場所を調べられる事もないでしょう」

名義が櫻井綾子となっていれば、それを知られない限りは、たとえ警察にしても携帯電話から順平の居場所を特定するのはできない。しかし、何かあれば綾子を巻き込む。すんなりと手を伸ばせるものでもなかった。

手を伸ばそうとしない順平を見て、尾道がいった。

「なあ、順平、今の世の中は誰にも迷惑をかけずに生きるなどできない。困った時くらいは友達に甘えろ」

「しかし、なあ」

「あら、順平君、私、貴方に昔、お金を貸していたわ、それは迷惑だとおもわなかったの」

「いや、それと、これは問題が違う」

少し困ったように順平が苦い顔をした。

「同じよ、そんな心配しなくても。困った時に助け合わなかったら、友達でも何でもないでしょう」

少なくとも携帯電話だけは、これから何をするのにも必要な物であった。順平は綾子に甘えようと思った。

「済まない、これは借りる

頭を下げながら、順平は携帯電話を受け取った。

「そうだ、大きな迷惑は駄目だが、小さな迷惑は構わない。順平、こんな田舎町では、移動手段に車が必要だろう。家の軽トラ、使ってかまわんぞ、必要なら持って行け」

「有田、いいのか……」

「いいぞ、古いからそろそろ買い換えを考えていた。車検は、しばらくある」

「ありがとう」

「そのかわり何かあったら、お前に盗まれたと話す」

「構わない、そんなことはなんでもない」

順平は、笑いながら答えた。

「あら、それなら私も、そのときは携帯、盗まれた事にするわ」

「何だ、そっちもかよ」

四人の顔に笑いが起きた。四人は色々な事は語り合った。順平にとっては、しばらく振りに和んだ一時であった。

順平の部屋は、大洗から近い場所にあったが、それでも尾道は先に、綾子を送っていった。綾子を先に送り、三人となった車のなかで、尾道がいった。

「……順平、お前の話を聞いていて、少し心配になった。警察が俺のところに来た」

尾道にすれば警察官の兄を持つ綾子には、聞かせたくなかった話しであったのだろう。

「俺の所にも来た」

尾道に続いていった有田を見た。

「綾子さんの兄貴が、お前の居場所を調べているのか、あるいは、おかしい連中なのか、俺にはわからない。お前の話しだと警視庁にも敵はいるんだろう」

そうだというように有田も頷き、「さっきは綾子さんがいたから、あうは言ったが、おかしい連中だったら、不味い事になっているぞ」

「そうか」と順平が有田に頷いた。

少し順平は考え込んだ。たしかに綾子の兄の線は強い。しかし、その警視庁にも順平の敵はいる。

「順平、何が起きても、俺達はお前を信じている。困った時には必ず連絡をくれ、わかったな」

ありがたいと思った。何よりも信じられる友が居た事に感謝をした。

「順平、もう、前に借りていたアパートには戻れないだろう。どうする気だ。解約するのなら、俺達がしておいてやるぞ」

「ありがとう。頼みたい。……いや、ちょっと待った」

「どうした」

そのとき、順平の目が細められた。

「済まない少し考えさせてくれ」

そう言うと、順平は真剣な顔でしばらく考え込んだ。どの様な状態に順平が置かれているか、知っている彼らであった。その思考を邪魔する考えはなかった。二人は黙ったまま、その様子を心配そうに見守った。

ここに来るまでの順平は、ある意味で諦めのようなものを感じて友人に会っていた。しかし、やはり、友人と話しているのは楽しかった。その事で、こんな不条理が許されてよいのかとの強い気持ちがおきた。

(仕掛けてみるか?……)

今、動いてる警察が敵であれば、相手は国家権力の後ろ盾を持つ。罠にはまってしまってからでは、取り返しがつかなくなる。警察関係者が動き出した。それにいち早く気付いたのは、順平にとってはチャンスでもあった。

「少し頼みたい、構わないか？」

「何か考えが浮かんだのか？」

「警察が動いているのなら、待つより、こっちから仕掛けてやる」

「警察に仕掛ける？ 大丈夫か？」

順平は苦笑いを浮かべながら頷くと、

「折角、警察が動いている。このチャンスを放っておく手はない」

「いよ、いよ本気になってきたな。話してみろ」

三人から笑顔はすでに消えていた。みな真剣であった。

「俺は、しばらく身を隠す。行く場所は東京。高円寺に部屋を借りようと思う」

「東京に行くのか？」

順平が頷いた。

「ああ、どのみち主戦場は東京になる。おそらく、あのアパートを解約すれば、再び警察が俺の所在を探すために、また、お前らの所にも行くと思う」

尾道が頷いた。

「その時には、俺が東京の高円寺にいると話してくれ」

「わざわざ行き場所を教えるのか？」

「罨を仕掛ける。高円寺に部屋を借りるが、俺は、それから、すぐに何処かに身を隠す」

「そうか、高円寺はお前が昔、住んでいた場所だな」

「学生の時、住んでいたから、多少の土地勘ならある」

「わかった。高円寺にいるように見せればいいな」

順平が頷いた。

「部屋の解約は、俺が郵送で高円寺からする。おそらく警察なら解約した不動産屋にもいく」

「わかった、ただ無理はするなよ」

「済まないが、綾ちゃんには、それとなくお前から伝えて欲しい」

「直接話していかないのか？」

「神さんのターゲットは俺の敵、それが健吾さんのそばにもいるかも知れない」

そうだなと尾道が頷いた。

十五

数日後、順平の姿は東京の高円寺にあった。順平は、ホテルを転々としながら、高円寺で目的にかなうような部屋はないかと探し歩いた。

順平の探している条件は大きなアパートで出入り口が複数あり、建家への出入りが外部から見づらい作りの二階、ないしは三階の部屋であった。幾つかの物件を回ると、その条件に近い部屋が見つかった。順平は、わざと実名で、その部屋を借りた。

順平は、部屋を借りると、一つの部屋の蛍光灯に細工をして、すぐその部屋をでた。部屋から出た順平は、辺りに注意をしながら携帯電話の蓄電池を装着した。

順平は携帯を片手に沖子に電話をした。沖子が電話に出た。

「ルールの確認だ。この携帯電話がどのようなものか俺は知っている」

「そう見たいね」

「もう、いい加減な事は言わせない」

「あら、威勢のよいこと、で、御要件は？」

「携帯のGPS機能をとめるのはルール違反か？」

「……別に構わないわよ、規定にないのだから自由にしたら」

「わかった、話しはそれだけだ」

どこまで信用して良いか判らないが、相手が神々の代理戦争を盾にしているのなら、一応の仁義はきった。これで神さんの携帯電話の使い方は形の上ではクリアーした。

話しを終えた順平は、再び携帯電話からバッテリーを外し、そのまま、街の雑踏へと姿を消した。

警察も動いている。念のために高円寺という地域を、神さん組織にわかるように携帯のGPSも作動したまま沖子と話した。

さあ、警察でも神さん組織でも、どっちでも良いから乗ってこいよというのが、その時の順平の気持ちであった。

晴れやかであった五月も終わり、東海地方には梅雨の走りを思わせる雲が現れると数日、天気はぐずついた。しかし、今は、その雲も途切れ、本格的な梅雨の季節を迎える前に、太陽は自ら一仕事をするかのように、輝きを増していた。

初夏を思わせるような、汗ばむ光の中を静岡県の砂浜を大きな手提げバックを手にした一人の男が歩いていた。よく見ると、それは神坂順平であった。しかし、しばらくすると、その順平の姿は、静岡からも姿を消していた。

十六

何処であるかはわからない。小さな部屋であった。部屋の中央には一つ机と椅子が置かれ、椅子には若い女が座っていた。

机の上にはパソコン端末と数冊のファイルがあるだけの殺風景な部屋であった。

パソコンに繋がるケーブルを追うと、部屋の片隅に余り大きくない金属製のラックがある。そのラックには幾つものメータを持つ、アンプのような機材が備わっていた。そのような機材があっても、部屋は静かである。少しだけ冷却用のファンの回転音が聞こえるが、それも耳を澄まさないとは聞こえない。

三十くらいのやせた背の高い男が、部屋にやってきた。女は頭を下げて挨拶をした。

男は女から、水戸で途絶えた順平が持つ携帯電話の電波が、一時、東京で受信できたとの報告を受けやってきた。

「神坂が何処にいるかわかりましたか？」

男が女に語りかけた。

「駄目です。東京の高円寺付近から連絡がありましたが、話しが終わると携帯からの電波は消されました」

女が言った。女は順平から、沖子と呼ばれていた女のようなのである。

「自ら東京に出向いてきたか……」

「これでは茨城という安全な地に置いた意味が失われます」

「おそらく考えがあってだ、あの男なら心配はあるまい」

「それなら、よろしいのですが」

「僕のところへ上から神坂を、始末しろとの話しがあった」

「私が、居場所がわからなくなったのを、伝えたからですか？」

「そんなところだろう」

「伝えない方がよかったですでしょうか？」

「いや、駄目だ。かわった事は全て上に報告して欲しい。それをしないと君が疑われる」

女が頷いた。

「さて、どうするかな。東京で足取りが消えたとなれば、地検が使えるな。おもしろい。どうせ、神坂は地検を崩壊させる為に使うと、上には話してゲームに引き入れた男だ。地検の東検事に神坂を処分するように話せば、とりあえず上も納得する」

「では、神坂を地検に売ってもよろしいのですか？」

「構わないよ」

「しかし、もし神坂が地検に逮捕されれば、事が世間に知れるのでは？」

「その心配はない。神坂は高円寺で消えたのだろう」

女が頷いた。

「高円寺は、神坂にとって土地勘のある場所だ。何か考えている」

「ほんとうに、そうなんですか？」

「彼奴は、神さんの代理戦争が東京中心だと知っている」

そうかも知れないと女も思った。渡したリストから順平が、この戦いが東京中心で起きているのを想像するのは容易にできる。その渦中の東京に自らやってきたとなれば、何らかの考えがあってと見るのが自然となる。ただ、問題は神坂順平にどれほどの能力があるかとなりそうである。

「神坂順平、甘く見るなよ、結構な男だ」

たしかに携帯電話のからくりなどは、すでに見抜いている。並の男でないのは女も気づいていた。しかし、今度の相手は東京地検になる。

「それは検察に勝つという意味ですか？」

男が笑った。女は信じられないというように、男をじっと見た。相手は東京地検の名うての東検事である。どんな手段でも使える。

「地検絡みでは、どちらにしても最後は裁判になるでしょう。もし裁判となったとき、順平は代理戦争について話さないですか？」

「彼奴に勝つ自信があれば話さない」

「勝つ自信があれば、……ですか？」

女も順平が裁判に勝つ自信があれば、神々の大戦争の事は口にしまいと思った。何故なら神坂の敵は警察だけではない。まだ、神坂には多数の敵がいる。何処に潜んでいるかわからない敵に

対し、裁判や警察で神々の代理戦争の件を述べれば、顔写真付きで自分は、神々の代理戦争のターゲットであると、教えるようなものであった。ただ、相手は東検事、そんな簡単に勝てる相手ではないように女には思えた。

「まあ、神さんの代理戦争の事が裁判で公になるの困るが、何れは神さんの事は警察にも知られる。しかし、それは問題ではない。知っても警察組織は動けない」

「それは、そうですが」

「だいたい警察組織に知られないと、上層部も安心できないだろう。狡いからな、上層部は」
その言葉に女にも、思い当たるものがあつた。

「警察組織には何れ知られると上層部は考えている。警察組織に対しては仕掛けを施したから構わないが、世の中には知られたくないというのが上層部の考えだ。それが焦りとなれば、上層部は例の馬鹿組織に神坂の始末を命じる」

「ありそうですね」

「馬鹿組織が相手では、神坂も逃げきるのは難しい」

「その為東京地検を使うのですね」

「そう、地検が動いたとなれば神坂については、上層部もしばらくはおとなしくする」

「東検事は、まだ政界に手を出していませんが、順序が狂うと危険ではありませんか？」

女は危険だと思った。万一、男の言うように地検が、神坂に敗れるような事になれば計画が大きく狂う。そうなったら上層部も、この男に対して黙ってはいないだろう。

「おそらく、その心配はない。東は特捜の検事、直接、神坂には手は出せない」

「誰かにやらせるのですか？」

「そうなると思うよ」

男の考えでは、神坂が勝っても、地検の東は温存できる。それであれば、順序が狂うとの心配は必要ないのかも知れないと女も思った。

「まあ、何か不都合が起きても、君は僕から命じられたと上に話せば良い」

男は笑みを浮かべて女にいった。

十七

東京地方検察庁、第二特別捜査部、部長の東は部長室で刑事部の杉崎検事と小声で話しをしていた。東は鼻筋が通った端正な顔をしている。痩せて長身、理知的を強調するが如くの細い金属フレームの眼鏡をし、粹にスーツを着こなす姿はさすが東京地検でも、やり手で通っている検事の風格が漂っていた。

「神坂の件はどうなっている？」

東から話しかけられた杉崎は、少し小太りに見える丸顔をした検事であつた。今時流行らない髪を七、三に綺麗に分けた丸顔には、細めのすどい目を持っていた。

杉崎は東が刑事部に居たときの部下で、杉崎も東に劣らず出世欲は強い。その為上司、部下

の関係を離れても、東とは親密な関係にある。

杉崎が東から頼みがあると言われたのは、少し前の事であった。東の頼みとは、神坂順平に関するものだった。東は、神坂の件が片づいたら、特捜に呼んでやると杉崎に話しを持ちかけると謝礼だと言って一千万円の現金を、気前よく杉崎に渡した。同じ穴の貉同士、それで否応なしに話しはついた。

「神坂の居場所は掴みました。やはり中央線沿いの高円寺です」

「それなら、仕掛けられるな」

「それは大丈夫です」

東に緑の封書が届き、おかしな女から電話があったのは、今年の三月初めであった。

女は、貴方は二十四番目に神から選ばれた。私は貴方が神々の代理戦争に勝ち抜くために協力は惜しまないといった。東は巫山戯るなど女を怒鳴った。女は言った。やらなかったら佐山を起訴した時の過ちを証明すると脅してきた。

佐山の件、それは東が、まだ、検察部刑事部に居たときに担当した、交通事故の処理に関するものであった。

佐山謙吉は、そのときの交通事故の加害者になる。交通事故といっても人が亡くなっている。それも亡くなった被害者は警視庁の白バイ警官。

事故発生の様子は交差点のなかに、直進してきたバイクと右折をしようとした佐山の車が、衝突を起こしたというありがちなものだった。ただ、佐山にとって運が悪かったのは、そのバイクが警察の白バイであり、白バイ警官が亡くなったという事であった。

当然ではあるが問題は、事故はどちらの原因で起きたかとなる。停まっている車に白バイが衝突していれば、過失は白バイ警官となり、佐山が前方から直進してくる白バイに気付かずに、車を右折させていれば佐山に過失がつく。

佐山謙吉、見るからに気の弱そうな男であった。警察は佐山が運転する車が、強引に右折しようとしたのが原因で、事故が起きたとした。しかし、東が調べたところでは、後ろの車を運転していた男の証言などを総合すると、佐山の車は止まっていた可能性が強かった。佐山自身も、当初は取り調べに当たった警察官に、白バイは直前を貨物車が右折した直後に、停まっていた私の車に、ぶつかってきたと話していた。

東も、実際に何度か、事故のあった交差点には足を運び見てきた。走ってきた白バイ側の道路は上り坂となるために、交差点全景を見通せないような作りをしていた。右折した車に気を取られた白バイ警官が、その後ろに止まっていた佐山の車に、気付くのが遅れても交差点の構造からも不思議ではなかった。その他の証言と合わせてもおそらく、それが事故の真相であろうと思った。しかし、取り調べをした警察の見解は明らかに違っている。同僚を失った警察は身内である白バイ警官をかばったなど東は思った。本来あってはならないが、警察官も人の子である。身内が悲惨な事故死を遂げたとなれば、身内を悪くしたくないとの気持ちが働いても仕方ない。

これには東も少々困った。しかし、その東にしても警察は身内のようなものになる。そこには

事を荒立て警察と争っても、何の得にもならないとの打算も働く。多少の迷いはあったが、それでも東は、それとなく警察調書に残る、佐山の後方に停車していた運転手の証言は邪魔だと、警察に示唆をした。

警察も、それに気付き、その部分は途中から調書から消えた。

その上で東は、佐山に車が動いていたか、止まっていたかなどは裁判結果に影響はないと佐山に話しをして、貴方は、亡くなった警察官の冥福を祈る事ですと、諭して供述調書にサインをさせた。

車が止まっていたか動いていたかは、本当は重要な事であった。それによって無罪か有罪か、また、お互いが掛けていた保険の過失相殺などに大きく影響を及ぼす。

東の行為はアンフェアなものであったが、そのときの東には佐山を思いやる心はなかった。佐山が有罪になり、その後人生を狂わせようと、見知らぬ他人の事。それよりも、自分の出世の為に警察に恩を売っておく。それだけであった。

女は握りつぶした筈の運転手の供述調書を、マスコミに送ると言った。今になって、後ろに停車していた運転手の証言調書が出てきたら警察にしても、東にしても不味い。

当初、東は女は金が欲しくて脅迫をしているのかと思った。しかし、違っていた。女は金は必要ない。恐喝だと思われるのは心外として金ならくれてやるといった。

翌日、東の銀行口座には女が話したように、三千万の金が振り込まれていた。

公務員でなくとも三千万円の金額が、見知らぬ人間から銀行口座に振り込まれるのは怖いものがある。まして東の場合は、亡くなった白バイ警察官の遺族名で振り込まれていたとあっては尚更である。もし何らかの形で人の口に上れば、勝手に振り込まれたでは済まなくなる。

東は、何らかの罠にはまったと不安を感じた。しかし、女は、東の困る話だけをした訳ではなかった。女はアジア資源調達機構の不正経理と、それに関わる数名の代議士を知らせてきた。

女はいった。この代議士達の犯罪を暴けば、あんたは、また上に行けると。半信半疑ながら東は、女から告げられたアジア資源調達機構の不正経理を追ってみた。女の話は間違いではなかった。与党副幹事長をはじめ、数名の議員の関わりが見えてきた。

東にしても東京地検にとっても、これは久々の大きな山である。検事をしていても、代議士が絡む事件など、そうそうお目にかかれるものではない。もし、複数の代議士起訴ともなれば、検事としての名声が得られる。

東は地検でも切れ者といわれる男である。ここまでのお膳立てが整えば、何となく相手の意図が見える。振り込まれた金額の大きさといい、話しの内容といい、どうやら汚職に絡んだ議員と敵対する政治勢力、あるいは反感を持つ議員などの仕業であろうと思った。政治絡みとなれば、振り込まれた金は、後々に問題にできるような金ではない。それなら報酬だと思えば良かった。

東にしても相手の意図と、検事としての利害が一致した瞬間であった。代議士を逮捕すれば、何の問題も無いと気付いた東から不安は薄れ、かえって俺は、大変なチャンスに恵まれたと思った。

東は、気負う気持ちを抑えて、最初にアジア資源調達機構理事長の吉田から手をつけた。

六月も終わろうとしていたとき、再び女から連絡がきた。あんたのターゲットが一人増えた。ターゲットの男は神坂順平、今、高円寺の辺りをうろうろしている。罪状は何でも良いから捕らえろと言われた。

東は女に理由を聞いた。しかし、女は話さなかった。女は冷たい声で言った。相手は、つい最近まで茨城の田舎で会社員をしていた若い男、ひねり潰すのは造作あるまいと。

東は少し考えたが、いいだろうと思った。女からは大きな事件を貰っている。東の気持ちは、すでに高揚していた。

しかし、一つの問題が生じた。東が指揮する特捜は、主に政治家や行政などの汚職に絡む事件を担当している。一般の刑事事件となれば、それは同じ地検でも刑事部に回る。神坂順平という男に関しては、何をするにしても刑事部の検事が必要になる。そこで元々、白バイ警官の事件でも一緒に仕事をした刑事部の、かつての部下である杉崎を使うのを思い立った。佐山の件では東が主導的立場にあったとはいえ、杉崎も関係ないわけではない。餌と脅しがあれば、杉崎にしても東の話を断れるものではなかった。

十八

順平が尾道達の前から姿を消して、二ヶ月が過ぎようとしていた。まだ、東京の梅雨があけるには間があった。しかし、その梅雨の合間を狙うようにして、高円寺の順平が借りたアパートの近くで、不審火が連続して起きていた。

警察は五日の間に四件の不審火が高円寺の近い範囲で発生、しかも、夜間、火の気のない場所が燃えている事から、連続放火の可能性もあるとして調べを進めているとテレビが、その出来事を報じた。

それを知った尾道は、有田と会っていた。

「有田のところにも警察は来たか？」

「ああ、来た。順平に言われたように、高円寺に居ると話した」

「その、高円寺で火事騒ぎだな、順平絡みと思うか？」

「警察が来た後の発生、そりゃ、怪しいに決まっている」

「順平からの連絡は？」

「なしのつづて、尾道にもないのか？」

順平は、あの後、五月末に一度だけ、しばらく身を隠すから連絡が行かなくても、心配しないでくれと伝えてきた。それを最後に連絡は途絶えていた。

「何度か、綾子さんが渡した携帯に電話したが通じない。携帯まで切っている。順平の事だ、滅多な事はないとは思うが」

「何か理由があって切ってるのだろうけど、こうも長く連絡がないといささか心配になるな」

天を仰ぎ目元を細めた尾道が、滅多はないと言うように何度か首を振った。尾道も心配ではあったが、順平なら、何とか危機を抜け出せる、それが出来る男だと思っていた。

「ああ見えても順平は、肝っ玉も据わっている」

尾道が不安を振り払うかのようにしていった。有田も、尾道の言葉に頷いた。

普段は、いつでもこやかでおっとり構えているが、いざと成れば筋は通すし、何をするかわからないのも順平であった。

田舎町の事。地元には大勢の同級生や仲間が住んでいる。中には若い時に馬鹿な事をしていた連中も多くいる。その一人が順平や有田と同年の岸川良太であった。

いまでこそ、岸川も家庭を持ち落ち着いた生活をしているが、高校の頃は体格も良く喧嘩っ早く、自ら暴走族を作ったりして、結構地元では知られた存在であった。

他校の岸川を尾道や有田も、高校生のときから噂としては知っていたが、直接の知り合いという訳ではなかった。ただ、当時から街中など順平と一緒にいると、岸川が順平に親しげに話しかけてくる姿は見ていた。岸川が暴れの絶頂期にあった時でさえ、順平には一目を置いていたのは、その様子から知っていた。

そんな二人が、岸川と話すようになったのは、順平が大学に進み地元を離れてからになる。岸川は有田や尾道に道で会うと、順平はどうしていると必ず聞いてきた。今では、二人とも岸川と親しくなっているが、本格的に付き合いが始まったのは順平が、大学を卒業して田舎に戻ってからであった。

定かではないが当時の噂では、岸川と順平は殴り合いをしたと有田は耳にしていた。どちらが勝った、負けたとの話しは聞けなかったが、順平なら売られた喧嘩なら買うだろうと、思った記憶がある。それを裏付けるかのように、あの頃は、町の中を順平と一緒に歩いていると気の荒い後輩なども、向こうから順平に頭を下げるような場面に何度か、有田自身も遭遇したのを覚えている。

「まあ、俺達に連絡しないのは構わないが、綾子さんにもしてない」

「困った奴だ」

尾道は昨夜、電話をしてきた、綾子の悲しそうな声が耳に残っていた。――おい、順平、少なくとも綾子さんには連絡しろよと、心の中で呟いた。

十九

高円寺の放火騒ぎからしばらく過ぎ、今や季節は一年でもっとも暑い八月を迎えていた。

櫻井は五月の終わり頃、妹の綾子から神坂順平に逢ったので、連絡先を渡したと告げられていた。当初は、上手くすれば神坂から連絡が入るかと期待をして待ったが、未だに神坂からの連絡はなかった。それも、そうだろうと思った。すでに神坂には警視庁の人間の名前が何人か告げられている。神坂が愚鈍な男でなければ、警視庁を当然、警戒している。その組織の人間である自分へ連絡を躊躇する、それもわかる気がした。

ただ、櫻井も状況が掴めずに困っていた。神々の代理戦争なるものが、一向に姿を見せようとはしない。時には、その様な話しが本当にあるのかと疑いたくなる時もある。しかし、話したのは何処の誰でもない、自分の妹であり、更に高木も齊藤代議士の近くから、その話しを聞いて

いる。

何の進展もないなかで櫻井は、まもなく神坂順平が、放火犯として指名手配をされたのを知った。神々の代理戦争に巻き込まれたと話した男が、自ら東京にきて放火を働くとは考えられない。状況が状況だけに、そこから導きだせるのは、無実の神坂を警察が指名手配した可能性であった。

神坂順平が無実なら、それは誰かが警察を誘導して、神坂に罪を着せようとしているのか、あるいは警察が自ら関与しているかとなってくる。過失であれ、故意であれ、どちらにしても、警察が無実の罪を人に被せる結果になるのは、警察官の不祥事を取り締まる立場にある櫻井にすれば、頭の痛いところであった。

櫻井と高木は、六月から密に連絡を取り合っていた。ただ、二人とも用心をして警視庁内で逢うのはやめていた。櫻井にすれば刑事課の高木は元、公安に居た優秀な男である。監察官との立場でしか動けない櫻井にとっては、捜査畑を歩いてきた高木の協力は心強いものがある。

その高木が神坂順平の指名手配を受けて、櫻井に逢いたいと言ってきた。櫻井は警視庁から離れた居酒屋の座敷部屋で高木に会っていた。

「櫻井さん、ついに神坂が指名手配になりましたね」

すでに何度も話し合いを持ち親しくなっている間柄であった。高木は、今では櫻井さんと呼ぶようになっていた。

「それで、どうでした神坂の様子は？」

「神坂順平、あれは結構やりますよ」

「神坂が？」

「ええ、警察は一杯食っています。放火が起きた時、おそらく、神坂は東京を離れていた筈です」

高木は、ずっと順平の足取りを追っていた。しかし、その神坂は東京で部屋を借りると、そこから静岡に向かっていく。静岡に行ってから足取りは消えたが、そこから、東京に戻ってきた様子はなかった。

「なるほど、やはり神坂は無実ですか？」

人と話すとき目を幾分細めるのは、高木の癖のようであった。高木はいつものように少し目を細め、無表情に近い顔のままで頷いた。

「状況的にはどうなってますか？」

「毎晩、部屋の明かりはつきますから、警察は神坂が部屋に居っているのだと思います」

「誰かに頼んで、明かりを付けさせている？」

「まあ、そんなところかも知れません」

「しかし、警察は逮捕状をとるまで、本人の所在確認をしなかったのですか？」

「読んでますよ、警察がきちんと捜査をしないのを、あの男は」

実際に順平の借りたアパートに足を運んで、現場を見てきた高木は上手い場所を探していると思った。順平の借りたアパートの一室は、かなり大きな建物の中にある。建物の出入り口だけ

でも三カ所ある。しかも駐車場からは建家に続く通路に植え込みがあって、出入りする住民を長時間監視するにして、かなり遠くからできない。

高木には、そのような警察が監視しづらい場所を探ただけでも、すでに神坂は考えを持って行動しているとわかった。まして、神坂は自分が狙われていると知っている。それなのに本名で、その部屋を堂々と借りている。

「もし、神坂が実際の放火犯なら警察も真剣に捜査しますから、あの程度のものでは警察を欺くのは難しいでしょう。しかし、警察が最初から犯罪者を作る為に動いていれば、慎重な捜査などは不要です」

高木の話し方は警察が、この件に一枚噛んでいると、すでに断定をしたような口ぶりであった。

「警察が第三者の誘導で操られている。そのような可能性はありませんか？」

櫻井にすれば、にせの情報提供等によって警察が、誘導されているのであれば、まだ、警察に救いはある。

「私の考えでいいですか？」

櫻井が頷いた。

「おそらく警察主導です」

不味いなと櫻井は思った。順平が指名手配を受けたとなれば、すでに裁判所から逮捕状が出ている。警察が逮捕状を裁判所に請求するには、警察として順平が罪を起こした内容を裁判所に示す必要がある。それで始めて逮捕状がでる。

「現場を仕切った警察官にすれば、部屋の明かりが灯る。それだけ確認すれば罪に落とすのは容易です」

一人で逃げ回る順平にとって、夜一人で部屋に居る時は、それを証明する人間は誰も居ない。警察が順平を罪に落とすには順平が部屋に居る時間に、放火を行えばよいのであった。

公安にいた高木の嗅覚である。その嗅覚が正しいのなら、警察が裁判所に逮捕状の請求をした段階で、すでに警察は証拠や証人を用意したとなってくる。

「すると東京で仕掛けをした神坂は、海外にでも出たか？」

順平が東京の部屋を使って仕掛けたとなれば、それは確実なアリバイを用意するものだと想像は櫻井にもつく。如何に警察でも崩しようのないアリバイとなれば、その間、海外にでているのが、最も確実な方法の一つになる。特に順平の場合、当面、金の心配はないのであった。

「その様子はありませんね」

「国内に居るとなると、わりと早く神坂は現れる」

「東京以外でアリバイを作っていれば、証言者の記憶が鮮明なうちに、裁判をした方が得ですから」

健吾の頷く顔があったが、その顔は曇ったままであった。

「どうかしましたか？」

「警察が、神坂の逮捕に手を貸すのは不味い」

それは高木にしても、同じ考えであった。

「潰しますか？」

潰すとは神坂逮捕の動きをとる警察関係者に、高円寺に神坂は居ないと告げれば、それで警察の計画は潰れる。たしかに、それは警察の失態を最小限で抑えるには良い方法ではあった。しかし、櫻井は、黙ったまま、しばらく考えていたが、やがて「いや、このままにしましょう」と決心したようにいった。

総理大臣を襲撃する手口などからして、国家テロを思わせる凶悪な犯罪に繋がる可能性がある。解決の為であれば、神坂に囚になってもらう。冷徹ではあったが、今の櫻井は妹の知り合いである順平、一人を守るよりも、神々の代理戦争の実態に迫る方が大切であった。

「すでに指名手配となつては、警察へのダメージは防げない。神坂には気の毒だが、やっとな神さん達が動きを見せ始めた。ここで手をだしたら、また水面下に潜られる。まあ、様子を見て警察への被害は最小限で押さえればいいでしょう」

高木も、その考えに異存はなかった。

「話しは変わりますが、例の殺人事件、捜査は進みますか？」

「駄目ですね」

黄田が殺害されたのは四月であった。八月になった今でも、要として犯人像は見えてこない。それは大畑殺害でも総理襲撃でも似たような捜査状況にあった。

そうですかと渋い表情をしながら櫻井は、黄田という男が、神々の代理戦争なるものに巻き込まれたとなれば、幾ら黄田の周辺を洗っても犯人は出てはこないと思った。

それは黄田に限った事ではない。神々の代理戦争なる考えの基で犯罪が多発すれば、警察の捜査も思うようには進まなくなる。その為にも何が何でも、神々の代理戦争なる馬鹿げた物を、潰さないとならないのであった。

「それと佐田洋二郎、幾ら調べても警察には該当する男は居ませんね」

順平が二度目に告げられたなかの一人であった。

「居ない？」

「ええ、全国の警察を調べましたが、居ませんでした」

「適当な名前も加えているのか？」

「そのようです。指名を受けたものは、指名者が多いほど狙われる可能性が高くなります。参加者を恐怖に落とす為に、ダミーによって水増しするのも一つの手です」

「それだと捜査するがわには厄介になる」

ダミーの名前が混じっていれば、神々の代理戦争で名前があがった実在する人物であっても、全ての人間が神々の代理戦争に関わっているとは限らなくなる。

神坂を見てもわかるように、おそらく本人が警察に話すのは、よほどの事がなければしないだろう。そうなると誰が実際の参加者であるか、掴むのさえ難しくなる。

「捜査の手が及んだときの混乱を狙い最初から、このような計画にしたのかも知れません」

「相当したたかな相手だな」

高木が頷いた。

二十

櫻井や高木の予想とは裏腹に、九月になっても順平は姿を現さなかった。その頃から東京地検の動きが慌ただしくなってきた。東京地検は、かねて不正経理の噂があった、独立行政法人アジア資源調達機構の吉田理事長と、霞ヶ関重工の葉山副社長の逮捕に踏み切った。

直接の逮捕理由は独立行政法人アジア資源調達機構が霞ヶ関重工に約二百億円で発注をした資源調査船建造に絡んで、霞ヶ関重工からリベートが吉田理事長側に渡ったとされる容疑になる。動いていたのは、東京地検第二特捜部の東検事であった。ただ、東検事の真の狙いは、更に吉田から政界に渡った金の流れにある。

霞ヶ関重工といえば与党、横島副幹事長との緊密振りが前々から、取りただされていた企業であった。横島副幹事長の線から、同じ政党で横島副幹事長と親しい関係にある斉藤代議士や、大丸代議士の名前も囁かれていた。

吉田と葉山の逮捕を受けたマスコミは、政界にも波及するとの観測記事を書いた。報道のネタ元は、このような場合、多くは警察や地検からのリークになる。

アジア資源調達機構を取っ掛かりとした代議士逮捕を目指している、地検の地ならしの始まりであろう。しかも、政界を覆ったきな臭い臭いは、それだけでは終わらなかった。

東検事の第二特捜部とは別に第一特捜部が、自由真党の党首である、能勢代議士の汚職を調べ始めたとの噂までもが流れ出していた。自由真党は野党第一党である。その党首となれば、こちらでも大変な問題になる。

次々に現れる国会議員の汚職疑惑に、国民は眉をひそめた。

櫻井は警視庁の一室で、いよいよ神々の代理戦争が水面下で動き出したと感じた。

噂にある横島幹事長も大丸代議士も、東検事も綾子から聞いていた名前であった。斉藤代議士、これは高木から出た代議士の名前である。

櫻井は、神々の代理戦争とは何かと考えていた。

何を調べても、未だに神々の代理戦争については、神坂の話と高木が聞いた話し以外は伝わらない。しかし、二人の話しを参考にしただけでも、その二人から出た代議士などに次々に疑惑が起きている。

綾子が神坂から聞いた話しによれば、神々の代理戦争では九十八人が神さんから指名を受けて、その戦いの結果で神さんが序列を決めるものだとなっていた。しかし、そこには佐田のような架空の名前もある。元々が序列を決めるとか、神さんなどといった馬鹿げた話しであるが、現実、そこにあがった多くの人物が、こうも絡んできている。

ただ、上手くつくられている。指名を受けた者同士は敵対関係になる。そして、自分以外は全てが敵であり、相手を倒していかないとならない。直接関係を持たない人から見たら、如何にも馬鹿げたルールである。しかし、渦中に巻き込まれた人間にしたら、ルールは幼稚でも、やら

なかったらやられるとの恐怖が起こる。そこには単純であるが故の怖さが伴う。まして、ゲームという形であるが故に、襲う側も襲われる側も、その一言で己を納得させるよりない。互いに納得ができるとは、そこに個人的な事情もなければ、まして恨みや遺恨なども存在せずにゲームとして相手を狙ったり、敵の姿に恐れおののく。

その為に、一旦、仕掛けが行われた神々の代理戦争内にあつては、犯罪は神さん組織の手を離れ、独立した事件となって発生をする。これでは仮に警察が神々の代理戦争と関わった事件と見ても、神さん組織にまで到達するには時間が必要になる。

ゲームというブラックボックスを作り、人々を疑心暗鬼に陥れ、互いを戦わせても、そのときには自らはすでに圏外に去り、その目的さえもわからないものにする。それが神々の代理戦争最大の仕掛けだと櫻井は思った。

まだある。神々の代理戦争で厄介なのは、それは何も指名を受けた人間だけの話しでは終わらない。神々の代理戦争のなんたるかを知った人間にすれば、ある組織に於いて一人の指名を受けた者が判明すれば、人は、その他にも指名を受けた者がいると考える。

現に櫻井にしても野党党首である能勢代議士が、神さんの代理戦争に拘わっている話しは聞いてない。しかし、この時点で不正が疑われていると聞けば能勢代議士も、また神さんの代理戦争に関わっている一人かと、何の証拠もないのに疑いたい心境になる。そればかりではなかった。これまで、櫻井は綾子から何人かの警察関係者が含まれていると伝えられている。しかし、それが全てとは考えられない。まだ隠れた人間が居ると思えば、櫻井にしても迂闊に、警察上層部に報告もできない状態が現実にある。

神々の代理戦争とは直接仕掛けられた人間だけでなく、その仕掛けに気付いた人間も、また、疑心暗鬼にしてしまう力を持っている。

(疑いだしたらきりが無い。それにしても、神さんの代理戦争、怖い仕掛けだ)

櫻井は大きくため息をついた。

「この捜査はとんでもなく難しくなる」

じっと一点を見つめた櫻井が、今度はぼそっと独り言を口にした。

櫻井は、大変な事件に関わってきたと思いながら、事件を解決するにはどうすれば良いのかと考えていた。しかし、解決の糸口さえ浮かばない。何故なら警察は捜査によって、指名された人間を数多く把握しても、指名を受けただけでは、何の罪にもならない。あくまで警察は犯罪をしてからでないと逮捕もできない。

それなら、もし警察が代理戦争に名前があがった指名者一人、一人を説き伏せられるかとなると、それも難しい気がした。その場合、最低限でも警察は神々の代理戦争なるものを解明して、そのうえで神さん組織として、誰を指名したかまで知る必要があった。

なにしろ、すでに神々の代理戦争では九十八人が指名されたと伝わっている。一度植え付けられた恐怖心は、たとえ一人の不明者がいても、その人間から狙われると思えば、脱ぐい去るのはできない。もし、警察が、この戦いを終わりにできるとすれば、それは指名を受けた九十八名、すべての人間を判明させ、その全員を説き伏せた場合であった。ところが、そうはさせない仕組

みが用意されている。神坂の話によれば、神の指名を受けた人物にも、全員の名前は教えないという。それは神さん方が指名した人数が、本当に九十八人なのか、それさえ誰にもわからないのであった。

第四章 戦いの始まり

二十一

秋風が吹く十月になったある日、突然姿を消していた順平から綾子に電話があった。しばらく振りに二人は、人目を避けるようにして会っていた。

綾子は厳しい顔で、五ヶ月近くも何故、電話一本もしてこなかったのかと怒った。無理もなかった。その間に順平は犯罪者として警察から追われていた。順平から綾子は、犯罪者にされるかも知れないと、打ち明けられていた。しかし、実際に犯罪者として追われるようになれば、聞かされていたとはいえ心が痛んだ。

そんな綾子を順平は悪かったと半笑いで宥めた。しかし、本当に綾子を苦しめたのは、その後の順平からの話しであった。

順平は綾子に、これから俺は、警察に自首をすると告げた後で、この事は健吾さんには話さないで欲しいと頼んだ。

それを聞いた綾子は、「どうして、どうしてよ」と、不満そうな表情で問うた。健吾はキャリア一種に合格した警察官僚であり現在では、警視庁ではそこそこの地位にいる。順平が困っているのなら、兄に相談をしない方がおかしいと思った。

順平は顔を曇らせ、しばらく口をつぐんでいた。

「……わからないんだ。誰が敵なのか」

「兄さんも敵なの？」

驚いたように綾子が順平をみた。

「いや、そうではないけど、警視庁にも神さんから指名を受けた人が居る。それもかなり上の人間だ。組織として警察がどのような動きをするのか、まったく予想できない」

「兄さんに限って……」

「それは、わかっているけど……」

綾子にしても順平の心配がわからない訳ではなかった。たしかに順平が知る名前には、警察や警視庁の何人かが含まれている。そのことは綾子も知っている。知ってはいても、実の兄である。綾子の気持ちのなかに、兄だけは別の存在だとの気持ちがあった。

綾子は泣いていた。無性に悲しかった。警察が何もしてない順平を追っている。兄は、その警察の中にいる。仕方ないとは思っても、やはりやるせなさは募った。ただ、救いは、こうして正直に自分には打ち明けてくれている事であった。

「おそらく何処かで、健吾さんの手を借りるようになると思う。ただ、その決心が今はついてない。しばらく健吾さんには黙っていて欲しい」

順平は静かに綾子に頭を下げた。綾子は涙を流しながら、その姿を見ていた。

翌日、順平は尾道と有田に会っていた。順平は警察から指名手配を受けている身のため、人目を避けないとならない。順平達の姿は茨城空港の駐車場に停めた、尾道のワゴン車のなかにあった。この駐車場は約千三百台の駐車スペースが有り広々としている。空港の駐車場としては珍しく全てを無料としているので、空港見学などにも手軽に利用できる場所となっている。

二人の見た順平は驚くほど、真っ黒に日焼けをしていた。

尾道達は、順平から自首をすとの話しを聞いていた。それなら、警視庁に勤める綾子の兄、健吾にも相談に乗って貰った方が良くと思いそれを話した。順平は、その事で昨夜、綾子と会ったと二人に話した。

尾道も有田も、何故、今日、ここに綾子の姿がなかったのか、それでわかった。

人を疑う事で成立する神々の代理戦争。その影響は綾子の兄である健吾まで疑わないとならない。尾道も有田も、あらためて順平の置かれた立場の厳しさを知った。

綾子の気持ちも順平の考えもわかるだけに、やりきれない思いがしたが、今は仕方ない。警察に追われているのは順平である。その順平の考えが優先であった。

「警察に自首して大丈夫なのか？」

有田が心配そうに尋ねた。

「おそらくな」

「おそらく？ それでいいのか？」

「いや俺も、今度ばかりは本気になった。だから、最初から捕まるのを覚悟で手は打ってきた」

「高円寺に借りた部屋、あれも、その為だな」

順平は頷いた後で、その事を話した。

外から出口がまともに見えない。複数出入り口がある事。建物の二階以上の部屋。これが部屋を探すと決めたときの順平の条件であった。理由は簡単である。ある時期から見張られると知っていたからであった。

元々、順平は、その部屋には住まずに別の場所に隠れると決めていた。その為に、簡単に人の出入りが、外からわかるような物件は避けた。その上で、堂々と実名で部屋を借りた。

尾道や有田のところに警察が来たと思った順平は、警察なら殺害や病院送りの方法は使わない。まして来るのが警察なら、逮捕状が出るまで部屋に押し入る事はない。

そこまで順平は警察の動きを読んでいた。その上で、警察なら何か理由をつけて逮捕してくると考えた。その場合、どのような罪であれ警察が、無実の罪を着せるには、絶対に順平にアリバイがあってはならない。となれば一人暮らしの男に罪を着せるには、アリバイを証明できる人間の居ない、部屋に順平が一人いる時間帯に、何かを仕掛ければ良い。それを逆手に使おうとする順平にすれば、如何にして部屋に居るように見せるかとなる。

順平は簡単な手を使った。それは部屋の蛍光灯に細工をする事であった。市販のデジタルプログラムタイマーを使い、夜、蛍光灯の電源を自動的にON、OFFをさせた。

「なるほど、夜、部屋の電気を点けていたのか」

「そう、毎日決まった時間に、点灯を繰り返すと怪しまれると思って、プログラムタイマーを使い、毎日、時間を変えて点灯させていた」

プログラムタイマーは、設定次第で一日に何度もON、OFFさせたり、曜日によってON、OFF時間を自由に変えたりできるタイマーであった。

「しかし、捜査員が踏み込んだ後も、部屋の灯りが勝手に消えたり点灯したりしていたら、捜査員に気付かれるのと違うか？」

たしかに、その危険はあった。捜査員も順平を逮捕できないとなれば、部屋の監視は、その後も続く。そのときに夜、部屋の明かりが勝手についたりすれば当然、不審に思われる。

「ついでに、赤外線センサーも組み込んでおいた」

順平は、いまでこそ電気と関係の無い地元の商事会社に勤めていたが、大学では電子工学を学んでいる。電子回路設計や電子部品を組んだりするのは、お手の物であった。

「赤外線センサー？ 手洗いで手をかざすと感知して、勝手に水がでるやつだな」

「そう」

赤外線センサーは、特殊なものではないので入手は簡単にできる。ホームセンターなどで販売されている防犯用ライトや、玄関に人が近づくと自動で呼び鈴を鳴らすタイプのブザーなどにも組み込まれている。順平は、それをタイマーの切り離し用につかっていた。

順平の借りた部屋は、順平が去った後は誰も人は入らない。当然、鍵はかかっているのだから。その鍵をあけて最初に部屋に入ってくるのは、順平を検挙するための捜査員や警察官だけである。そのとき、赤外線センサーが警官を感知してタイマー回路を切り離してしまえば、蛍光灯は普通の状態に戻り、壁の電源スイッチで作動する。

その仕組みが警察に見つかる心配はなかった。順平の部屋で殺人事件などが起きた訳ではない。現場検証にしても、順平の潜伏先を知る程度の通り一遍のガサ入れ。蛍光灯の中に隠した、小さな電子回路まで調べるような事はないと思った。

「なるほどな」

昼間、順平が何処にいるかわからない警察は、必ず夜、順平が戻っているかを確認する。それも遠くから。部屋の明かりが灯れば警官は、部屋に順平は居ると思ひこむ。

「何故、東京にしたんだ」

「勝負だと思った。長くは逃げられない。できるだけ早く犯人にされたいと思った。神さんから指名を受けた者は、東京が中心、警察もそう。東京なら警視庁がすぐに動ける。しかし、茨城に居ては、茨城県警に頼んだりしないとならない。無罪の罪を作るのだ。そんな簡単に同じ警察官でも頼めるものではない。早く捕まるには、こっちから東京に乗り込もうと考えた」

「そうだったのか、ところで、この後はどうするんだ」

「ここ、一週間ほどは、東京の弁護士さんと色々と打ち合わせをした。こちらには沢山の証人を用意した」

「警察絡みだぞ、その証人が裁判になったとき、証言を変えたりしないか？」

最初から無罪の人間を罪に落とす気なら、証人に警察が圧力を加えないとも限らない。

「そう、それが一番怖い。こちらも公判前の手続きはしないで裁判に臨むが、それでも裁判が始まれば、こちらの証人は警察に知られる。そこでだ、もし、俺の証人に警察が手を突っ込んでくるような事があったら、この映像データをネットカフェから、インターネットに流して欲しい」

そう言って尾道にメモリーカードを渡した。

「これには俺や証言をしてくれる人が、一緒に働いている映像が映っている」

「しかし、それだけで大丈夫か？」

「心配ない、ここまでして於けば、後は裁判官の判断、警察の手を離れる」

それから数日後に高円寺の連続放火犯として、順平が警察に自首をしたとのニュースが流れた。

二十二

順平は、すぐに起訴をされると翌月は初公判を迎えた。

弁護士と相談した順平は公判前整理手続き、なしでの裁判に臨むと決めていた。

公判前整理手続きとは、裁判を迅速に進めるために、検察官と弁護人双方が裁判前に協議し事件の論点や採用証拠などを持ち寄って、審議計画をたてる制度である。

公判前整理手続きは、殺人などの重大裁判では拒むことはできない。しかし、順平の起訴は放火とあって、公判前整理手続きは任意となっていた。順平にしたら、これを使わない手はなかった。何しろ今回の件は、普通の裁判ではない。相手は無実の罪を着せようとしている。事前に証拠などを出せば警察や検察はやっきになって、証拠を潰しにくるのは目に見えていた。その意味に於いては、放火という罪での起訴は順平には有利に働いた。

検察と順平の駆け引きのなかで初公判が始まった。

公判初日では人定質問や起訴状朗読の後に、検察による冒頭陳述がおこなわれた。弁護側は検察の主張には根拠はないとして犯罪を全て否定すると述べ、争う姿勢を明確にした。公判は翌日も開かれる事になっていた。初公判では検察側と弁護側でお互いの主張をしたに過ぎない。

当然であるが、順平は自分が無罪であると知っている。そうなれば検察の用意した証拠や証言は、嘘で塗り固められたものになる。裁判の始まる前から、それを知っているのが、逆に順平の強みでもあった。

裁判を大きく引っかき回しマスコミによって叩く。検察が強固な証拠を用意すれば、するほど、それをひっくり返された時には、検察や警察も責任が問われる。

場合によっては、神々の代理戦争の指名を受けた検察官や警察官を、逆に処分する事ができる。首尾良く神々の代理戦争の指名者が逮捕ともなれば、神さんのルールでは、それは順平のポイントになる。ただ、それがなくとも相手は権力を使い、無実の人間を罪に落とそうとしている警察官や検察である。自分に限らず、おそらく同じ過ちは繰り返される。そのような相手なら遠慮など必要はなかった。そう考えたときから、順平は単に無実を勝ち取るとの考えから、相手を徹底的に打ちのめす為の裁判戦術に変えていた。

方法は一つである。こちらのアリバイは示さずに、先に検察が用意した証拠や証人に好きに語らせた後に、きっちりとアリバイを証明する。それが全てになる。三日後に開かれると決まっている公判二日目には、検察は証人を用意している。そこが勝負であった。

神坂順平の公判初日を終えた直後、櫻井健吾は順平側が徹底抗戦をうったえたわりには、何も出さなかったと思った。

「なあ、高木さん、神坂はどうする気なのかな？ 証拠を示さなかったな」

「まあ、これからでしょう」

「それなら良いが」

「櫻井さん、それと神坂の身边に、公安部情報室の人間が居ましたよ」

「情報室？」

公安部情報室は、七年位前に新設された部署と聞いている。同じ警視庁にあっても公安部は秘密性が高いために、余り情報は流れてこない。聞くところでは公安部情報課は公安の中でも、特に情報収集のスペシャリストなどを揃えた部署のようであった。

櫻井は、どうなっているのだろうと思った。

「高木さん、神坂に絡んでいたのは、刑事部第五課の新谷とは違ったのか？」

神坂の容疑裏付けなどに走り回っていたのが、刑事部五係捜査員の神谷であった。

「神坂逮捕を直接仕掛けたのは新谷でしょう」

「じゃ、公安は関係ないな、……公安でも神さんの情報を掴んだのかな？」

「そうかも知れません」

公安は、過激派やテロなどを扱う部署、神々の代理戦争をテロと捉えれば、公安が動いても不思議ではない。公安が動き出したとなれば、自分達以外にも警察が知ったという意味では、救われたとの思いがある。ただ、問題は目前にある神坂の裁判となる。

「神坂から出た地検東は、この件には関与していませんか？」

「神坂の裁判を担当しているのは杉崎検事、ただ、このところ杉崎検事は東義彦とよく会っています。それと杉崎検事は東検事が刑事部にいたときの部下だった男です」

「そうですか……」

幾ら昔の部下とはいえ、特捜の検事と刑事部の検事が、公判前の忙しい時期に頻繁に会うというのも奇妙である。

「つながったな……」

櫻井の言葉に高木が頷いた。

東にしろ杉崎にしろ、そうなってくると神坂の件は、検察主導で行われた可能性が高い。その場合、現場の警察官は検察に操られた事になる。

櫻井は大畑が殺された事から、場合によると警察内部に神々の代理戦争を仕掛けた組織に荷担する者が、いるのではとの懸念をもっていた。

警察や検察が犯罪に手を染める。その意味では、神々の代理戦争から指名を受け過ちを犯そ

うと、加担者であろうと変わらないが、櫻井の警視庁の監察官としての立場からすれば、神々の代理戦争に荷担する者が警察内部にいるのは好ましくなかった。しかし、少なくとも、この裁判に関しては警察から直接、神々の代理戦争に荷担する者は現れてない。東の主導となれば指名者同士による戦いの構図となる。ここまで状況が揃えば、これ以上裁判を続けても得られるものはないだろうと櫻井は思った。

「神坂が裁判をひっくり返せば、その責任は全て警察に転嫁されるな……」

少し口を尖らした櫻井が独り言のように話した。検察が警察を使い神坂の一件を仕立てたとしても、裁判で神坂が勝てば、末端で証拠集めをした警察の責任に転嫁されるのは目に見えていた。警察と検察は仲間のようなものといっても、組織としては純然たる違いがある。検察がどうなっても警察組織には痛みはない。櫻井にすれば警察だけに責任を押しつけられては面白くない。

「あの裁判、潰せますか？」

「いいですか、相当荒れますよ」

その辺は抜け目のない高木であった。相当荒れると話すからには、裁判を潰す為の検察が用意した証拠や、証人に関する情報は得ているのだろう。

「かまわんでしょう。負ける裁判なら。ただ、潰すにしても、できれば検察に責任を取って欲しいものですね」

高木が頷いた。高木にしても警察組織の人間である。自分の所属する組織を守りたいとの気持ちは強い。裁判が終結する前であれば、警察は誤認逮捕をしたで逃げられる。

初公判から三日後、順平の裁判は二日目を迎えていた。

今日の裁判では検察側は、火災の現場近くで見つかったとする、順平の指紋のついたライターや、火災現場で順平を見たとの検察側の証人を呼んでいた。

最初は弁護側は、のらりくらりと審議に応じていた。検察側が、証拠の開示や検察側証人質問を行った。

そこで検察側証人である青木という男が、順平が火をつける現場を見たと言った。

順平を初め、田村弁護士が待っていた瞬間でもあった。これで、検察側の順平を犯人とした証拠が出そろった。

頃合いとみた田村弁護士により順平側の反撃が始まった。

「犯行日時は六月二十日から七月末に掛けて、犯行時間は、夜中の一時前後となっていますが、これで間違いありませんか？」

田村弁護士が、杉崎検察官に尋ねた。裁判長に促された杉崎検察官が答えた。

「間違いありません」

「そうですね、しかし、被告は、この期間、東京に居なかったのですが、おかしいですね」

弁護士の東京に居ないという言葉に、杉崎は被告席に座る順平をチラッと見た。まだ動揺は無かった。裁判官は意外そうな表情をした。それは、これまで弁護人側で述べてなかった重要な

話しであったからである。訝しげな表情を浮かべた裁判長が田村にいった。

「そのことは証明できますか？」

「証拠として、写真と給料明細を提出します」

裁判長に証拠が渡された。それを手にした裁判長は、厳しい表情で検察側をみたが、すぐに正面を向き田村に問うた。

「この事は、取り調べに於いて、被告人は取調官に話したのですか？」

「いいえ、述べていません」

裁判官が、困惑と少々の怒りを含んだ険しい表情で、再び田村に問うた。

「どうして、このような重要な話しを、取り調べで話さなかったのですか？」

「この裁判は、極めて特殊な裁判です。何故なら、この犯罪は何者かによって故意につくられた犯罪です」

「異議あり、裁判長、そのような予断を持たせる発言はとめて頂きたい」

すかさず、少々青ざめた表情をした検察官から声があがった。

田村弁護士も、ここが正念場だと思い話しを続けた。

「先に話せなかったのは、証拠の件が漏れた場合、証拠を消される恐れがあったからです。それは裁判を通して立証していきます」

裁判長が再び怪訝な表情をした。

田村弁護士は続けた。

「この事件を作った人間が、この法廷に居たのでは裁判は成立しません。裁判を成立させるには、証拠を隠しておく必要があったのです」

法廷に事件を作った人間が居るとの、被告側からの発言に裁判長は驚いた。驚いたのは裁判長だけではなかった。法廷に大きなざわめき起きた。

「静粛に！ 被告側弁護人の証言内容が理解できません。端的に述べてください」

「異議あり、本件とは何ら関わりのない事です」

すぐ検察がわも応じてきた。裁判長が検察を見ると、すかさず弁護人も続けた。

「証拠をすぐに出せなかった理由は、審理の過程ではっきりさせます」

「どちらも静粛に！」

裁判長にも、弁護側が慎重な言い回しをしているが、警察などを指して話しているとの推測はできた。

「これは大変重要なものにつき、裁判長より直接数点質問をします。検察、被告人双方とも静粛に」

すぐに裁判長は平静を装い順平に尋ねた。

「被告人は、いつから遠洋漁業に出ましたか？」

その言葉に、検察官の顔色が変わった。

「はい、五月二十八日、焼津港から大漁丸で出航、その後赤道付近でマグロ漁をしていました。船が焼津港に戻ったのは、警察に出頭する十五日ほど前です」

「それを、どうして裁判が始まるまで、黙っていたのですか？」

「先ほど弁護士さんが話したように、この事件は、誰かに作られた事件です。私は船に乗っていて日本にはいなかったのに、ここには検察側で用意した証拠や、証人までいます。日本に居なかった人間から、そのような証拠がでますか？ 不思議ではありませんか？ もっとも、これは不思議でも何でもないので。はっきり申せば警察か、あるいは検察によって作られた証拠だからです。その状況で先に証拠を出せば、それらもねつ造される可能性があったのです」

法廷内がざわついた。順平は平然とした姿で話しを続けた。

検察官が怒りに満ちた表情で、異議を申し立てたが裁判長は、それを制した。ただ、余りに大きな問題であった。被告は、警察や検察が証拠を捏造したと話した。裁判長の顔色は曇っていた。

「しかし、貴方は、どうして、そのような圧力があると気付いたのですか？」

裁判長は厳しい顔をしていた。

「明確な理由はわかりませんが、私を犯罪者にしたいとの意図が、最初から働いていたのは確かです」

そこは順平にしても、苦しいところであった。理由は勿論あった。神々の代理戦争。しかし、裁判はマスコミを通じで世の中に流れるものである。ここで順平自身が神々の代理戦争から指名を受けた人間であると話せば、それは活字となって世間に広まる。

そんな事をすれば闇に潜む、神々の代理戦争の指名者達に、自ら狙ってくださいと言っているようなものである。それは、順平にしても余りにもリスクが大きかった。

「明確な理由無しに取り調べ段階で、そのような重大な事を述べなかったのは、司法制度を無視した考えであり、私は、良い感情を持ってない、それは述べておきます」

裁判長と順平の話しに杉崎検事は握りしめた手を震わしていた。

「この様な場所で、このような話しをするのは、私も気が引ける事です。しかし、権力を持つ人間が悪意を持てば、普通に争ったのでは良いようにされてしまいます。その事は御理解願います」

「さきほどから聞いていますと、被告人は警察や検察を指しています。たしかに警察や検察も全てではありません。間違いもあるから、裁判が必要なのです」

初めて裁判長の口から警察や検察との言葉がでた。

法廷は異様な空気につつまれていた。

「間違った捜査をした可能性は否定はしません、しかし、それを故意に警察や検察がしたとするのはどうでしょう」

「後ほど私の弁護士さんから質問が検察証人にあると思います。検察証人が、私を見たという日、証人は新宿に居たのがはっきりしています」

「証人は高円寺に居なかった？」

順平は裁判長に頷いた。

「そうですか、わかりました」

裁判長の顔も厳しい表情であった。

裁判長は審議を再開した。裁判長が、確かめるように検察証人に聞いた。

「さきほど証人は、被告の犯行現場を見たと話しましたが、それは間違いはないですか？」

順平の話しを聞いていた検察側、証人である青木の顔は青ざめていた。

「……実際には見てはいませんでした」

ぼそぼそと声を落として話す青木に、裁判長が訝しげな表情を示した。

「見てない、しかし、調書には見たと？ いえ、先ほども見たと証言をしましたが？」

青木の堅くなった体が、一瞬、ピクッと動いた。

「……頼まれました。嘘の証言をするように」

「嘘の証言をすれば、法に触れます。その事は、最初に宣言をして御存じの筈です」

眉をひそめ目を細めて話す裁判長に、青木は項垂れていた。

「それでは、誰に頼まれたのですか？」

青木は迷っていた。しかし、ここまでくれば仕方ないと思った。昨夜、青木に警察を名乗る男から電話があった。その男は神坂を見たと言った夜、お前は友人達と新宿で酒を飲んでいたなどと話してきた。その後、男はすでに店の証言も、お前の友人の証言もある。何れ、お前の嘘は暴かれると言った。男は裁判官から問い詰められる前に、誰に頼まれたのか正直に話す事だと告げていた。

青木は頼まれた人物に弱みがあった。迷いながらも青木は証言席に立った。しかし、被告人が日本から遙か離れた赤道線上に居たと聞いては、早晩、自分の嘘は暴かれると観念した。青木はしばらく呆然と杉崎検事を見ていた。杉崎検事もぎらつく目で青木を睨み付けていた。それは誰の目にも異様な光景に映っていた。しかし、杉崎から目を反らした青木は、顔を横に向けたまま、その指で杉崎検事を示した。

その瞬間、平静であるべき裁判長の表情にも、驚愕の色が浮かんだ。傍聴席に大きなざわめきが生じた。新聞記者らしき人物が、慌てて外に飛び出す姿があった。

裁判長は、ざわめく傍聴席を細くした目で見回した。被告人から、特殊な裁判になると聞かされていたが、ここまであからさまな結果が法廷で示されるとは思いもよらなかった。

しかも、結果だけの問題ではなかった。検察官が証人に偽証をさせたとなっては裁判制度、その物を根底から崩壊させかねない重大な問題でもある。

裁判長は一時の戸惑いからさめると「本日の審議をうち切ります！」と大きな声で宣言をした。

急に取りやめになった裁判が、事の重大さを物語っていた。杉崎検察官の頭は、一時的なパニックに陥っていた。それでも、これは大変な事になったと気付くと、おろおろとしながらも、ともかく東検事に相談しなければとの、考えだけが頭のなかを駆け巡った。杉崎は一刻を惜しむように、人目を避けて裁判所内の片隅から、中央合同庁舎に居る東検事に電話をした。

翌日の新聞は、検察の暴走として、昨日の裁判を大きく取りあげた。早いところでは、すぐに大漁丸の乗組員などの話しも聞き、誤認逮捕であると報じていた。しかし、事態は、それだけでは終わらなかった。杉崎検事と東検事の裁判後の会話がネットに流された。そこには東検事が、杉崎を問いただす話しや、証拠捏造の話しが語られていた。おまけに、最後は、責任は、お前が一人でかぶれと杉崎検事を恫喝する東の言葉までが含まれていた。

これらの不祥事に驚いたのは、東京地方検察庁の上級に位置する高検検察庁であった。即座に東検事と杉崎検事が高検に呼ばれ事情を聞かれた。

その検察の慌て振りを目に櫻井は、青木に証言を変えさせたのも、ネットに検事の会話を流したのも、高木だろうと思った。元公安にいた高木は盗聴技術もあれば、人の弱みを逆手に取ることも容赦なくできる。その意味では、さすがに高木も怖い男だと思った。

ただ、これで検察が批判の矢面に立たされる。その分警察への批判は陰に隠れる。結果とすれば櫻井の考えたように高木は動いてくれた。どちらにしても裁判は終結である。それは神坂の早期の釈放を意味する。ここで神坂を逃す訳には行かないと考えた櫻井は、順平が収監されている拘置所へと向かった。

櫻井が考えたように、裁判から数日後には高等検察庁は、順平が漁船に乗っていたのを確認したのであろう。高検から指示を受けた東京地検は早々に控訴を取り下げた。それを受けた裁判所は、即時に裁判を開くと順平に無罪の判決を言い渡した。順平は、その日のうちに釈放となった。

裁判が終わると櫻井と高木が話していた。

「警察や検察に対する批判は大きいですね」

思ったより警察への批判も大きな事に、櫻井は多少不満げではあった。しかし、検察を巻き込まなかったら、その批判を警察が一身で受けていた。それを考えれば仕方ないと思うよりなかった。

「まあ、こちらが手を出さなくても、あの裁判は神坂が勝つのは決まっていた」

高木が頷いた。

「あのまま、行けば警視庁だけが悪者にされた。それに東検事が、神々の代理戦争の指名を受けていたのも間違いないだろう。東が神坂と同じように、政治家などに無実の罪を着せてからでは、もっと大変な事になっていた。これは、これで良しとしないと」

「そうですね。杉崎や東が検事のままでは第二、第三の神坂が生まれますから」

そう話す高木の顔を、櫻井は探るようにじっと見ていた。

二十三

何処であるかわからない。小さな部屋には若い女と男だけが居た。女は順平から沖子と呼ばれている女のようにであった。

「木曾さんの言った通りになりましたね」

女が男に言った。

「思ったより、結果は厳しいが仕方ない」

木曾と呼ばれた男が答えた。

「木曾さんは、大丈夫なのですか？」

「そうだな、さすがに僕も、ここで東が終わるとは考えてなかった。ポロポロだな地検は……」

女は、これでは組織の考えは、大きな変更を余儀なくされる。上層部もカンカンになって怒るだろうと思った。

「この計画が始まったときから、僕は神坂の身辺を洗った。神坂に繋がる人間が警察に居るのも知っていた。しかし、その警察官が、裁判にまで首を突っ込んでくるとは考えてなかった」

神坂は裁判期間中も収監されていた。誰か他に地検に手を突っ込む者が居なかったら、ネットに東の会話は流れなかった。

「まあ、警察のなかにも優秀な人間は居る。まだまだ警察も捨てたものではない」といった男が苦笑いを浮かべた。

「姿を消した方が、良いのではないですか？」

女が心配そうにいった。

「駄目だな、逃げきれない。それに僕は逃げるわけには行かない。僕は、この計画が潰れるのを、何処かで願っていた」

女は黙ったまま、男を見た。

「……どうして、そこまで木曾さんは神坂という男に拘るのですか？」

「この事件を始末するには、組織を外から冷静に見られる目が必要だ」

女は驚いたように男を見た。神々の代理戦争は、一旦、動き出したら誰にもとめられないように仕組まれている。それは、たとえ警察といえども。

「動き出した神々の代理戦争、とめる事が可能なんですか？」

「できなくもないな」

なんでもないように男はいった。何処か浮き世離れをし、組織からはみ出したようなところのある男。それだけに組織にあっても、人ごとのように冷徹に組織を分析していくのが木曾という男であった。

「神坂に、それができるのですか？」

「わからん、できるかも知れないし、できないかも。まあ、神坂なら可能性はありそうに思った」

「あの男に可能性が……」

「ああ、おの男は^{おおあま}大甘だ、それも解決には必要だからな」

男は微かに微笑み頷いた。ただ、女にはそれが何を意味するものなのかは、わからなかった。

「僕はもう、おそらく、ここには来られない」

女は悲しそうな顔をした。

「伝えて欲しい。時期をみて神坂に」

女は男をじっとみた。

「情報工学の力なら、僕は神坂には負けないと」

「……それだけで良いのですか？」

「そうだな、それがわからないようでは、神坂でも神々の代理戦争は潰せない」
女が頷いた。

二十四

検察が公訴を取り下げた事によって、裁判判決結果はわかっていた。尾道、有田、綾子も裁判所に向かっていた。釈放手続きを済ますと順平は、三人の出迎えを受けた。

裁判所を後にする時、順平には逃げまどう目標のない生活から取りあえず、一つの事をやり終えたとの小さな満足感があった。

徐々に順平は、警察の目を気にする事無く歩ける状態になった。正直、嬉しかった。やはり何といっても、神さんの相手のなかでも、順平にとって一番、厄介なのは情報収集能力と組織力に長けた警察関係を使ってくる相手になる。しかし、一度、大きくマスコミに取り上げられた同じ人間を、また同じような方法を使って罪に落とすのは、警察関係者に限らず使えない。そんな事をしようものなら必ず、その不自然さにマスコミも気付く。その為に裁判で冤罪事件を暴き大きな話題にするのが、順平の狙いであった。

これで取りあえず無実の罪で、警察に捕らえられる心配からは解放された。ただ、それは権力を使う相手からは、解放されたの意味に過ぎない。逆に権力が使えないとなれば、残される方法は生命や身体に関わるものとなってくる。まだまだ、隠れた生活をしないと出来ないが、それでも今日くらいは素直に喜びたかった。

四人は尾道の運転する車で、茨城に向かっていった。しばしの楽しいひとときであった。

「ほんとうに済まなかった。海の上に出たら携帯電話は使えない。連絡しなかったのは許せよ」

「まあ、お前の事だ。何とかするとは思っていた。しかし、よく漁船に乗るのを思いついたな」

「必死だよ、こっちも」

それは偽りのない順平の気持ちであった。ただ、今回、自らを救えたのは神々の代理戦争というルールの中で、起こると信じたからできた。それが無かったら、とてもではないが警察という組織が動いたら逃げるのはできなかった。

「とにかく、夜が怖かった。日本にいたら寝ている時間のアリバイを作るのができないと気付いた」

「そうだな。日本から離れた赤道直下の海上に居れば、その期間は確実に夜昼なしにアリバイが証明できる。海外にでる手もあったのではないか？」

「いや、相手が警察では、海外に出た事実を故意に消されると、今度は逆に証人がいなくなる」

綾子は暗い顔で聞いていた。兄の勤める警察組織が、そのような悪い事を平気で行うのが信じられなかった。

綾子の様子に気付いた順平が「綾ちゃん顔が暗いぞ」と明るく声をかけた。

「健吾さんが留置場まで来てくれた。逢って話しをした。もう心配はない」

順平が笑ってみせた。その笑顔に綾子の目が輝いた。

「健吾さんから連絡があったら、俺がお礼を言っていたと伝えて欲しい。田村弁護士に検察証人が新宿にいたと電話が入った。あれも健吾さんの近くの人からだった。それに、はっきりと言わなかったけど、検察側証人が裁判で急に証言を変えた、後ろで健吾さんが手を回してくれたのだと思う」

「ほんとうに」

「ほんとうだよ」

これまで健吾が警察官である為に、何となく疎外感に陥っていた綾子であったが、健吾が裏で手を回していたと知り、やっと仲間に戻れたような気がした。

「御免な、ほんとうに済まなかった」と、謝る順平に綾子は、小さく頷いた。有田や尾道達も良かったと自然に顔がほころんだ。

「これからどうするんだ順平」と、有田が話しかけた。

「隠れた生活は変わらない。そうだな、また那珂湊辺りに隠れる」

「那珂湊なら近くでいいや。時々見張りにいく」

「そうしてくれ」

二十五

高木は裁判所から順平達の後を追ひ、順平達が茨城に戻るのを確認した。順平は茨城に戻ると数日、有田の家に居候をしながら部屋を探し那珂湊の海沿いに部屋を借りた。

部屋を借りると、早々に尾道達がやってきた。

「良い部屋じゃないか、海が見える。贅沢だな」

「まあ、逃げる者の特権、そのくらいは許せよ」

順平が笑った。しばらくたわいのない話が続いた。

「居場所がしっかりしているだけでも、何となく安心だわ」と綾子が微笑んで話した。

そうだなと尾道と有田が頷いた。

「しかし、訳のわからない事件だな」

「さっぱりだ。けど神さんが居ないのは確かだ」

「お前、最初の時テレパシーのようなものを感じたと話したが、それは判ったのか？」

「ああ、あれか、小賢しい細工がしてあった。携帯電話に骨伝導の仕掛けがあった」

骨伝導とは頭蓋に音響情報を与える事によって、直接内耳で聞き分ける技術である。最近では、補聴器や携帯電話などにも使われるようになってきた技術である。

「それだと、すぐに気付くだろう」

「携帯電話の電源が、切れないようになっていた。携帯電話の電源を切ったと思っても表示が消えただけで実際には、携帯電話は生きていた」

「相手は、そんな仕掛けをしていたんだ」

「そう、しかも知っている骨伝導は頭にヘッドホーンや機器を押しつけて使うけど、それを進化

させ携帯電話を手で持っているだけで、手や腕などの骨を伝わって、内耳に届くようにした新たな技術が使われていた。だから戸惑った」

沖子が順平に骨伝導を使って話しかけたとき、携帯電話に念じろと命じたのも、電話番号の語呂合わせでメモを取らせなかったのも、携帯電話を手に握らせておく必要が沖子にはあったのだ。

「お前の位置を知られたのも、その二重電源の仕掛けによるものか？」

「そうだった。しっかりと携帯にGPSが組み込まれていた」

「それは、いつ知ったんだ？」

「水戸に居たとき、携帯をバラした」

「すると、漁船に乗ったのは、相手も知らなかった？」

「その仕掛けを知ったから、漁船に乗るのを思い立った」

順平は、携帯電話から二本のジャンパー線を出して、それを繋いだり切ったりする事でGPS機能を自由に操れるように携帯電話を水戸のホテルで改造していた。

「じゃ、今は、その沖子という女からの連絡は、途絶えているのか？」

「一応、GPSを切るのは仁義として沖子に伝え、了解は得ていたから問題はない」

「しかし、携帯電話は日本から離れた海上では使えない」

「まあ、そっちの分野は、元々俺の得意分野、携帯電話の周波数も調べておいたから、静岡の焼津から遠洋漁業船に乗る時に、仕掛けをしておいた」

普通の携帯電話は日本近海であれば陸地の基地局からの電波によって、ある程度の範囲までは使えるが日本から遠く離れてしまえば使えない。それでは沖子からの連絡は受けられず不審に思われる。それに順平にしても沖子との縁を切る訳にも行かなかった。そこで考えたのが、衛星回線を使う事であった。携帯電話にも衛星携帯電話がある。衛星携帯電話を使えば太平洋のど真ん中でも通話はできる。

ただ、沖子から渡された携帯電話は、幾つもある携帯電話に割り当てられた周波数の、隙間の周波数を使い普通の携帯電話の回線に潜ませて使われていた。このために、一般の携帯電話のつながる範囲でしか使えなかった。それでは太平洋に持ち込んでも使えない。

沖子から渡された携帯電話に電話転送機能があれば楽だと考えた順平は、それを調べてみたが、電話転送機能は使えなかった。そこでまず、始めに、沖子から渡された携帯電話の電話転送機能を回復させた。

後は簡単であった。衛星携帯電話を二台間で購入すると、漁船に乗る前に静岡の焼津に部屋を借り、そこに沖子から送られてきた携帯電話と衛星携帯電話一台をセットしておいた。

沖子から神さんの携帯電話に連絡が入れば、部屋に置いた衛星携帯電話の一台に電話は転送され、そこから、また転送によって海の上に居る順平の衛星携帯電話に繋がる。勿論、このときも焼津に置いた携帯電話のGPS機能は切り離しておいたと順平は話した。

「じゃあ、その沖子さんは、今でも順平君に五人の名前を告げているの？」

「きっちりと告げてくる」

「どうしてなの？」

「それが、良くわからない」

「今だから話せるが俺は小物として、神さんの戦争を始めるスターター的存在にあってと思って逃げた」

「スターターって、殺された警察官や会社役員と同じように、最初に狙われる人間だと思ったのね」

生命に関する話しである。さすがに話している綾子の表情も険しかった。

「そんな気がした。ただ、今は、もう、神さんの戦争が本気なのは、おそらくエントリーされた人間の間に広まっている。その意味では俺の役割は済んでいるように思う」

綾子が怖そうな顔をして頷いた。

「……しかし、おかしいな、俺達から見たら、お前は、スターター的存在ではないように見える」

「どうしてだ？」

「まどろっこしいだろう。相手が本気なら、お前に何も告げずにいれば、間違いなく順平は消された」

そうだなと有田も頷いた。

「そうよね、どうして順平君には、色々の情報が集まるのかしら、沖子という人から順平君が聞いた政治家などは、おかしい事に巻き込まれているから、嘘でないのはたしかでしょう」

腑に落ちないとの様子を浮かべながら、綺麗な瞳をパチパチと瞬かせ綾子がいった。

「……そうなんだ、そこが何ともわからない」

今回の警察の動きを見て順平も、それは強く感じていた。本気で罠に嵌める気であれば、神々の代理戦争、そのものを自分に伝える必要はなかった。単に狙わす相手だけに、自分の名前を告げれば、確実に罠に嵌めることができた。

「おかしいな」

有田も不思議そうにいった。

「たしかにな、なあ、順平、神さんからでてくる名前のリスト、その大方が東京の人間だよな」

「そうなる」

「何で、お前だけ、茨城なんだろう」

「それも不思議、もっとも俺が、こんな事件に拘わる事自体、不思議といえば不思議だけだな」

「それに、そんな組織の女なら、四月十五日と五月十五日を間違える訳はないものな」

「なあ、もしかすると神さんの組織は五月十五日までは、安全なところに順平を置いたのでないのか？」

「何のために？」

「わからんが、何かさせたかったのかな？ 順平は、本人だから気付かないかも知れないが、綾子さんが言ったように、余所から見ると、その組織からかなり優遇されている。例えば、最後の指名などの話しもそうだ。今でもリストがでてくるのなら、神さんの組織は、お前に、まだ、何か

をさせたいのかも知れないな」

「私の勝手な考えだけど、指名者リストで何かを、順平君に伝えようとしているのではないのかしら」

「リストで何かを伝える？」

順平は綾子の言葉に、これまでは、沖子の告げてくる名前は、自分を狙ってくる相手としてだけ考えていたが、もしかすると、それだけでは無いのかも知れないと思った。

二十六

十一月十五日、順平は沖子からの電話にでた。五回目となる、新たな五人の参加者名を聞くためであった。

「順平、良い知らせだ」と沖子がいった。

「なんだ」

「神々の評定委員会で、東検事の束縛は、順平のポイントになるとの発表があった」

「そうか、そうすると俺は、一応、足切りの対象からは外れたんだな」

「感心をした。いや、良くやったと思う」

「少しは見直したか？」

「まあ、な」

「これまでに、俺は二十五人の氏名を知った」

「そうそうたる人物だろう」

「ああ、大したもんだ。――後一回あるんだな」

「もちろん、あと一回教えるよ。それで三十人。それだけいれば、数人始末すれば最後まで残れるかもな」

「無理はしたくないな、とりあえず、足切りが無くなったんだから」

「そう言わずに頑張れ」

「しかし、何で、半分にも満たない三十人の名前しか教えないのだ」

「別に理由はない。決まりだ」

「嘘をつけ、理由はあるだろう」

「……………」

「全員の名前がわかれば、恐怖は半減する。疑心暗鬼と恐怖で支配するには、誰に狙われるかわからなくした方が効果がある。まだ、あるな。如何にもゲームを大きく見せられる。他にもいるかも知れないとなれば知ったもの同士で組んでも意味はなくなる。いってみれば、このゲームから抜け出せなくする。違うのか？」

「お前、結構、頭、いいよな。――システムを構築する時に、どのように最後まで人々を疑心暗鬼にして戦わせるかと考えた。それには誰とも知らない人間から狙われるとの恐怖を植え付けるのが効果的。順平の言う通りだ。それに全てを明かせば、身内で手を組むような事もできる。それではおもしろくないからな」

「上手い考えだ」

「そりゃ、そうだ。考えたのは神様だからね」

「神さんか？」

「そう」

順平は、沖子と話しながら別の事を考えていた。いつかの綾子の話から、沖子から告げられた名前を一覧表にしてみた。おかしいのである。順平の手元に今、二十五人の名前がある。

その二十五人の名前は、与野党議員や、検察、警察庁、高級官僚の名前である。順平は、その名前をグループ分けしたときに、指名の傾向から見て、あるべき筈の場所からの指名が無いことに気付いた。

数日後の夜、尾道と有田が来たとき順平は、その事を話していた。

順平は二人に、これが神さんから指名を受けた、二十五名の名前だと言いながら、氏名を書いたメモ用紙を二人に示した。

「このグループ分け見てくれ」

そこには政輪党代議士、自由真党代議士、官僚、警察庁、警視庁、検察庁、裁判所、一般人等と順平なりにグループ分けしたものが書かれていた。

「俺には、これを見ても何も判らないが、順平は、ここから何を見つけた」

「警視庁だけ幹部の名前がない」

「警視庁？」

「そう、警視庁で指名を受けているのは、すでに四月に亡くなった大畑という人と高木、佐田、吉川などとなっているが、調べたところ、警視庁の幹部に該当する人間は居なかった。幹部でないとすれば、おそらく現場に近い捜査官や内勤者などになる」

「警視庁の幹部が入る必要があるのか？」

「当然入ってくる。警視庁を束ねる警視総監は、警察庁長官の後に続く地位だ。普通、警察といえば取り締まりにあたる警視庁が思い浮かぶ」

東京には二つの大きな警察組織がある。警察庁と警視庁である。

警察庁が法整備や全国の警察組織の指導監督など行う、事務方的要素の強い庁とすれば実際に犯罪捜査などに当たるのが、警視庁であった。

「警察の幹部として指名があるのは金城次長や田所参事官でどちらも警察庁の人間、これがあるから警察幹部も含まれているように見えてしまうが警察庁の、このクラスの人間は、警視庁なら副総監や局長クラスだ。その辺りの名前がないのは不自然と思わないか？」

神々の代理戦争の相手を狙うという意味からすれば、実働部隊を持たない警察庁より、大きな実働部隊を持つ警視庁により比重がかかっても良いのであった。

「俺は警視庁と警察庁の違いがよくわからないが、そんなおかしな事か？」

「確かに警察庁でも、その影響力を使えば、色々な事はできる。しかし、警察庁を一言で例えるなら、警察の事務屋さんの組織。直接、事件現場を捜査する捜査員もいなければ、パトカーが

ある訳でもない」

「警察庁にはパトカーもないのか……」

「ない。現場を走るパトカーや捜査員を、抱えているのが警視庁だ。神々の代理戦争に限っての指名なら、警視庁の人間の方が上位になるような気がする」

「たま、たま、お前の知らされた人間から漏れている事もあるし」

「たしかに、その考えはできるが、何かおかしく思う」

「そうか」

「警視庁絡みでは、もう一つ困った問題があった。――実は、この間、綾ちゃんの前では話せなかったが、健吾さんの近くに警視庁の高木という男が居る」

二人の顔色が曇った。高木憲久、警視庁の人間として順平が示したリストに載っている名前である。

その人間が健吾の近くに居る。それを二人は、どう考えてよいのかわからなかった。リストの偏りよりも、こちらの方が遙かに大きな問題だと思った。

「……その高木という人物は、健吾さんの部下なのか？」

「いや、元公安に居たと健吾さんは話していた。部下とは言ってなかった。健吾さんと話したの拘留場での面会だから、詳しくは聞けなかった。ただ、こちらが高木憲久の名前を告げると健吾さんの驚く顔があった」

「驚いたんだな、健吾さんは？」

「ああ」

目を細めた順平が頷きながらいった。

「……綾子さんから、高木の名前は伝わってなかったのか？」

「沖子から最初に聞いた五人のなかに高木が含まれていた。それは自分で調べたから、綾ちゃんには話してなかった」

「健吾さんに聞かれたのは、神々の代理戦争に関してだな」

「そうだった」

「健吾さんが、お前に注目する理由があるのか？」

「あったはずだ。俺は綾ちゃんに総理大臣が襲われる話をした。そして、その通りになった」

「そうか、それならお前に会いに来て、おかしくはないな」

順平は頷いた。黙って聞いていた有田が、順平や尾道の迷いを断ち切るように言った。

「駄目だな。健吾さんは信じられても、高木が近くにいたのでは。――神々の代理戦争の中では、その人と順平は敵同士、それでは危なくて仕方ない。これからは綾子さんに色々の事を伝えるのは、控えた方がいいのかも知れない」

順平の裁判で受けた検察の傷は、余りにも深かった。あの裁判によって検察が証人に偽証をさせたり、証拠捏造をしたことが明らかにされ、その結果、四人の検察官が逮捕されるという前代未聞の事態となった。検察は外部検証チームを作り、順平の裁判に関わる検証をしている最中であつたが、検察がどのような動きをしても、検察批判はやむことはなかつた。

ついには検察不要論までが現れていた。

余りに惨憺たる現状に一時は言葉を失っていた検察であつたが、すでに代議士に対する数々の噂は報道として伝わっている。その扱いを巡り検察内部は揺れていた。

何もないときであれば、たとえ政治家であっても遠慮する必要はなかつた。しかし、検察批判が渦巻くなかでは、少し事情が異なつた。検察に不祥事が起きたとき、検察問題を協議できるのは最後は、国民からの負託を受けた政治家になる。まして名前にあがつた政治家は権力中枢にいる人物とあつては、政府を刺激したくないとの考えが検察内部に生まれても仕方なかつた。

しかし、ここで、もし検察の不祥事を理由に、不正をしていた代議士の逮捕を見送るような事になれば、国民からの反発は更に強まるのは必至であり、まさに検察は天秤にかけられた状態であつた。ただ、このときの検察はしたたかであつた。政権が強固なものであれば、おそらく政府の意向に傾いた。しかし、すでに現政権は不祥事によってこの先、どうなるかわからない状態にある。それなら不安定な政権にすり寄るよりも、検察としての正義を貫き、国民の反発を少しでも和らげる。そのように考えた検察上層部は、名前のあがつた代議士の逮捕に向けて活発に動き出した。

十二月四日、臨時国会は予定通りに閉幕をした。次々に起こる政権与党代議士の不祥事に強行に国会延期を叫んでいた野党自由真党であつたが、同じような不祥事が自由真党にも広がりを見せ始めると、会期延長は国民に対するポーズだけで、強くは与党に求めなかつた。

その年も押し迫っていた。街には冷たい師走の風が吹いていた。順平は政局の混迷を横目に見ながら、神々の代理戦争より告げられた指名の偏りが気になっていた。すでに警視庁の幹部だけがリストから抜けていると気付いていた順平であつたが、そこに新たな疑問が加わつた。

何の手がかりもない順平にすれば、神々の代理戦争は信用ならないとわかっていても、沖子から聞かされている代理戦争のルールの中かで、物事を考えていくよりなかつた。その考えでもう一度リストを見てみた。そうすると警視庁の件と別に、もう一つ、おかしい点が浮上してくる。それは今、国民の受け皿として、もてはやされている神明党の代議士が、リストに誰も含まれていないものであつた。

支持率低下に喘いできた現政権の解散は、神々の代理戦争がもちあがる以前から、囁かれていた。まして選挙ともなれば、与野党二大政党、どちらも不人気で過半数に届かないというのは、多くの人の現在の見方であり、ここ数年、国民受けする政策を掲げてきた神明党は、小さい政党ながら次の選挙では、キャスティングボートを握るといわれている。

神々の代理戦争では九十八人が指名を受けたとなっている。沖子の話しを元にして考えれば、多くは力のある与野党の最大政党から最初は選ばれる。神さんのしきたりでは、同じ人間に対してのダブリ指名はできない。ダブリ指名ができないとは、後から指名をした神さんが、ある人物を指名しても駄目だとなれば、それは違う神さんが、その人物をすでに指名した後だとわかる。そうであれば後から指名をする神さんは、二大政党の多くの有力代議士が選ばれているとわかるのであった。

そのとき神さんが鈍重でなければ、指名をされた代議士は何れはトラブルに巻き込まれるのもわかる。政治家のトラブルとはすなわち党の不祥事となり、その政党の支持率にも影響を与える。与野党の大きな政党代議士に多くの指名が集まれば、二つの党ともに支持率低下は避けられない。現在、政治情勢は緊迫した状況にある。当然、このとき問題になるのは選挙であった。

この状況で二大政党が、神さん達からの指名で、更なるごたごたが起きれば、浮上するのは神明党であり、解散による選挙ともなれば神明党が躍進するのは容易に想像できる。沖子の話しでは、この戦いは三年と長く早々の解散がなくとも、後、一年少々で衆議院は任期満了で選挙になる。

選挙がないのであれば、現在、力のある代議士を要する二大政党に神さんの指名が集まるのは理解できる。しかし、三年との長さを考えれば、次の選挙で、ほぼ確実に政権につけるのは、どちらの党とも連立を組める神明党となってくる。

少し長い目でみたら政権に一番近い、神明党の代議士を選ぶ選択が当然生まれて然り。

そこまで考えたとき、神明党から一人も指名者がでてないのは、やはり不自然であった。その疑問を感じた順平は、調べてみようと思った。

二十八

年が変わった。順平にとっても本来は華やかな新年も、今年の年開けは何処か様相が違っていた。仲間の元に戻れた嬉しさのある反面、正体の判らない相手に、神経をすり減らすのは今でも変わらない。それでも、多少でも相手を調べる手掛かりを得たのは、気持ちの上では救われていた。もう、逃げ回る生活は嫌だと思いながら、着々と準備を進めていた。

一月十四日の夜の事であった。明日は最後の五人が沖子から知らされる日になる。順平は、岸川達を茨城空港の駐車場に呼んでいた。

順平が有田から借りた軽トラで、駐車場に入っていくと尾道のワゴン車があった。

順平は、尾道のワゴン車の横に軽トラックを止めると、尾道のワゴン車に乗り込んだ。中に居た岸川が指を二本立て、敬礼のような仕草をした。同じように”よっ”と順平も、指を二本かざした。

「お前、大変だったな。東京でマップに捕まるとはな」

「俺も、あんな事になるとは思わなかった。それより頼んだ二十人、何とかあったか？」

苦笑いを浮かべた順平がいった。

「それなら大丈夫だ」

「すまないな。――これが東京の地図だ」

そういうと順平は、岸川に地図数十枚を渡した。

「軽トラの荷台に荷物がある」

「……わかった」

そんな遣り取りの後、四人はワゴン車からでると隣に停めてあった軽トラックのそばにたった。

岸川が、地図をみると周囲にとめてあった車から、数人の男が降りてきた。

「この荷台の荷物を運んでくれ」

岸川が声を掛けると男達は、順平達に頭を下げ軽トラから段ボール箱をおろして、自分達の乗ってきた車に積み替えた。

「順平、俺達は、間違いなく十五日に東京にいる。お前の指示を待つからな」

「すまん、よろしく。地図の番号と装置の番号は合わせてくれよ」

「オーライ、それは俺が責任を持つ、心配するな」

順平が頷いた。

「それよりお前こそ、注意しなよ。何かあれば、いつでも駆けつける。百人位なら、今でも集められるぞ」

順平が、ありがとうと頷くと岸川は、男達と一緒に帰っていった。それを見送りながら有田が、

「順平、俺は昔から不思議だった」

「なにが」

「何故、昔から、お前と岸川は仲が良いんだ？」

今は岸川と親しくしてる有田も尾道も、社会にでてから順平を通して岸川とは親しくなっている。

「別に、普通の仲だけだな」

「そうか、結構信頼しあっているよな」

「短気で手は早いけど、根は悪い奴ではなかった、それだけだ」

「お前と、岸川は殴りあったよな」

尾道の言葉に順平は、手を何度か振って、それはないといった。

尾道は岸川と順平が、高校の時に殴り合いをしていたのを知っている。当時の岸川の手下であった一人が尾道の家に近くに住む尾道の後輩だったので、その様子を聞いていた。

高校のときから、どちらかと言えばチャラチャラしていたのが順平、硬派を気取っていたのが岸川。同じ街のなかで目に付く順平に、いつかは焼きを入れたいとの思いが岸川にはあったのだろう。

河川敷に順平が呼び出されたのは、高校二年の夏であった。そこには岸川の手下のような学生も数人いた。

二人はすぐに殴り合いに成ったが、岸川にも順平の強さが伝わってきた。しかし、二人とも血

気盛んな学生である。二人は本気で殴り合った。しばらく殴り合った後で、順平の拳が、岸川の顔面を捕らえる間際に止まった。しかし、同時に繰り出していた岸川の拳は、停めることが出来ずに、順平の顔面を捕らえると、そのまま、大きく順平は後ろにのぞけていた。

順平は打たれた顔を手で、ひとなぜすると「痛って」といった後に「負けたよ」といって岸川を見ていた。

喧嘩慣れしている岸川である。順平が拳をとめたのは、わかっていた。しかし、岸川の拳が順平を捉えた事で周りの男達から奇声が上がった。岸川は、しばらく握った拳をふるわせ順平を睨み付けていたが、騒ぐ男達をちらりと見ると、岸川は氣勢をあげる男達に向かい「俺の負けだ！」と怒鳴りそのまま、その場から離れていったという。

それを聞いた尾道は、手下の前で恥をかかせない為に、順平はわざと負け、それに気付いた岸川も潔く負けを認めた。そのような事であったのだろうと思った。

しばらくぶりに尾道は、その事を思い出すと、今でも二人の性格からして、らしい話しだと思った。

順平も、手を振って喧嘩はなかったと有田達には示しながらも、そんな事もあったなと当時を思い出していた。その岸川も一時の迷いから覚めると必死で働き、今では工務店を経営する身となっている。立派な奴だと思った。それに比べて自分はどうか。こうしてみんなに迷惑をかけて生きている。これは、真面目に生きてこなかった償いを、神様にさせられているのかも知れないとの気がした。

「……どうした、順平、急に暗い顔になって」

「いや、なんか、みんなに迷惑をかけて済まないと思って」

「あのな、これだけは言っておく。ダチは誰一人掛けても寂しいものだ」

「そうだ、少しぐらい迷惑でも、まわりで飛び跳ねていた方が安心できる。お前だってそうだろう」

順平が二人に頭を下げた。

「ところで、何を岸川に頼んだ？」

「東京で調べたいものがある、それで岸川を呼んだ」

翌日、待っていた沖子からの連絡が入った。電話を終えた順平は、新たに知らされた五人と、これまでに知らされた二十五人を合わせて見ていた。

そこにも神明党の代議士の名前はなかった。やはり不自然だと思った。

翌日、岸川が順平を尋ねてきた。昨日、岸川は仲間と東京に居た。岸川は順平から預かった装置から、メモリーカードを外して持ってきた。

「装置は二十台、全て問題なく動いた。これが記録したデータだ」

そう言いながら、二十枚のメモリーカードを順平に渡した。

「済まなかった」

「いや、それはいいが、これで何を調べたのだ」

「相手の居場所を調べようとした」

「わかったのか？」

「いや、これからだ、このデータを解析してみないとな」

「そうか、頑張れよ」

そう言い残すと岸川は帰っていった。順平は、岸川が帰ると、さっそくメモリーカードをパソコンに入れて解析を始めた。

次の日には、全ての解析を終えていた。そこには暗く沈んだ順平の顔があった。

(……いつのまにか、俺は飛んでもない化け物を相手にしていた)

そう心の中で呟くと、順平は強く目を閉じた。相手が余りにも悪かった。目を閉じていると、次第に気持ちが萎える自分を感じた。

二十九

順平の様子がおかしかった。今日も、尾道と有田は綾子を伴って順平のところを尋ねていた。すっかり順平は無口になっていた。これまで順平はどんな危機にあっても、仲間^{じょうぜつ}に逢えば明るく饒舌に振る舞っていた。

順平の身に何が起きたのだと尾道達は心配した。

変わったのは岸川達が東京から戻ってからだ^と尾道は思った。あれから、事件についての話しを順平は一切しなくなった。こちらから聞いても、曖昧に頷くだけで話しに追従はしなかった。

今日、順平は何かを決心したように疲れた表情で「もう、ここには来ないでくれ」と別れ際にいつてきた。

驚いた尾道達は、どうしたんだと問いつめても、順平はうつむき加減で黙ったままであった。そんな順平を綾子は悲しそうに見ていた。

茨城空港の駐車場で岸川達と逢ったとき、順平は東京で電波を調べると話していた。尾道と有田は、ここに来る前に話そうとしない順平に変わり、岸川に話しを聞いた。しかし、岸川も電波を調べてきたと、順平が話した以上の事は口にしなかった。

無骨だが律儀な男である。仮に岸川が詳しく知っていても、順平が語ろうとしなければ、まず岸川が話すことはないだろうと思った。

急変した順平に、何か割り切れない気持ちを持って、三人は順平の所から帰った。

尾道達が帰ると順平は、静かに考えていた。ここに居れば、何れ奴らを巻き込む。それは順平としては絶対に避けないと知らない。その為に、自分は、ここに居ては駄目なのだ^と自分自身に言い聞かせた。しかし、それは、また、一人になる事でもあった。仲間から離れていく寂しさは昨年、嫌というほど味わった順平であった。一人になるのかと考えると躊躇いが生じた。それでも順平は、その気持ちを払いのけるように、立ち上がると、部屋の片付けを始めた。

翌朝の事であった。尾道から、有田が刺されたとの電話が順平にあったのは。

「それで有田は？」

電話を手にした順平が、顔色を変えて尾道に問うた。

「命には別状はない」

目を細め、歪めた表情をした順平の顔に、一瞬ほっとする様子が見えたが、再び順平の表情は険しいものになった。

「順平、良く聞け、お前も狙われている。これから、そこに岸川と行く。外にでるなよ」

「俺も狙われている？」

「間違いない」

「ともかく、外にはでるな」

緊迫した尾道の声であった。

しばらくして二人は、順平の那珂湊市に借りたアパートに到着した。

「有田は、誰にやられた？」

怒りに震える声で、順平が尾道に問うた。

「誰にやられたのかはわからない」

「ただ、岸川が東京から戻ると、時々、俺や有田、お前のところもだ。影から見張ってくれていた」

順平は、黙って座っていた岸川を見た。岸川は唇を少し歪めたが、何もいわなかった。

「岸川の話だと少し前から、俺達の周りにおかしな連中が現れていたようだ」

「済まなかった。もう少しはっきりしたら、お前らに用心を呼びかけようと思っていたが間に合わなかった」

岸川が口を開いた。

「いや、謝るなよ。礼を述べるのは俺達だ。済まなかった。近くに岸川の仲間が居なかったら、有田もどうなっていたかわからない」

大きな体を丸めて、済まなそうに話す岸川に尾道が、諭すように話した。順平は、二人の話を聞きながら、何で、こんな事になったのだと思った。いや、こんな事が起きる筈はなかったと頭の中は混乱していた。

「……しかし、何故、岸川は俺達が危険だと思った」

順平が声を絞り出すようにして言った。

「話していいな」と岸川が、確認するように順平を見た。順平が黙ったまま頷いた。

「先日、順平に頼まれて東京に行った」

「駐車場で会ったとき、東京で電波を調べると話していたな」

「そう、それで東京に行った。そのときに順平が調べていた場所は警察だとわかった。それで何となく用心が必要かと思った」

元々、警察嫌いの岸川である。順平が調べているのが警察と知り、嗅覚がそうさせたのだろうと尾道は思った。

「そうか、済まなかった。そうすると有田は警察にやられたのか？」

「それは、わからない」

二人の話を強ばった顔で聞いていた順平であったが、その握りしめた拳がブルブルと震えていた。

「……どっちにしても俺の責任だ」

「お前が責任を感じる気持ちはわかるが、しかし、お前も巻き込まれた一人だ。それは俺達にもわかっている」

そうは言われても、順平の心が晴れるものではなかった。

「尾道の言う通りだ。今は責任が誰とか言っても始まらないぞ。問題は、これからだ」

それでも順平からの返事はなかった。

このとき、順平はすでに相手の正体が何かを知っていた。有田が襲われた。順平の知る敵であれば、自分以外の人間を襲うとは思えなかった。それだけに順平の頭の中はゴチャゴチャになっていた。しかし、どちらにしても、自分の甘い考えで有田は襲われた。後悔や迷いが一挙に順平を襲った。その途端、何か順平の中で崩れた。順平の表情は次第に虚ろなものとなっていった。

「……順平、この場所は、すでに知られている。しばらく俺のところで、どんな手が打てるか考えてみる」

「……駄目だ、お前らに迷惑がかかる」

順平は無表情のまま岸川にいった。

「迷惑など関係ない。俺のところなら、腕っ節の強い住み込みの従業員もいる。ここよりは安全だ」

それでも順平は無表情のまま、動こうとはしなかった。

「……いいか、相手は警察、俺さえ消えれば、誰にも迷惑はかからない。俺は、ここを動かない」

ボソボソと話す順平を岸川がじっと見ていた。

そのとき、ずっと岸川の手があがると、その手は順平の頬に飛んだ。順平の頬からピシャッと大きな音がでた。

「何、ゴチャゴチャ言ってる。もう、お前だけの問題じゃないぞ」

岸川が鋭い目で順平を睨んだ。

「そうだ、どうやら俺も狙われている。役所には休暇届を送った」

尾道が苦笑いを浮かべ静かにいった。

しばらく順平は混乱した頭で、二人の顔を見ていた。

「尾道も狙われている、どうして……」

混乱した頭で、順平が口のなかでぼそっといった。

「わからんが、本当だ」

そういった岸川をしばらく順平は、遠くをみるような精気を失っていた目で見ている。

理由はわからなかった、しかし、二人が狙われたとの現実があった。現実気付いたとき、迷

惑をかけている仲間は、自分が守らないとならないとの気持ちがやっと動き出した。徐々にではあったが、順平の目には精気がもどり始めた。

「順平、岸川に甘えるぞ」

尾道の言葉に、順平がはっきりと頷いた。

「順平、今も、お前は見張られている。この後、其奴らをまく。仲間の車を三台用意している。巻くのは簡単だ。俺達の乗った車の後ろに、三台の仲間の車を挟めば、相手は追跡できない」

順平が頷いた。岸川の仲間となれば、車の運手に長けた者達である。心配はないと思った。

眩しい朝日が輝く中、順平達を乗せた岸川の車が走りだすと、すぐ後ろに岸川の仲間の車が一台ついて走りだした。その後不審な車が走り出した。

道路はすいた時間帯であった。岸川は後ろに注意しながら車を運転していた。岸川の車と岸川の仲間が運転する車の間に、二台の車が割り込むように入ってきた。それも岸川の仲間の車であった。五台の車が連なって走り出すと、岸川の仲間の車は徐々に車間距離を伸ばしていった。いつしか、仲間の車一台がルームミラーに映るだけで、他の車は確認できなくなっていた。

岸川の経営する工務店は、茨城空港からさほど離れてない場所にあった。茨城という地方での工務店経営であるために、敷地面積は結構広々としている。そこに鉄筋三階建ての事務所兼住居を構えていた。一階が工務店、二階には岸川の住居があり、三階が住み込み用従業員の部屋となっていた。順平達は、三階の一室に厄介になる事になった。

その順平も、岸川の所に戻る頃には、気持ちが吹っ切れたのか、あるいは仲間を何とかしないと強いの強い気持ちが、そうさせたのか、いつもの順平に戻っていた。

三人はストーブを前に部屋の中で、胡座をかいて座っていた。

「順平、済まなかった」

先ほどの張り手の事であろう。岸川がいった。

「効かんよ、あんなもの」

順平が苦笑いを浮かべていった。それで終わりだった。しかし、落ち着けば今度は二人を巻き込んだ事を、順平は考えないとならなかった。

「順平、さっき、お前、相手は警察と言っていたが、これまでも順平は警察に狙われていたのではないのか？」

すでに相手は、有田を襲い尾道まで狙っている。隠していても意味はなかった。いや、二人が自らを守るには、話さないとならなかった。

順平は大きなため息をつくとき、目を細め険しい表情で話し始めた。

「……これまで話していた警察とは、全く意味が違う。そうだな、これまで考えていた敵というのは神さんから指名を受けた警察や、警察を利用して襲ってくる相手だった。けどな事件の中心にいるのが警察だった」

尾道と岸川は意味が取れなかったのか、不思議そうに順平を見た。順平が続けた。

「はっきり言えば、神々の代理戦争を仕掛けたのは警察だ。警察内の組織によって行われている」

二人が驚いたように順平を見た。これまで警察の人間も神々の代理戦争に巻き込まれた人間と考えていただけに、その警察が仕組んでいたとなると話しはより深刻であった。

何かの間違いではないのかと、尾道と岸川は顔を見合わせた。

しばらく誰からも言葉はなかった。

「……だから話せなかった」

「それでお前は、何処かに去ろうとしていた」

唸るように尾道がいうと、苦しそうに順平が頷いた。

「相手が警察内の組織と知り俺も諦めた。とてもかなう相手ではない。しかし、そのとき奇妙な安心もあった。訳のわからない組織ならいざ知らず。相手が警察なら、これでお前らには、迷惑はかからないと思った」

「俺達が、その事を知らなければ警察なら俺達を、狙わないとお前は考えたんだな」

「そうだ、だってそうだろう、関わっているのは俺だけ、どんな理由があるにしろ邪魔なら、俺だけ始末すれば良い。神々の代理戦争と関係のない、お前らまで警察組織が狙うなど考えられないだろう」

順平は怒りと悔しさから、唇を咬みながらいった。

なぜ、順平の様子が急変したか、やっと尾道や岸川にもわかった。神々の代理戦争を仕掛けたのが警察組織と知ってしまった順平は、それを仲間が知れば、今度は、その仲間までもが警察に狙われると考え、仲間の元を離れる決心をしていたのだと。

順平は順平で悩んでいたんだと、いたわるような尾道と岸川の目があつた。

「それなのに、なぜ、有田は狙われた……」

納得できないのか、顔を顰めた順平が、苦しそうにいった。

「すでに警察組織ではないのかもな」

岸川が、少し怒りを含ませていった。警察組織にあっても、警察にあらず。元々、おかしい事を始めた連中であれば、そこに一般常識的な警察組織という考えを持ち込むのは、危険だと岸川は言いたかったようだ。

「そうかも知れない。しかし、相手の正体が警察となれば、この先、俺達の戦いは生半可なものでは済まないな」

尾道が頷きながらいった。

「済まない、大変な事に巻き込んだ」

「何を言ってる、お前だって巻き込まれた一人だ、おなじだ、俺達も、なあ岸川？」

「そうだ、勝手に相手が近寄ってくる、そんなもの防ぎようがない」

「そうか」と順平は頷くよりなかった。

「……しかし、どうして警察だとわかった？」

「尾道には前に、神々の代理戦争で不自然な指名傾向にある話しをしたな」

「警視庁に幹部に指名のない話しだな」

「それと、もう一つ神明党に指名者が居ないのもおかしいと思った」

順平は神明党に指名者の居ない不自然さについて、掻い摘んだ話しをした。

「その辺をはっきりさせたかった。それで、一月十五日に岸川達に東京に行って貰った」

「あの日、順平に頼まれた俺達は東京へ行った。東京二十カ所で電波の強さを計ってきた。順平が示した測定場所の中心にあったのが警察庁や警視庁、それに、その神明党本部などだった」

尾道が頷いた。そこからは順平が話した。

順平の話しによれば、沖子から告げられた名前に、警視庁幹部や神明党に指名がないのを不審に思った順平は、場合によると、この辺りから沖子は電波をだしているのかも知れないと考え、市販の電波探知機を購入して、それを改造して沖子から送られてくる、携帯電話の周波数を拾えるようにした。

一月十五日は、沖子から最後の指名者を知らせてくる日であった。電波の発信元を知るには複数の違った場所で、指向性のあるアンテナを使い何カ所かで電波を測定すれば調べられる。

順平は沖子の出す電波の発信位置を掴むために、警察庁を含めた三カ所を中心に都内に二十台の受信機を配置して、沖子と話しをしていた。

「その結果はどうだった」

「電波の出ていたのは、警察庁からだった」

「リストから漏れていた警視庁ではなかったのか？」

「違っていた。警察庁だった」

「ややこしくなって来たな」

「たしかに警視庁と睨んだ勘は外していた。しかし、同じ警察だった。それで俺一人我慢すれば済むと思った……」

「だから、事件については喋らなくなった」

順平は、済まなそうに頷いた。

三十

有田の怪我は軽くて済んだ。周囲に居た岸川の従業員が、とっさに駆けつけたために、左腕を刺されただけで済んだ。その有田も数日後には、病院を退院すると岸川に連れられて、順平達の元に合流をした。

腕を包帯でつるしている姿は痛々しいものがあつたが、命に別状が無くて良かったと順平も思った。ただ、三人ともたいそうな苦痛の中に置かれていたのも確かであった。

その夜、三階の部屋には、しばらく振りに四人が顔を揃えた。

「ああ、俺にも順平の苦痛が骨身にしみてきた。まだ数日なのに嫌になってきた。よくお前は一年もの間、逃げ回っていられたな」

今は三人、いや岸川を含めれば四人がいる。それでも、人から逃げるとは、このような苦痛

であったのかと考えると、これまで一人で逃げていた順平は、よく耐えられたものだと思いは感心もした。

「なあ、順平、俺達は何故、いきなり狙われたと思う」

「そうだな、俺も、それを考えていた」

自分が狙われる。それはわかる。理由はともかく警察の作った神々の代理戦争に参加している。しかし、有田や尾道については何の関係もない。これまで順平は、仲間は巻き込みたくないとの考えから、できるだけ接触は避けてきた。事実、十月までは海の上に居た。接触が頻繁になったのは、茨城に戻っての僅かの期間である。人を狙うには、それなりのリスクが伴う。これ程度の接触で警察が、仲間まで狙ってくる。普通では、あり得ないように思えた。

「本隊は警察であっても、それ以外の組織も、動いているのかもな」

いったのは岸川であった。

「警察以外の組織？」

「ああ、警察も馬鹿ではない、汚い事をさせる。そんな人間を集めているのかも知れない」

「岸川に、何か心当たりがあるのか？」

「少し気になったのは警視庁か警察庁か俺にはわからないが、お前らをつけ回していた相手の車に、千葉ナンバーが混じっていた。」

「千葉ナンバー？ 後は？」

「後は東京ナンバーだった」

「個人の車を使ったのかな？」

「必要なら調べる。ナンバーは控えてある」

もし岸川がいうように警察以外の組織が介在していれば、有田が襲われたのもわかるような気がした。警察の下で汚れ役を引き受けるような組織に、自らが監視されていたら有田や尾道の存在も知られている。おそらく、そのような組織は下部にいくほど、荒っぽい行動をする。どちらにしても直接、手を下してきた人間を知る。それは身を守るには必要であった。

順平は、岸川に車の所有者を調べて貰うことにした。

翌日、岸川は陸運局で車の所有者を調べた。夕方、岸川が順平達の部屋へとやってきた。

「順平、わかったぞ」

「済まない、それでどうだった」

「千葉ナンバーは、陽院真理教という宗教法人の所有する車だった。後の二台は個人だ。世田谷の谷原洋二、葛飾の小林金治となっていた。午後から東京に行って、近所で少し聞いてきたが、これも警察の人間ではないようだな」

「ありがとう。そうなる、その二人も陽院真理教に絡んだ人間かも知れないな」

「はっきりはしないが、そんなところだろう」

警察以外の組織が動いていた。岸川が危惧した通りであった。

よく考えればあり得る事であった。幾ら神々の代理戦争を指揮する組織が警察内にあるとはいえ、その組織が直接手を下すのは、余りに危険である。ただ、そうなると順平達にとっては厄介であった。

「警察ほどは優しくない。それで俺達が狙われた」

尾道が頷いた。

「当面の敵がみえたな。俺や順平をつけ回していたのが其奴らなら、相当手荒なこともしてくる。それは覚悟しないとな」

尾道のいう通りであった。それにしても、友人達を巻き込んだ事が悔やまれてならなかった。

「本当に済まない」

そう言うと順平は二人に頭を下げた。

「なあ、順平、今は、そんなものを気にしても仕方ない」

「そうだよ。俺達に神々の代理戦争からの招待状は届かなかったけど、順平と同じように参加をさせられた人間だ。困ったもんだな、何処かで宅配の奴、サボって神さんの携帯を届け忘れてるんだよ、きつとな」

「有田や尾道の言う通りだ。事件に巻き込まれるのが嫌だと思えば、俺達は、順平を助けたりはしなかった。青臭い言い方だが俺達は仲間だ。仲間を見捨てたりはしない」

いい奴らだと思った。何としても此奴らは、守らないとならない。しかし、相手は強大である。それを思うと不安は隠せなかった。

「まあ、リストにない俺達までつけ狙うようでは、よほど相手にとって俺達は邪魔なんだな」

順平は、尾道の言葉に頷いたが、そのとき、ふと順平は尾道の言ったリストと邪魔との言葉が脳裏に引っかかった。

「.....そうか、神さんからの指名者は、もしかすると警察として排除をしたい人間なのかも知れないな。――俺は、この騒動のなかにいたから、当然のように指名を受けた人間は全て敵と思い込んでいた」

警察との言い方は正しくはない。正確には警察内にある神さん組織なのであろう。

「警察の仕掛けなら、その考えはありそうだ。そうなると逆か？」

「ああ、神さんグループに取って邪魔な人間だとすれば、高木という警視庁の人間も、その神さん達のグループに取っての邪魔な人間になる」

「それじゃ、その高木も順平と同じ立場だな」

「.....やられたよ。神々の代理戦争との言葉に、よくよく惑わされていた」

順平自身、当初から神々の代理戦争によってリストにあがった高木に対しては、自分の敵と思い込まされていた。しかし、そこに、神々の代理戦争を仕組んだのが警察内部の神さんグループとなってくれば、話しは別であった。

そこまでの考えに至れば、次に浮かぶのは、どっちが勝ってもよいなどの非効率な仕掛けを、目的を持った警察グループがするのかとなる。そう、目的がどのようなものであっても、一方的に相手を狙わせた方が、目的遂行は確実に容易であった。

順平の出した結論は、神々の代理戦争の名を使って、相手を一方的に狙わせるように仕組まれているとの考えであった。その様に考えれば、沖子から告げられた政治家の多くは、地検から一方的に狙われている。

「お前が聞かされた指名者に、相手を伝えるとの話しは嘘か？」

「おそらく、警察内の組織が何かの目的でやっているのなら、神々の代理戦争は、単なるお題目に過ぎない。一部では、そのような使い方をしたとしても、多くは目的に沿った使い分けをしている筈だ」

「たしかに、そのほうが効率的だな」

尾道の言葉に頷いた順平は、眉をひそめた。

「どうしたんだ順平？」

(そうだった。神々の代理戦争、黄田さんと総理襲撃で始まった)

沖子は黄田殺害や総理が襲われるのも、大畑という警官が亡くなるのも事前に告げてきた。そして、その通りになった。神々の代理戦争の中で、指名をされた相手が、いつ黄田や総理大臣を襲うかなど、そこまで沖子にだってわかるものではない。

その事は携帯電話をバラして神さんは居ないと考えたとき、神さん組織がしたのではないかと思った。しかし、神さん組織が警察と知ったときから、全てを諦めた順平は、何も考えてこなかった。そのとまっていた空白が蘇った。

「そうなんだよ、神さん組織は警察なんだ。……あれは自作自演だ」

「あれが自作自演、何のことだ？」

「総理大臣を襲ったのも警察官や、黄田という男を殺害したのも、神さん組織がしている」

「警察が自ら手を血に染める。……警察は神々の代理戦争を仕掛けただけでは飽きたらず、自らも手を下しているのか？」

呆れたように尾道が言った。それに順平が頷いた。

「……しかし、それが本当なら、世間に知れたら警察は吹っ飛ぶな」

尾道の言葉に順平は目をつぶり唇を噛んだ。そう、これまでは如何に、自らが、このピンチを乗り切るかと自分達、中心に考えればよかった。まして、神さんグループが警察内にあっても、これまでは警察組織全体が敵ではなかった。そこには警察よっての解決という期待もあった。しかし、警察組織内にある神さんグループが、直接凶悪な犯罪に手を染めていたとなると、それを知った警察組織がすんなりと動けるかとの問題がでてくる。

順平の口元からは、大きなため息が漏れた。

「警察は隠してくるぞ、これは」

尾道が、表情を険しくしていった。

「そうだな、警察は必死になって事件をもみ消す」

黙った順平に代わり、尾道の問いに有田が答えた。

嫌な考えであった。このとき順平は、神さんグループは、警察から身を守るために、わざと大きな事件を起こしたのかも知れないと思った。

理由は警察組織は、従来から強い組織防衛本能を持っている。その警察組織にあって、殺人や総理襲撃などに警察官が組織的に絡んだとなったら、果たして公表ができるかとなる。特にテロ行為である総理襲撃に警察組織が絡んでいるとなったら、警察としては簡単に表にだせるようなものでない。

どうやら神さん組織は警察内にあっても、やはり周囲の警察は怖い。総理大臣を襲うような大きな事件を起こせば、仮に警察仲間に知られても、おいそれとは手出しができない。そのような状況を、神さん達は最初から作り上げてきたのかも知れない。

「畜生だな、これは真剣に考えても仕方ないぞ、もっと気楽に行こうや」

少々、戯けるように有田が吠えた。

「もう、敵の大ききの決まりはついた。それにビビッていたら何もできない」

「まあ、そうだ」といって順平も、苦笑いを浮かべた。

「そうだな、たしかにそうだ」といって尾道も頷いた。

仲間の言葉が心強かった。仲間に囲まれていると、何か力がわき起こる。

順平は警察庁から電波がでていると知ったとき、全てを諦めた。しかし、今度は、警察が総理襲撃や、人を殺害していると知っても諦めの気持ちは起きなかった。いやむしろ、何とかしなければとの強い気持ちが勝っていた。

「しかし、そうなるに順平に告げてきたリストも、当てにはならないのに」

有田が少し不思議そうにいった。

「そうだな、しかし、順平から聞いた代議士などは、今、多くの問題を抱えている。全くの出鱈目ではなかった」

尾道の言葉に、こんどは順平が尾道をじっと見た。理由はわからないが、尾道の言った通りである。もし、全てがデタラメであればリストの偏りから警察には辿りつけなかった。

不思議であるがリストから、ここまですり着けたのなら、まだ何か、そこから探れるものがある。もし、全てがデタラメであればリストの偏りから警察には辿りつけなかった。

不思議であるがリストから、ここまですり着けたのなら、まだ何か、そこから探れるものがある。もし、全てがデタラメであればリストの偏りから警察には辿りつけなかった。

五人の名前、そう、あのとき受けた五人の名前、林田総理は襲撃された。黄田は殺害された。高木も、この件に絡んできている。

二回目に知らされたのは横島副幹事長、大丸代議士、警察庁金城次長、警視庁の捜査員に東検事など。横島幹事長や大丸代議士も検察は狙っているとの噂がある。

理由は判らないが、やはり沖子は問題になっている代議士も伝えて来ている。

沖子から告げられた名前が表示されたパソコンに向かう順平に、尾道が、「大したもんだよな、お前は、その人名の偏りから警察を探しあてたんだからな」

その言葉に、順平は尾道を見た。

「どうした、順平」

「……このリストに、大きな間違いはない」

「それがどうした。これは、あの組織の敵なんだろう」

「そう、敵であるなら、この人達の経歴を調べれば、神さんが狙う理由がわかるかも知れない」

「そうか、やってみようや、リストに登った人の経歴から、警察にとって邪魔になるものを探せばいいな」

尾道の言葉に三人が頷いた。

各自がパソコンに向かい、リストの三十人について経歴をネットで調べだした。

全員が調べられた訳ではなかったが、大方の関係者の経歴が出そろった。丹念に順平は経歴を見たが、これとって経歴から読みとれるものはなかった。

それも仕方なかった。人によって色々な経歴があるが、警察関係者であれば、警察内での移動や役職などが中心であり、そこに警察に不利になるようなものは書かれてはいない。

そもそもが、警察の不利といっても余りにも漠然としていた。警察の何が不利かという的を絞れずに経歴を並べても、そこから得られるものはなかった。

そこには疲れた表情をした四人の姿があった。岸川が立ち上がると部屋の外に出ていった。

「外したな、順平」

有田の笑う顔があった。

「そうみたいだな」と、順平が苦笑いを浮かべた。

そのとき岸川が、一升瓶とつまみを手にして戻ってきた。

「休憩だ、少し頭を休めろ」

しばらく四人は、酒を酌み交わし、たわいのない話しをしていた。しかし、順平は、酒を飲みながらも、いつになったら、安心した時間が皆で持てるのかと考えていた。

「国会の開催日が決まったな」と有田がいった。

「二月四日とテレビで言っていたな」と尾道が答えた。

「荒れるな、今度の国会は」

「順平、お前のせいだぞ」

例の地検の話しを指して有田が笑いながらいった。

「馬鹿いえ、俺は、政治家さんの逮捕を遅らせたただけだ。荒れるのは俺のせいじゃない」

「そうか、それでも、下手すりゃ内閣は解散だ」

そのとき、解散と聞いた順平の目が、一点で停まった。

「どうした、順平」

「そうだよな、解散は近い。……忘れていた。俺は電波の発信源を調べるとき警視庁と神明党が怪しいと、リストの偏りから思った」

「神明党？」

「ああ、神明党から、指名者が出ないのを不自然に思った。ここは調べないとならない。悪い、少し飲んでいてくれ、すぐ済む」

そう言うと、順平はパソコンに向かった。しばらくすると今度は、先に四人で打ち出した経歴を元に、順平はパソコンに向かった。

その様子に三人は、何か掴んだなと思って見ていた。作業を止めた順平が三人の方に向き直った。その表情は青ざめていた。

「どうした、順平？」

「全部、わかった！」

そう言うと傍らに置いてあった、酒の入ったコップに手を伸ばし、一気に飲み干した。

「……警察が政党を作っていた。神明党の党首は、警察庁OBの鬼塚代議士、この人の経歴は警察庁に居たときに警察取り締まり総合改革法案を、まとめた人物だ」

三人は、順平が何を言おうとしているのか、わからんというように、怪訝な表情を浮かべた。

「警察OBが政党を作ったら何か問題があるか？」

「その政党の目的が、たった一本の法案を通す為であったら、どうなる」

「警察法の改正か？ それでも違法ではあるまい」

「違法ではない。違法な事をしないで法案を通すなら」

「神さんの代理戦争、法案を通すのが目的だということのか？」

「そうだ、警察関係者の経歴だけ見ても駄目だが、警察、神明党、ターゲットの代議士、この三つの関係者の経歴を組み合わせたとき始めて、その理由がわかる。これを見てくれ」

順平は、今度は神々の代理戦争に名を連ねた、警察関係や代議士の経歴に赤マークをつけた資料を前に並べた。

「警察庁の金城次長は、九年前の警察取り締まり総合改革法案の提出には消極的とされていた人物。政輪党の斉藤、大丸代議士は、当時法案を廃案にした中心人物、野党の能勢代議士は、人権派として当時から国連の個人通報制度に取り組んできた人」

「国連の個人通報制度とはなんだ」

「これも警察にとってはおもしろくないものだ」といって、その説明をした。

この制度は、裁判などの個人があらゆる手段を使っても、個人の権利が回復されないとき、国連に救済を求めるものであった。実質的な罰則はないので、批准をしたから直接的な影響がすぐに現れる性格のものではない。しかし、批准をして、申し立てが通れば、判決を下した裁判所や、立件をした検察、警察などが国際的な機関から駄目出しされるとの意味になる。司法機関にとっては面白くないのも事実である。

「邪魔者は神々の代理戦争の名で排除を行う」

「新警察法に取っての邪魔者を消す……しかし、注目されていても神明党は、まだ小さな政党だ。法案は通せないだろう」

「いや、それを通す仕掛けが神々の代理戦争、そのものだ。問題は今、そして過去の政治情勢」

「……そうか、連立政権か」

順平が頷いた。

「なるほどな、与党にも野党第一党にも疑惑の代議士がいる。邪魔者政治家排除が二つの政党を

確実に過半数割れに追い込む。そしてちゃんと、その受け皿に神明党になる。畜生、よく考えられている。だから、心理党から代議士の指名はなかったんだな」

「ああ、そして、どの政党も過半数を取れなければ、他党と組んでの連立政権になる」

「しかし、理屈はわかるが、神明党の思惑通りに連立は組めるか？」

「神明党の目的が一つなら、必ず神明党は連立に参加できる。いやする筈だ」

普通、容易く連立を組めないのは、理念や主張の違いと、それに伴う、その後の政党支持率を落としたいくないとの思惑などから連立には慎重になる。しかし、最初から一つの法案成立だけを目指した政党が神明党なら、政権参加後なら国民からの支持を失っても痛くも痒くもない。まして、理念の違いなど考慮する必要はない。それは、どこでも連立を組むことができるという事であった。当然、その時、政権を取りたい政党に突きつける連立参加の条件は、ただ一つ警察法の改正である。

多少、その法案に問題があっても、政権との比重を考えたら、どちらの政党も神明党にすり寄るのは、明らかであった。神明党は、今のまま政局が混乱して内閣が解散をすれば、間違いなく連立政権を組んで警察法の改正を通すのは、可能な立場にいた。

「二つの政党の力を削ぐための仕掛けが、神々の代理戦争。……警察なら政治家やお偉いさんの裏を調べられる。しかも、神々の代理戦争の名のもとなら、裁判といった証拠を要する面倒な手続きも不要。少しの疑惑でも掴めば、それで、脅しでも何でもできる」

聞いていた三人は何て事だと思った。

「……九年前に、法務省が出した警察取り締まり総合改革法案が、当時、野党であった政輪党の反対によって、潰された」

九年前の警察取り締まり総合改革法案とは、司法取り引き、囚捜査、犯罪防止の盗聴を可能とする。その中でも尤も国民の反感を買ったのが、犯罪予防取り締まりに関する規定、これは犯罪を計画した段階で逮捕を可能とする法律であった。余りに強大な権力を持つ事になる警察への反感は、当時、相当強いものがあつた。

その直後であった。政権交代が起きて、政輪党が政権についたのは。

「それで警察法改正法案は、再提出の目処も立たなくなった」

「そうだな、今も、その政権が続いている。これではいつになっても法案は成立しない。そうになると、その頃から、神さん達の仕掛けは始まっていたのか？」

「表に現れたのは昨年だが、おそらく計画は八年前に神明党を、立ち上げる前から始まっていた」

九年前、政治状況は今によく似ていた。当時も与野党は均衡し、政権交代の兆候はあつた。警察法に反対し廃案にした政党が、政権につけば法案成立はおろか、提出もおぼつかなくなる。それに気付いた警察内の人間が、法律成立に向けて何ができるか、当時から考えていたとしても不思議ではない。

しばらく四人の間に沈黙が流れた。その沈黙を破るように尾道が口を開いた。

「ここまで酷いとは。……これでは警察が壊れる」

「そうだな、ほんとに警察が壊れかねない」

日頃から警察を快く思わない、岸川でさえ心配そうにいった。順平にも、その意味は痛いほどにわかった。

国民が警察にいったい何を求めているのか、現場ではたらく警官は皆が危険を顧みず必死に頑張っている。そんな事は国民は、誰でも知っている。国民が不満に思っているのは、責任の取り方を忘れてしまった官僚機構、そのものに対する反感である。

反感を幾ら持とうが警察組織が、ボロボロになるのを喜ぶ人間などはいない。それは、警察から狙われた順平達にしても同じである。

今回の事件が表に出たとき、警察はどうなるか結果は見えていた。

警察は国民から見放される。しかし、だからといって警察組織が消滅する事はない。潰す事が出来ない権力組織が、国民から見放されるとは、ある意味で独裁国家の末路のようなものである。支持を失った権力者は自己保身に走り、自らの立場を最優先に考える。

それは国家権力である警察組織も同じである。国民の協力が得られなくなれば、警察は力に頼るほかなくなる。そして、やがて、それは国民へと跳ね返ってくる。戦時中の特高警察やヒトラーの秘密警察組織を描けば、その姿はおおよそイメージできる。

神々の代理戦争を表に出す事は、結局、警察組織だけの問題ではなく、国民全体に関わってくる。四人にしても国民から見放されるような組織に、警察をしたいとは思わなかった。しかし、それと自分達の身を守る事とは、別問題になる。自分達の身を守ろうとすれば、何処かで、神々の代理戦争を表に出さないとならない。まして、凶悪な組織を崩壊させるには、それは絶対に不可欠であった。

相反する課題に四人は、顔を曇らしていた。一般人である順平達でさえ、そのような考えに至るのであれば、これらを知った警察組織は更に神さん組織を表に出せなくなるとの、おまけまでつくものであった。

「もう、これは俺達の手には負えない」

尾道が声を絞り出すようにいった。しかし、さすがに三人から声はなかった。神さん組織の正体に近づけば近づくほどに、問題は複雑となり警察だけでなく、ついには政治まで絡んできた。

四人とも、怒りや恐怖というより、ただ、ただ呆れていた。

しばらく四人は黙り込んだまま、自らの考えのなかにいた。

「全てをぶちまけてやるか、それで俺達は旨く行けば助かる。そうなったら、この国はメチャクチャだな」

苦笑いをしながら有田がいった。ただ、そう話した有田にしても、知らない人が聞いたら、神々の代理戦争なるものは、まともに聞ける話しではないだけに、確たる証拠でもなければ、とてもではないがマスコミとて相手にはしまいと思っていた。まして相手が、警察や政党となっては尚更であった。

「無理だな、相手が相手だけにマスコミも動けまい。それに俺達に少しでもおかしな動きがあれば、神さん達は何でもしてくる。今の時点ではマスコミに頼るのは返って危険だろう」

尾道が、困った表情を浮かべていった。

「だよな、相当、やばいところに俺達はきている」

有田と尾道の話にも、順平も頷いた。順平も何かいい方法はないかと考えた。しかし、相手が警察組織の中にあっても、素人である順平達に、そうそう都合のよい手などはなかった。だからといって、このままじっとしていたら、自分達の先は見えている。

「今の俺達に何が出来るかだな」

尾道の言葉に、参ったなと唇を少し歪める、有田や岸川の顔があった。

「さて、どうする順平」

岸川が問うてきた。

「きつつい話した、しかし、なにか手はある筈だ」

「いよいよ、順平の金を使って、ほとぼりがさめるまで皆で海外逃亡か？」

有田の言葉に順平がはっとして、思わず口にした。

「そうか、あの金があるんだな……」

「順平、本気かよ、冗談だぞ、俺が言ったのは。お前の金など当てにできるか」

慌てて有田が困ったようにいった。いや、そんな事ではないと言いたげに二度、三度頭を小さく振った順平であったが、そのまま黙ってしまった。そのとき順平は、そうだ俺には金があったのだと再び、それを考えていた。

「……抱え込んだものが大きすぎるな」

黙った順平を見て、ぼそっと尾道が呟いた。

昨夜は相手の大きさは気にすまいと、話し合った四人であるが、更に巨大に膨れあがった相手に、愚痴がでるのも仕方なかった。四人は少し頭を冷やす事にした。

三十一

仲間を救うには、自らが考えるよりない。順平は有田との金の話しから、ある解決方法が頭に過ぎっていた。しかし、その解決にはどうしても健吾の力が必要であった。

自らの事であれば、思い切って健吾に相談もできる。しかし、すでに仲間までが、この事件に巻き込まれている。

健吾に相談をすることは、神々の代理戦争が何であるかを健吾に伝える事でもあった。それは警察の不祥事では片付けられない、警察の犯罪にまで話が及ぶ。

問題は、それを知った健吾が、どのような考えを持つかになる。健吾とて警察組織の幹部の一人である。仮に健吾が警察組織を何がなんでも守ると考えれば、そのとき仲間を含めて順平は健吾の敵となる。それだけに順平にも迷いがあった。

順平は、頭のなかでぐるぐると、かき混ぜ、その方法が本当に可能かを何度も考えた。厳しかった。たとえ健吾の協力が得られても、相当に難しい。まして、その前に幾つかの問題も解決しないと出来ない。

順平は深いため息をついた。

再び神々の代理戦争とは、そもそもが何であったのかと考えてみた。得た結論は誰が敵であるかわからない中で、疑心暗鬼にさせて人を狙うように仕向けたものとなってくる。しかし、仲間を信じる事で自分は、今、このように仲間にも困まれている。相手が疑心暗鬼にさせる方法で臨んでくるのなら、反対に人を徹底して信じる事ができれば、道は開かれるのかも知れない。甘い考えなのは承知であった。それでも順平は構わないと思った。それは、一年近い逃亡生活から、もう一人には成りたくはないとの思いが、そう順平をさせていた。

数日後に四人は、再び話し合いをもった。各々が結論を得られずに悩んできた。敵の姿だけははっきりと見えている。後は、どうするかの問題になる。いつまで議論をしても、結果が得られないのは誰もが承知していた。

「打つ手無し、それなら賭けてみる方法もある」

尾道の賭けてみるとの言葉に、三人の目が注がれた。

「餅は餅屋という言葉もある」

「……専門家に任せるのか？」

有田の言葉に、尾道が頷いた。尾道の言った餅は餅屋、すなわち警察の事は、警察にである。それは、櫻井健吾をさしていた。やはり、どうしても警察のキャリアである健吾に頼りたい、その気持ちが尾道にも生まれていたようだ。

「しかし、健吾さんでも動けまい、あれだけの不祥事、下手すりゃ、警察組織全部を敵に回すぞ。なんせ、順平が俺達の前から姿を消そうとしたときよりも、遙かに状況は悪い」

「ああ、確かに状況は最悪、健吾さんの動きは俺にも読めない。ただな、このまま黙っていても俺達は何れ消される」

「そうだな、まあ、危なっかしいが、たしかにその手はある。順平はどう思う」

相談してみようと思った。とにかく僅かでも可能性があるなら、仲間に相談をして見ようと順平は決心した。

順平が、岸川に向かって話した。

「岸川、警察は嫌いか？」

「好きではないな」

「じゃ、警察が無くなった方がいいか？」

「無くなれば、それなりに困るだろうな」

「そうだよな、それだったら警察も救われて、俺達も解放されるかも知れない手がある」

「ほんとうか？」

三人の目が光った。

「ただ、これは相当に難しい。それに人を信じないと出来ないものだ。その覚悟が俺達にも必要なる。全く俺にも先は見えない。しかし、警察の人間なら打てる手がある」

出口を見失い彷徨っていた三人には、順平の言葉は雲間に光り見いだした心境であった。自然、目を見開き食い入るように順平を見た。その眼差しを順平は痛いほど感じた。

「人を信じるとは健吾さんか？」

順平が頷いた。

「で、どんな手だ」

「俺に三千万が振り込まれた。その金だ」

順平は、順平の考えを三人に話した。三人は真剣に聞いていた。順平の話が終わった。

「……まだ調べないとならない事も幾つかあるが、そんな方法があったのか」

尾道の言葉に、岸川が頷いた。

「相当、厳しいけど、こうなりゃ、何でもやってみようや」

「有田、少し待ってくれ、皆も聞いて欲しい。大事な事だ。判断は、それからだ」

「そうか、わかった」

「俺達が知った警察の犯罪を健吾さんに知らせれば、そのとき警察組織として健吾さんがどのように動くかまで、俺にも保証はできない。もし健吾さんが組織を守る側につけば、そのときは警察全体が俺達の敵になる」

順平が、三人を見回していった。三人が、それに頷いた。

「そうなれば状況は最悪。へたをすれば自分の命に関わるものだから、それぞれが良く考えて欲しい……」

三人が、そう話す順平を見た。

「そして、もう一つ実は、神々の代理戦争が警察の仕掛けと知ったとき、俺は、真っ先に健吾さんを疑った。理由は簡単だ。神々の代理戦争が、警察の仕掛けたものなら、その警察が何故、俺を選んだか？ いや。警察内に俺を知っている人間が居ないとならないからだ」

人口一億を越す日本で、たかだが数十人程度の人間が絡む事件の渦中に、どうして自分が居なければならないのか。何処から神々の代理戦争を仕掛けた組織は、自分の名前を知ったのか？。もし、この件に櫻井健吾が絡んでいれば、その答えは得られた。健吾なら妹の知人として、いつでも自分を監視下における。親兄弟の情よりも組織を優先させるのなら、健吾にとって自分ほど都合の良い人間は居ない。

これまで容易に健吾に近づけなかったのは、そのような考えがあったからだと言順平は話した。

「……そうか、それでも順平は、健吾さんを信じてみる気になったんだな」

有田の問いに順平は頷いた。

「俺は、ここ、しばらく人を疑って生きてきた。もう、人を疑いながら生きるのは嫌だ。今話した方法は、人を信じないと、とてもできない」

「人を信じる。それが一番、難しいけど。……いいだろう。高木という警察官も、神さんのグループから狙われている人となる。順平は一度、健吾さんには逢っている。俺は、お前の直感を信ずる」

有田が自分の意見を述べた。

「神々の代理戦争は、人と人が疑う事で成立している。だったら徹底的に人を信じたら、神々の代理戦争の効力は失われる。俺も賛成する」

「おもしろい手だ。正義ではないが、それで丸く収まるのなら俺も異存はない」

岸川が、不敵に見える笑いを浮かべながらいった。

話しがまとまった。リスクを承知で四人は、櫻井健吾にあって、神々の代理戦争の実体を話すと決めた。

第六章 絡繰り

三十二

数日後の夜、岸川の家綾子に伴われた櫻井と高木がやってきた。六畳位の部屋に大人七人が入ると、さすがに部屋は狭く感じられた。

それぞれが挨拶を交わした。挨拶が終わると順平が沖子から聞いた、神々の代理戦争について櫻井達に話した。

「ここまでが沖子の話しでした。しかし、神々の代理戦争は、ある組織が、ある目的のために始めたものです。沖子から説明された代理戦争の考えを通して、物事を考えたら大きな間違いをします」

櫻井も、そうだろうと思ひ頷いた。

櫻井は頷きながら、自分達が考えたものに近い考えを、神坂達も、持っていたと知った。順平の話しは次第に核心へと進んでいった。話しが進むなかで、櫻井と高木が顔色を変えたのは、順平の携帯電話に送られてきた電波の発信場所が、警察庁からだったとの話しに及んだ時であった。一瞬、啞然とした後で、櫻井の顔は凍り付いていた。やがて、「それはほんとうなのか？」と絞り出すように櫻井は順平を見た。

「ええ、でていたのは警察庁ですもし、健吾さんの方で確認したいのなら、沖子とした最後の会話は録音してあります。それから誰が沖子か調べればわかります」

「そうか、電波は警察庁から……」と言ったまま、しばらく櫻井はじっと一点を見つめていた。

そのときの櫻井の気持ちは複雑であった。警察が絡んだ事件になるとは覚悟していた。しかし、神々の代理戦争を仕掛けたのが、警察庁であるとは思ひもよらなかった。平静を保とうとしていたが、内心では大きな動揺が走っていた。

「……それでは君達が、我々に近づくのもなかなかできない。よく打ち明けてくれた」

内心の動揺を隠すように静かに櫻井が話すと、それに順平達が頭を下げた。

「それと電話で頼まれていた警視庁の山下孝治、吉川喜久夫、吉田秀夫について調べたが、警視庁には居ない。架空の名前を教えてきたのだろう。あと、ここに居る高木君が神さんの指名を受けている話しは以前に神坂君から聞いている。私なりに、その件は調べてみた。端的に言えば無関係だ。私は高木君の銀行口座も調べた」

健吾が、高木の名前が、神々の代理戦争の中にあると聞かされたのは、例の裁判が終わり、拘置所で健吾が順平に面会を求めたときであった。高木は、しばらくしてから、その話しを健吾から聞かされた。そのときは高木も、さすがに啞然とした。

「正直、俺自身が神さんのゲームの中にいたとは思わなかった」

表情の少ない高木にしては、珍しく呆れたように話した。

「そうだと思います。神さんの指名にはルールなど、元々ありませんから。……邪魔な者を神さんのリストに加えているというのが、俺達の考えです。ただ、何か高木さんも神さんから狙われる理由があると思うのですが、心当たりはないのですか？」

「神さんとは警察だろう。同じ警察から狙われる心当たりと言われてもな……」

順平の問いに困った様子をしていた高木を見た、健吾は大畑の件を思い出した。

「高木さん、やはりおかしいな。そうなる高木さんだけでなく、死んだ大畑君もいる。どちらも神さん組織から邪魔者にされた。そうなる仕事絡みとなってくる」

健吾から仕事絡みといわれても、公安に居たときは、大畑とは多くの仕事をしている。その中で神さんや警察に関わるような捜査に心当たりはなかった。それでも、高木は考えていた。

「大畑と最後に扱っていた事件は、陽院真理教という宗教法人に銃器が流れた話しを聞き捜査をしたのが最後だった……」

「陽院真理教？」

小さく順平の口から漏れると尾道達の目が、一斉に高木に注がれた。その様子気付いた櫻井が、

「どうした神坂君、その宗教法人に何か心当たりはあるのか？」

櫻井の言葉に順平達が同時に頷いた。

「俺を狙ったのが、その法人です」

有田が櫻井にいった。櫻井と高木が顔を見合わせた。

「陽院真理教が、この件に絡んでいたのか！」

高木が、少し大きな声で驚いたようにいった。その後、高木はテーブルの上で小刻みに指をはじきながら、しきりと考えていた。

「……どうやら嵌められたようだ。俺自身の移動から始まっていた。陽院真理教の件を上話してしばらく後だった。――刑事部への移動を言い渡されたのは」

大畑は一本気の性格をした男だった。おそらく自分を捜査から外した後に、陽院真理教に対する捜査を中止にしようとした。それに大畑は従わず、暗部に足を踏み入れ殺された。そう考えた時、高木は行き場のない怒りを覚えた。

「……そうなる警察庁だけでなく、警視庁にも神々の代理戦争の組織が巣くっている」

顔をしかめた櫻井が、高木の言葉に頷いた。警察庁から電波が出て、警視庁にも、その組織は蔓延っている。なんて事だと思いながら、この組織の目的は何であるのかと櫻井は思った。

「ここまで話せば、察しはついたと思います。黄田さん殺害や総理大臣襲撃、これも神さん組織が行ったものです」

高木の話から、察しはついてきた。しかし、その言葉だけは櫻井は絶対に聞きたくはなかった。否定をしたかった。それは間違っていると、おもいきり怒鳴りたい衝動が襲った。けれどできなかった。自分自身にも、その考えが全くなかった訳ではない。

櫻井も高木も強ばった表情で、唇を噛みしめ黙り込んだ。櫻井や高木に限らず、順平達の表情にも険しいものがあつた。しばらく誰からも言葉はなかつた。しかし、順平は、櫻井達にもっと厳しい話しをしないとしない立場にいた。順平が静かに口を開いた。

「ここから更に厳しい話しになります。警察組織の人間として聞けば、今度は組織を守る為に、貴方が俺達に牙をむける。その選択肢も残る話しです」

この青年は一体何を話そうとしているかとの思った。すでに神々の代理戦争を組織したのは、警察であると聞かされている。そして警察が総理を襲撃したり、人を殺したという前代未聞の不祥事も聞いた。これ以上に深刻なものがあるとは想像もできない。

「我々が君達に牙を剥ける。そんな馬鹿な事はあるまい」

「それなら良いんですが、僕達は神々の代理戦争の目的が何であるのか知りました。そして、その事を四人で話し合いました」

尾道達が頷いた。

「神さんの目的を君達は知ったのか？」

驚いたように櫻井は、順平を見た。

「ええ、わかりました。それを警察の人に話すのは、俺達にしても勇気がいるのです。それでも解決できなければ何れ俺達は、この世から消されます。しかし、黙って消される訳には行かない。それが、健吾さんに話す決めた俺達の理由です」

そう順平は告げると、神々の代理戦争の目的や神明党の関わりを話した。

法案を通すための政党。櫻井は内心、あつと思った。櫻井の顔色が更に険しくなるのがわかつた。その様子を綾子が心配そうに見つめていた。

警察が政党を作っている。それは余りにも深刻であつた。その考えを必死にうち消そうとした。それは、いつのまにか身につけた警察官僚としての所行でもあつた。しかし、うち消そうとしても駄目であつた。やろうと思えば、連立政権参加という手を使えば、小さな政党でも法案を通す事ができてしまう。

結局、神々の代理戦争とは、警察が警察取り締まり改正法を、通す為に作った組織であつたとなる。

「.....警察が政党を使えば、自分達に都合の良い法案も通せる」

櫻井の声は震えを帯びていた。こんな事が世間に知れたら、間違いなく警察組織は言い訳無用の深刻なダメージを被る。それだけに櫻井の受けた衝撃は大きかつた。

順平は知ってる話しを全てした。しかし、余りに複雑で大きな話しであつた。櫻井達の心を見透かしたように順平はいった。

「今回の件は、警察は誰の為にあるか、その視点を忘れたら、誰もが飲み込まれます」

警察組織の関わりだけでも深刻であるのに、そこに警察が作った政党まで現れれば、青年達が警察官である自分を警戒し、話すのに躊躇つたのもわかる。事実、櫻井は、途方にくれる自分自身を感じていた。しばらく沈痛な面持ちで考えていた櫻井と高木であつたが、すぐに結論の出せるような問題ではなかつた。

頭を整理してみるといって、二人は東京に戻る事になった。二人は立ち上がって、部屋を出ようとしていた。

綾子も沈んだ表情を浮かべ、のろのろと立ち上がった。

綾子は櫻井が自宅から、車に乗せてきている。櫻井が帰るとなれば、綾子も一緒に帰らないとならない。

岸川は今、一番苦しんでいるのは綾子だと思った。まさか、今晚、綾子まで櫻井達と一緒に来るとは思わなかった。このまま順平と別れさせるのは、余りにやるせない。

岸川が綾子を送ると櫻井に告げると、櫻井はそれに頷き、高木と部屋から出て行った。

櫻井達が帰ると、岸川や尾道は部屋をでた。しばらく順平と綾子を二人にした。

二人だけになると順平は「綾ちゃん、済まなかった」と言って頭を下げた。頭を下げながら何で、俺は綾ちゃんをこうも苦しめるのだと自己嫌悪を覚えた。

顔をあげた順平の前には、涙を流す綾子がいた。思わず順平は、綾子を抱きしめた。その腕のなかで綾子は泣いた。しばらく、そのまま順平は抱きしめ、綾子の黒髪に手を添えていた。

「たぶん大丈夫だ、何とかなる」

その言葉に落ち着いたのか、綾子が泣き笑いを見せた。

綾子を自宅に届けてきた川岸が、部屋に戻ってきた。

「後は、健吾さん達が、どう動くかだな」

尾道の言葉に、ここまできたからには、もうなるようにしかないと皆が思った。

三十三

櫻井も高木も順平達の考えに、それほど大きな間違いはあるまいと思った。二人は、茨城から戻ると順平の話しにあった神明党と陽院真理教から調べ始めた。

神明党の支持母体は心理清教となっていたが、その下には陽院真理教がぶら下がっていた。心理清教は、ほとんど活動らしき活動のない、いわばダミー宗教法人。心理清教を挟む事で陽院真理教が表に現れるのを防ぐ、その様な物であった。しかも、院真理教には警察を辞めたOBが多数参加しているのもわかった。

順平の仲間を襲った事や高木が銃器購入で追っていた事からみても、陽院真理教が神々の代理戦争の実行部隊であり、おそらく大畑や黄田の殺害、そして総理大臣襲撃は、この組織がしたものだと考えた。

更に、警視庁や警察庁も調べた。

九年前、あの法案が廃案となると、その一年後には警察庁や警視庁内にも動きがあった。警視庁では公安情報室が新設されていた。公安情報室は、公安部の情報収集を主な任務として新設をされた部署であった。高木の元上司の鴨田も今は、その公安情報室に移っている。そこから見て高木の移動に、鴨田が絡んでいた可能性は高い。また、高木が順平を追っていたときに現れた公安の人間が、この部署の者であった事からしても、警視庁側で神々の代理戦争を支援しているのは、この部署であろうとの当たりが付く。

同じ頃、警察庁には総合管理研究局という部署が作られていた。表向きは広域高度化する知能犯に対処するための部署として作られているが、その実体は警察内部でも余り知られてはいない。ただ、ここには警察法やハイテクに詳しい人間が集められている。順平から聞いた、高度な技術で改造された携帯電話が使われていたのを考えれば、この部署が警察庁では怪しかった。

総合管理研究局を調べてみると、そこに情報技術解析課から移ってきた電子工学を専門とした木曾清孝がいた。木曾の経歴を調べてみると、神坂順平と同じ大学に通っていた。しかも、木曾と神坂は大学では中山教授の研究室に席を置いていたのがわかった。中山教授の研究室は、主に情報処理関連の研究室であった。

櫻井は直感的に、この男が神坂を引き込んだと感じた。

同時に警察庁で神々の代理戦争の仕掛けた部署は、ここで間違いないとの確信を得た。まだ、解明できないところもあるが、神々の代理戦争を仕掛けたのは警察であり、その組織は警視庁、警察庁に跨がっているのは確かであった。

元々、九年前の警察法の改正前から、警察庁と警視庁の若手官僚が集まった法案検討勉強会が存在していた。この勉強会に参加をしていた多くの者が、今では警察庁では総合管理研究局、警視庁では公安情報室に移っている。勉強会として集まった存在が、後に警察庁と警視庁で一つの部署を形成し、それが、今回の騒動の中心組織に変貌を遂げたようである。

当時の勉強会で顧問をしていたのが、現在、警察庁次長の金城健二と警視庁側では田所公安部部長になる。ここに至れば神坂達の考えは、間違っていないと認めざる得なかった。しかし、ここで一つの疑問が櫻井や高木に起きた。

現在、総合管理研究局の局長は早瀬史朗であり、公安情報室長は荻野泰明が室長をしている。二人とも金城次長とは一回り以上年齢にしても違う。この二人は当時の若手のリーダー株といった人物になる。それらを考えれば、八年前に、この二人に部屋を設立させる力があったとは思えない。そうなる部屋設立にかかわったのは、金城次長や田所部長となりそうであった。しかし、その金城次長は神々の代理戦争から指名を受けている。順平達の考えに沿えば、今は神さん組織にとっての敵になる。

櫻井と高木は人目に付かない警視庁の一室で話しをしていた。

「櫻井さん、何か金城次長についてわかりましたか？」

「調べてみたら総合管理研究局の設立に尽力していたが、法案が九年前に通らなかったのを機に、その後は法案提出に消極的になっていたようだ」

「尽力した人物でも、自分達と相容れないとなれば敵とする。冷徹な組織ですね」

「ああ、少しでも意見が合わないとすれば葬る、徹底しているな」

「となると首謀者としては田所部長……」

「かなり濃厚だけど早瀬、荻野、この辺を中心に考え方がかわった可能性もありそうです」

「世代が代わって過激に、そうですね。その辺に探りを入れてみます」

「お願いします。引き続き警察庁の方は、私が調べて見ます」

キャリアである櫻井は警察庁の採用であるために、現在は警視庁に居ても警察庁には顔が利く

。警察庁関係は櫻井が調べていた。

「それにしても、しっかりと警察庁と警視庁に、神々の代理戦争の組織が巣くっている」

高木の言葉に、櫻井も顔を顰めていた。

東京への帰りぎわに、櫻井は順平から告げられた言葉があった。

それは、警察組織を崩壊させてはならない。しかし、非合法の活動をしている警察内部の組織は潰す。それが、俺達四人で話し合った結論ですと。何を言わんとしているのか、それはわかる。しかし、警察内部の非合法組織を潰そうとすれば、神々の代理戦争はいやでも表にでる。そうになったら国民から警察は見放される。それを懸念して順平が、警察の崩壊といったのは理解できる。櫻井にしても気持ちは、同じであった。ただ、気持ちは同じでも、これだけ大きな事件を表面化せずに解決する。そんな都合の良い解決方法が、あるのかと考えても、答えなど得られるものではなかった。

三十四

しばらく後には、高木は神明党が提案しようとしている警察法改正案の原案を入手した。

それを読んだ櫻井は驚いた。その内容は九年前に提出されたものより、更に権力が警察に集中するものであった。起訴自体を警察が行える。現状は警察が証拠を集め犯人を逮捕するが、犯人を起訴するかしないかは法務省所管の検察官が握っている。逮捕した犯罪者を自分達の手で起訴したい。其れは警察が持っている潜在的な願望でもあった。

検察庁を廃して警察と統合して起訴や公判まで一貫して行う。どのように読んでも、法案骨子は、そのように読める。さすがに警察官である櫻井にしても、やり過ぎだと思った。

検察を不要とする法案、このとき初めて櫻井は、神々の代理戦争の狙いが政治家や、自分達にとって不都合となる同僚警察だけでなく、検察組織も含まれているのに気付いた。

検察の信用を落とし検察不要論に導く。それは実際に神坂の手によって起きていた。しかし、明らかに順番が違っている。政治家を検察によって叩いた後に、検察にダメージを与える。組織にすれば、それが尤も効率的なシナリオになる。

では、そのシナリオに狂いが生じた原因は何であったのかと思った。勿論、そこに神坂順平のポテンシャルの高さがあったのは間違いない。しかし、幾らポテンシャルを持った人間でも何の情報もなかったら、警察や地検が仕掛ける罠から逃げられない。

(どうして、神さん組織は、神坂にあれほどの情報を与えたのだろう……)

神坂を選抜した裏には、おそらく級友であった木曾清孝が絡んでいる。

神坂順平は、神さんの実体を探り当て、目的まで明らかにするなど、素人とは思えない非凡な能力を発揮している。級友であれば、その非凡な能力に早くから気付いていてもおかしくはない。そこで木曾が、神坂を検察打倒の仕掛け人に選んだ。それであれば地検打倒の為に神坂に、情報を与えていたとしても不思議ではなくなる。そこまでは櫻井も、ありそうなことに思えた。

ただ、神坂が地検を落とし入れる為の道具であるなら、地検の東が政治家逮捕に踏み切った後で、東に神坂の情報を与えれば、シナリオに狂いは生じなかった。

神坂逮捕に東が絡んでいたことからして、遅くとも東は今年の六月頃には神坂の情報を得ていた。当然、東が政治家逮捕より、組みしやすい神坂から手をつける可能性は考えられた筈であった。このあたりは神さんの行動がちぐはぐで、櫻井にも理解できなかった。

ここまでが調査によって櫻井と高木が明らかにしたものになる。しかし、調べれば、調べるほどに警察の関わりは強硬なものであった。

神坂は、事実を知ればあなた方が、俺達に牙を剥けるといった。その言葉は、いつしか櫻井の上に、重くのしかかっていた。櫻井の目がいつになくぎらついていた。

「とんでもない事態になりましたね」

傍らの高木が櫻井にいった。

「ああ、とんでもない事だ！」

苛立つ気持ちを隠そうともせずに、櫻井は吐き出した。

「監察官は、今後どうするつもりですか？」

これまで幾多の修羅場をくぐってきた高木であったが、さすがに高木の目も異様な光を宿していた。ここまで真相に迫れば櫻井の考えは、どうしても知りたい。それによって、高木は態度を決めないとならない。最近では、櫻井さんと呼んでいたのをあらたまり監察官と言ったのも、その気持ちの表れであった。

しかし、そう聞かれても櫻井とて迂闊な返事はできない。櫻井もキャリア警察官僚の一人である。警察組織は絶対に守りたいとの思いは強い。

警察が作った組織によって、多くの犯罪が起きている。まして、その標的には総理大臣や代議士が含まれている。それは警察が武力によって政治介入をする、民主主義への挑戦でもある。警察個人であれば、まだ、なんとか言い逃れはできる。しかし、一部といっても警察内部が組織だって動いたとあっては、言い訳などは通事はしない。そんなものを、まともに公表すれば警察組織は瓦礫に喫する。

櫻井にしても高木にしても、できるなら、このまま握りつぶしたいとの気持ちがある。おそらく、どちらかが言い出せば、本当にそうなると思った。

「……わからん、今は、まだ何とも言えない」

そのときの櫻井は、苦悩に満ちた表情で、そう話すのが精一杯であった。せめて警察が組織として動けばまだしも、たった二人だけの戦いとあっては勝算も見込めない。

高木の気持ちは揺れていた。それだけに、ここに至っても結論を出そうとしない櫻井に対して失望は隠し得なかった。その高木の様子に櫻井は、はっとした。

(これだ、神坂の恐れていたのは)

櫻井は、これが神々の代理戦争の怖さであると痛感した。神々の代理戦争は人を疑う事で成立する。

(その呪縛を破り、あの男達は、俺達に話しをした。それは俺達を信じたからだ。いつのまにか俺自身が、代理戦争の呪縛に陥っている。……何も戦っているのは、俺達だけではなかった。神坂達はもっと酷い戦いを強いられていた)

これでは駄目だと気付いた。櫻井の表情に変化が現れた。

(あの男達が信じたのは誰でもない、俺自身を信じた。あの男達を裏切る訳にはいかない。そして、今では、俺にとって高木さんは唯一信頼できる仲間。自分が態度をはっきりさせなかったら、その仲間も失う。それこそが神々の代理戦争の思う壺だ)

「.....高木さんも法案の骨子を読んでいるな」

高木がじっと櫻井をみたまま頷いた。

「ここまで警察に権力を、集中させて良いと思いますか？」

「私は現場の人間です。気持ちは分かります」

警察組織が強い権限を持つ。それは警察人として偽らざる気持ちでもあった。警察官としての答えであれば、多くの警察官は同じように答えるであろう。

(言っていたな、あの男は、警察視点では駄目だと.....)

警察視点では駄目とは、詰まるところ警察組織はいったい誰の為にあるかになる。国民の財産や生命を守る為に存在するのが警察組織である。

「警察ではなく国民としては？」

「.....この法案に国民は、賛成できないでしょう」

櫻井が、大きく頷いた。

これまでに警察も何度も間違いをしている。検察も間違いをしている。組織である以上、間違いの起きない組織などは存在しない。しかし、その間違いを如何に少なくするかを考えて、警察機構と検察機構を分けた。それを、一つにしてしまう。やるべきでないとはっきりと櫻井は思った。

「今の警察内に相談をできる人間は居ない」

神々の代理戦争に関わる者が、何処に紛れているかわからない。同じ考えの人間を募るのも難しい。それは高木にしても同じであった。

「俺は、この計画を潰す。協力して欲しい」

正面から櫻井は、高木を見据えると、きっぱりと言った。高木は目を細めたまま鋭い目を向けていた。

高木も自分の気持ちを整理した。

「.....犯罪の捜査をするのが、我々ですから、それが同じ警察であろうとも」

高木の気持ちは確認できた。後は信じるだけである。

「そのためには、証拠を掴まないとならない」

どうするか先は見えてはいない。まして現在は、状況からの推測の域であり、確たる証拠がある訳ではなかった。何をするにも証拠は掴んで於かないとならない。

「神坂順平.....」

高木が静かに順平の名前を口にした。

「神坂がどうかしたか？」

「おもしろい男です」

「……そうかも知れないな」

「待っていますよ、俺達の決心を」

櫻井もそうだろうと思った。あの男は、自分達の迷いを見透かしていた。それでも話してきた。事実、自らも迷っていた。自分達がどの様の判断をするか、一番注目をしているのは、やはり神坂達であろう。

「あの男、何か考えを持っていますよ」

検察や警察を手玉にとった手際の良さ。政党と神々の代理戦争を結びつけ事件の本質に迫った鋭い洞察力を持った男。その男が警察組織人としての櫻井に話す危険性を、承知で話しをしてきた。何らかの考えがなければ、仲間を危険に晒す話しは、絶対に口にはしまいと高木は思っていた。

それに東京へ帰りぎわに、神坂から告げられた話しにも意味が含まれていたように思えた。あのとき神坂は、警察組織を崩壊させてはならない。しかし、非合法の活動をしている警察内部の組織は、潰さないとならない。それが、俺達四人で話し合った結論だと言った。

本来、自分達の生命がかかっているときに、警察組織の心配など、普通できるものではない。それなのに神坂達は、はっきりと警察組織を崩壊させては駄目だといった。それはある意味での神坂達の余裕とも受け取れるものだった。そこからしても、やはり、男達は何らかの考えを持っている。それが高木の出した結論であった。

ホーという表情で櫻井は高木を見た。ずっと神坂順平を調べていた高木の話である。出口を見失っていた櫻井にしても、そうであればよいのだがと頷いた。

三十五

数々の仕掛けによって人と人とを疑わせる。それが神々の代理戦争の正体であれば、それに対抗できるのは互いを信じる事。それは順平達に対しても同じであった。

こちらの態度をはっきりさせる。高木の意を汲んだ櫻井は、順平に電話をした。

「神坂君、君は木曾清孝を知っているな」

「木曾清孝ですか……」

木曾清孝、大学のときの同級生、順平とは同じ研究室にいたので、その名前は順平もすぐにはわかった。ただ、木曾は無口で余り人付き合いをしない男であったために順平とも、それほど親しいものではなかった。木曾は研究者タイプの優秀な男で、順平の記憶では、木曾は、そのまま大学院に進んでいたとの記憶がある。それなりの付き合いしかしてなかった為に、茨城に戻った順平とは、その時点で没交渉となった。

「木曾は、今、警察庁に居るんですか？」

「相当頭が切れるらしく、情報通信技官として警察庁にいた。それも、私が問題視している総合管理研究局にだ。木曾清孝が神坂君を代理戦争に巻き込んだのかも知れないな」

順平も木曾という名に驚いたが、木曾が警察庁にいたとなれば、可能性は否定できなかった。

「木曾なら、携帯の細工などはやれる。……健吾さん、今、木曾が居たと言いましたか？」

聞き違いでなければ、櫻井は居たと過去形で話したと思った。

「木曾清孝は十一月から姿を消した。警察のコンピュータ上では、十一月に退職したとなっている。こっちで、その後の木曾の足取りを追って見たが、全く掴めない」

「十一月ですか？」

十一月といえば、地検相手の例の裁判が終わった頃になる。

「……もし、木曾が代理戦争に荷担をしていれば、そんな簡単に警察は辞められない」

「私の口から話したくないが、木曾は消されているのかも知れない」

「消された？」

順平の表情が曇った。

「――木曾なら、あの携帯電話を作れる。間違いなく木曾は、この件に絡んでいる。木曾が消えた原因はわからないが、しかし、木曾が絡んでいたのであれば、何かに利用するために自分を、この件に引き入れた。それは間違いのないようであった。」

「木曾清孝については、その様になっている」

木曾の動向には不可解なものがあるが櫻井にしても、それ以上はわからなかった。その後、櫻井は、神明党が提出を目指している警察法改正案の骨子などを順平に伝えた。

櫻井の決心を知った順平は、櫻井に二つ調べて欲しいと頼んだ。それは神々の代理戦争の首謀者と組織の資金源を調べる事であった。

「資金の流れは事件を解決してからでも遅くはないと思うが、どうして今必要なんだ」

「事件を解決させるには、絶対の条件だと俺は思いました」

「事件を解決せる絶対の条件？ 事件の解決方法が君には見えているのか？」

電話を握る櫻井が、驚いたようにいった。

「最低限の条件が整えば、警察官を調べる立場の健吾さんなら出来るのかも知れません」

「俺なら可能？ それは監察官としての俺となるのか？」

「ええ、もっとも、この解決方法も警察組織にすれば痛い話しには変わりありませんが」

「今の警察には、どのような話しも痛い。で、その方法とは？」

「その前に伺っても良いですか。――健吾さんは、神さんの問題を、警察として正面から取り上げられますか？」

櫻井にしても、それは尤も厳しい質問であった。櫻井も電話の向こうで苦しい表情を浮かべていた。

「難しいですよ、如何に健吾さんでも」

「ああ、正直言えば出したくはない」

「当然だと思います。なにしろ、この事件は、神さん達が動き出したときから、まともに警察が表に出せないように仕組んできたのです。それは俺達にも、理屈抜きでわかります。相手が、その気なら、相手の考えに乗って神々の代理戦争、わざわざ表に出す必要はないんじゃないですか？」

「表に出さないで、解決ができるのか？」

「相手が神々の代理戦争を表に出せないが高をくくっているのなら、形を変えて表に引きずり出せ

ば良いのです」

「形を変え？ 別件か？」

「そうです、やるのなら警察の裏金として全て処理をするのです」

裏金と聞いても、まだ、順平の意図が櫻井にはつかめなかった。

「警察を辞めた人達が、それほど潤沢な資金を持っているとは思えません。政党をつくる時に、警察の裏金が使われたのではありませんか？」

「警察の裏金で政党を作っている……」

「ええ、これは推測ですが政党を作り何人かの代議士を当選させています。大変な金額を必要とした筈です」

「奴らは、それを裏金で賄ったと……」

「おそらくそうでしょう」

順平は、そう話した後に言葉を続けた。自分は警察ではない。外から見ているから、これらのおかしな点がよく見えてくる。政党設立の件もそうだが、三千万が自分の所に渡った。この組織を動かすには生半可な資金ではないものが動いている。これだけの資金を何処からかき集めたか、外から見れば、行き着くのは警察の裏金になると。

警察上層部が絡んでいれば、警察の裏金をかき集めて政党を作る。やってできないものではないと櫻井も思った。

「とても正義などと呼べる方法ではないですが、警察が国民から本当に信頼を失ったら、それで終わります。しかし、過去にも警察は裏金問題で信用を失っています。それでも、今は、信頼を取り戻しています。前例があります。裏金だったら国民も、またかと呆れても、それで済むのではありませんか？ それに神さん連中の目的は、警察に権力を集中させる事ですから、連中にしても決して警察の弱体は臨まない筈です」

櫻井の目が鋭く光った。その為の金と首謀者。何たる考えだと櫻井は脱帽した。

神々の代理戦争の目的は、警察組織を強くする事にある。神々の代理戦争が表面化すれば、警察は弱体化する。それを逆に脅しとして使えば、首謀者と交渉ができる。

警察から己を守る為の神々の代理戦争の仕組みは、少し視点を変えれば、神さん組織にとっても諸刃の剣であった。しかも、そのとき組織の資金である裏金を表に出して全ての処理をすれば、資金を絶たれた組織は自然消滅する。

自らの不祥事である裏金を表に出して処理する。警察組織を守りたいとの強い考えがある警察内部の人間では、まず思いつかない方法であった。

第七章 見え隠れ

三十六

櫻井と高木にしても、もはや神坂の考えた方法より解決の手はないと思った。しかし、その為、何としても神坂からの出された二つの課題を知る必要がある。

その一つである首謀者を知る。数名の名前はすぐに浮かぶ、その誰であるかの特定を急ぐ必要があった。それには、まず、どの部署が神さん組織かの確定が必要となる。

櫻井は、順平の持っていた沖子との会話記録から、沖子という女が誰であるのか調べ始めた。警察庁の女子職員の声と、沖子の会話記録の声紋が照合できれば、誰が電話をしたかの特定はできる。とはいえ警察庁に多くの女子職員が居る。それほど簡単な仕事ではなかった。

ただ櫻井は、女は木曾と同じ警察庁総合管理研究局に居るとの当たりをつけていた。櫻井は、その部署の女子職員の写真を極秘で入手すると、それを警視庁科捜研の音声分析室に持ち込んだ。しかし、順平から渡された会話データを、直接分析官に聞かせる訳にもいかない。そこで、編集によって当たり障りのない会話の部分だけ抽出して、内容がわからないようにしてから分析官に渡していた。

音声分析官であれば人の骨格から、おおよそ、どのような音声が出るか、ある程度の推定は可能である。その推定にそって音声分析官は、多くの顔写真から数人の女子職員を絞り込んだ。

再び、櫻井の出番であった。櫻井は、絞り込まれた数人の女子職員に対して、適当な口実を用いて電話をかけ、そのときの会話を記録した。

その後、櫻井が電話で得た会話記録と順平が記録した会話記録を科捜研で声紋照合した。

結果、声紋照合で一致した人間が現れた。警察庁総合管理研究局で、犯罪心理学を専門とする霧島幸恵であった。

これにより櫻井は、警察庁総合管理研究局が神々の代理戦争の仕掛けた部署との確証を得た。

櫻井や高木が必至に捜査をするなかで、順平の裁判によって大きな痛手を受けた検察も、人心を一新すると名誉挽回とばかりに、斉藤代議士逮捕に向けた活動を始めた。それは政権与党にとっての大きなダメージになる。斉藤代議士逮捕ともなれば弱体化した政権与党の運営は、じきに行き詰まる。行き詰まれば解散総選挙であった。

このまま選挙となれば政輪党にしても、自由真党にしても過半数を得るのは難しい。

結局、紆余曲折はあっても神明党の思惑通りに事は進み、神明党と連立を組んだ連立政権誕生となりかねない。

櫻井にすれば神明党が連立に加わってからでは、事が政界に及ぶだけに警察が組織として動けない現状では、更に手出しは出来なくなると危惧していた。

政局が緊迫した状況にあるだけに櫻井にしても、残された時間は多くはなかった。

櫻井達も必至であった。首謀者として有力なのは、やはり警視庁の公安部部長の田所であった。経歴や高木の移動に関連して考えれば、田所になりそうだと思ったが、確証になるような物的なものとなると得るのは難しい。まして資金の流れとなると、調べるには無理があった。

警視庁と警察庁にある組織は、正規の部署、その為に資金の手当てに問題はない。警察庁内部の組織からでは、資金の流れは追えない。そうすると神明党や陽院真理教となるが、相手は財務が表に現れにくい政党と宗教法人である。警察組織を使えない櫻井と高木にすれば、財務調査は

厄介であった。

それでも二人は、諦めはしなかった。櫻井は神坂順平達から、警察組織で無い者が、本気で警察組織を心配する姿を見た。警察官の自分達は、それ以上の事で報えないとならないと思ひ懸命に捜査を続けていた。

三十七

政局に動きが現れたのは、そんな時であった。齊藤代議士逮捕のニュースに政権与党は大きなダメージを受けた。続けざまに野党議員からも逮捕者がでた。政局はますます混迷を深めた。

今は、与党にしても予算案を成立させるのに必至であるが、予算成立後には、いつ解散があってもおかしくはない。いよいよ神々の代理戦争の仕掛けが動き出したと櫻井は思った。

神明党が政権の座につく意味を知る櫻井にしたら、何が何でも選挙になる前に決着をつけたかった。しかし、残念ではあったが捜査は、依然として難航していた。それだけに櫻井にも焦りがあった。櫻井は最後の手段として、霧島幸恵を利用する事を考えていた。汚い手ではあるが、順平を使えば霧島なら脅せる。それを相談する為に櫻井と高木は、再び順平達の前を訪れていた。

順平も、それを告げられたとき、いよいよ最後の賭けに出るときが来たと思った。ただ、櫻井から聞かされた霧島幸恵は心理学にたけた海千山千の様な女である。果たして旨く行くかとの心配はあった。

櫻井の知りたいのは、どの程度、霧島が組織の中に食い込んでいるのかである。

「今回の事件で証拠に基づき確定を出来る人物は、今のところ霧島幸恵だけだ。霧島を使う以外になくなった」

仕方ないと順平も頷いた。

「沖子を霧島だと君が告げても、霧島は組織に報告できない。そんな事をしたら自らが消される」

おそらく、それは櫻井のいう通りであろう。

「とにかく、どんな手を使ってもよいから、彼女がどのぐらいの情報を持った女か探って欲しい。特に資金の流れに彼女がタッチしてるかだな」

このときの櫻井は霧島が多く情報を掴んでいる女であれば、警察庁から彼女を拉致するという非合法の手段も辞さない考えを持っていた。ただ、それは最後の手段であった。

櫻井にしても霧島を拉致すれば自分達の動きが、神さん組織に知られるとわかっている。まだ、それは避けたかった。

順平は頷くと、神さんの携帯電話を手にした。しばらくすると、沖子の声がした。

「沖子、頼みがある」

「何だ」

「まず、なにがあっても、この電話は切るな。それを最初に約束してくれ」

「何をいっている？」

「これから話すのは、沖子の命に関わるものだ」

「私の命に関わる、ばかをいうな」

「そうかな、いいな、電話は切るなよ。警察庁、総合管理研究局の霧島幸恵さん」

「……………」

電話の向こうで声を詰まらす、霧島幸恵の姿があった。

「切るなよ、絶対に、何故、俺が君の事を知っているか知りたいだろう。その前に周囲の人の居ない場所に席を変えてくれ」

「……調べたのか？」

沖子こと霧島幸恵は内心、愕然としていた。ここは警察庁の中である。そこから掛けている電話の主を調べるのは、容易くできるものではない。さすがに普段は冷静な、幸恵であっても頭の中は混乱していた。

「いいのか？ 周囲に人は居ないのか？」

「それは大丈夫だ。この携帯に出るときは、順平に周囲の音を拾われないように、一人だけの部屋に移ってからにしている……」

「そうか、それならいい。最初に俺は言った。今度は君の命が狙われると。理由は簡単、警察が神々の代理戦争に関わっているのは絶対に、外に漏れてはならない秘密だ。しかし、こうして俺は君の名前を知った。神々の代理戦争を仕掛けた組織の中に、霧島幸恵が居ると俺のような外部の人間に知られたら、組織は、このまま君を見過ごすと思うか？ 君の組織は、総理大臣襲撃や同僚警察官殺害までしている。もう、引き返せないところまで来ている」

順平の言う通りであった、絶対に外には出せない。外に出したら警察組織は崩壊をする。

「国民の誰もが警察を嫌っている訳ではない。いや、むしろ何だかんだといっても警察を頼っているんだよ。警察組織を崩壊させて良いと、霧島さんは思うのか？」

「私は、その組織の為に働いている」

「そうだよな、しかし、俺が、この事をマスコミに公表をすれば、どうなる」

「証拠があるのか？」

「ある。君との電話内容は記録している。君の名前を知ったのも、君の声を解析によって確認したからだ」

「其れ程度の事なら、警察庁は私の存在、そのものを消す」

「そうだな、おそらくできるだろう。……しかし、それでいいのか？」

「……………」

「すでに君の組織は非合法のやり方で何人もの人を殺した。同情する気はない。けどな、それを別にしても、本質は君らがしようとしている事を、本当に国民が望んでいるのかだ。すぐには結論はだせないだろう」

「……………」

「ともかく俺に知られた。今度は、君が自身の身を守る番だ。海外に出ても良い。場合によったら俺達が匿ってもよい」

「大きく出たね」

「そうだ、今度は俺が沖子のアドバイザーだ。良く聞いて欲しい。沖子には消されるか逃げるしか道はない。しかし、何処に逃げても相手は警察組織。逃げるにしても、相手警察組織が手出し出来ない証拠を持って出なかったら何れは消される」

敢えて順平は、親しみを込めて、これまでと同じように沖子と呼んだ。

「そうかも知れないな。順平は、その証拠が欲しいか？」

「正直に言えば欲しい。警察という組織を守るには必要だと思う」

「警察を守る……お前は警察官か、違ುದらう。そのお前が何故、警察の心配をする？」

「このまま、何の手だても講じずに、事件が明らかになれば警察は崩壊する。それは沖子にも判るだろう」

「だろうな」

「警察は警察組織の私物ではない。国民の財産だ。だから、ぼろぼろには出来ない」

「これまで警察にぼろぼろに扱われていた、お前がいうセリフか……」

「これは俺だけの考えではない、ダチに暴走族をしていた男がいる。その男でさえ警察の崩壊は望んでない」

「……………」

「名前は言えないが、俺の後ろにも警察は居る。わかるだろう。沖子の本名を調べられるのは警察内部の人間だけだ」

「そうらしいね、……ただ、その警察の人間も事の本質を知ったら動けないぞ。何のために組織は総理大臣をターゲットにしたと思う」

「それか、それだったら最初は、神々の代理戦争が始まった事を知らせる意味だと思っていた」

「一つ目は当たりだな」

「神々の代理戦争の組織が警察内にあると知ったとき、もう一つの意味があるのに気付いた」

「いって見ろ」

「警察にとって途轍もなく大きな事件を起こせば、たとえ警察内部の人間が知っても、神々の代理戦争を潰せなくなる」

「そうだ、警察の人間は誰でも警察組織が可愛い。小さな事件では警察の自浄能力が働く。自浄能力では解決できないほど大きな事件を引き起こしたとなれば、警察上層部は事件を知っても動けない」

「警察の中にも正義を貫く人間はいる」

「お前の側にいる警察関係者が、それか？」

「そうだ、総理襲撃の意味を知っても、こうやって動いている」

「いるんだよ、何処にでも。そのような厄介な人間が。——だから万一を考えた木曾さんは順平を、この計画に組み入れたんだ」

「やはり木曾か、俺を引き入れた目的はなんだ」

「さあな、理由までは私は知らない。ただ、木曾さんは、神々の代理戦争は、何れ破綻すると考

えていたようだった。その木曾さんは、お前と同じ事をいっていた。警察を絶対に崩壊させてはならないと、それが理由だったのかも知れない」

「木曾が？」

「そうだ」

「木曾は組織の幹部だったのか？」

「いや違うが、それがどうした？」

「俺に情報をくれた」

「その事か、それなら上層部をたきつけ、そのように仕向けたのは木曾さんだ」

「上も知っていたのか？」

「幾ら木曾さんでも、そこまで勝手はできない。木曾さんがお前と櫻井観察官の関係を調べあげた上で、上の了解の元にしていたのはたしかだ」

「よく上は、了承したな」

「どうせ何れは警察は、嗅ぎ付けると考えていたのだろう。そのとき慌てふためいて、いきなり公表されては困る。だから小出しに情報を与える事で、警察を雁字搦めに縛っておく。おそらく、そのように上を木曾さんは説得をしたのではないのかな」

「その為の道具が俺か、では、俺は逃げる必要はなかったのか？」

「順平は、しばらく警察との宣伝塔をして貰った後に、検察を倒す為に使う、それが計画だった。しかし、お前が勢い余って、先に検察を倒したから、ややっこしくなった。大人しくしてれば、こっちで検察から救ってやったものを」

「仕方あるまい、こちらはそんな事は知らなかった」

「そうだろうな」

「君は多くの情報を持っているのか？」

「私は何も持ってない、期待に添えなくて残念だな。尤も木曾さんなら持っていたかも知れない」

「でも木曾は、幹部ではなかったのだろう」

「順平なら木曾さんの力はわかるだろう。木曾さんは情報工学のエキスパート、組織内の盗聴やハッキングなどお手の物だ」

そのとき、自由にコンピュータに侵入できる木曾なら、組織の資金の流れも掴んでいたかも知れないと順平は思った。

「木曾さんは色々の情報を集めていたようだが、私が知れば、私も狙われると言って教えてはくれなかった。だから順平が求めるような証拠は私にはない。私はお前が知るように通信を受けたり、お前の動向を調べているに過ぎない……」

幸恵は重要な証拠などには、触れる立場にはない様子であった。しかし、組織内に居れば、身を守る為に使える程度の物は必ずある。

「わかった、こっちの欲しい情報などは、どうでも構わない。お前は、まず身を守るのを考えろ。お前の組織が一番嫌がっているのは、外に秘密が漏れることだ。その程度のものなら、幾らで

も周りにある」

「……優しいな、お前は……」

「ところで木曾は、どうした？」

「おそらく……」

「おそらく、何だ！」

「……それは順平が考える事だ」

おそらく消された。立場上、沖子が口に出来ない言葉だと察した。

「お前なら、すでに知っているだろう。陽院真理教を」

「知っている」

その言葉に沖子はさすがだと思った。警察庁にいる自分を、こうも容易く捜し出した男である。まして総理を使った仕掛けが何であったかも見抜いている。すでに、この男は、大方の事は知っていると思った。このとき木曾が選んだ理由が、なんとなくわかるような気がした。

「だろうな、元々、高木と大畑は、この陽院真理教を調べていた。組織にとって不味いのはわかるだろう」

「それで高木さんを移動させた」

「そう、手を引かせるためにな。ただな、大畑という警官は、それでも手を引かなかった。その時から組織は狂いだした」

「どういう事だ」

「大畑という警官が、組織を嗅ぎ回っていた。組織は、その男の殺害を決めた。そこからだ、組織が狂いだしたのは。――本来、この計画は、水面下で静かに時間をかけて行うはずだった。殺害や総理大臣を襲う、そんなものは当初の計画にはなかった」

沖子の声は、自らの苛立ちを示すかのように尖っていた。

「あの警官を殺すと決めたときから、組織には、その殺害を有効に使えないかと考えた馬鹿者が居た。そこから生まれたのが神々の代理戦争だ」

人を殺す事を有効に使う。恐ろしい考えを持ったものだと思った。ただ、実際に、神々の代理戦争の中に身を置いた順平には、沖子の述べている意味が理解できた。

神々の代理戦争では、お互いを疑心暗鬼の中におく必要がある。その最良の方法が、代理戦争が始まって人が死ぬ事であった。人の死は、冗談や嘘では片づけられない。指名を受けた中の一人が死ねば、それは代理戦争の中で殺されたと思いが思う。

「大畑さんを殺すと決めた組織は、次々にターゲットを作ったのか？」

「そうだ、水面下で時間をかけてやるより、神々の代理戦争という仕掛けを使い一挙に目的を達する。組織の考えは、そのときから大きく変わった」

「何故、大畑さんを殺す事になった。高木さんのように、職場移動との方法は取れなかったのか？」

「一度に現場の公安員を、二人も移動させるのはできなかった」

「……………」

「ただな、大畑や順平を別にすれば、一応は神々の代理戦争を作ったのも警察の人間だ。最初に抽出した人間の多くは、脛^{すね}に傷を持つ者だった。例えば黄田真一、金融業を表の顔として、悪質な闇金を裏でしていた。斉藤代議士、汚職に関わっていた人物の中では見かけほど強くない男だ。仲間の代議士の話を引き出すには都合が良い人間。東検事、過去に無実の人間を自分の都合で有罪にしている。我々も警察、このような情報の入手は幾らでもできる。政治家は斉藤のように脅して、仲間の政治家の話しを聞き出す。その政治家を地検に売って処理をさせる。何も裁判をする訳でないから、脅すには証拠などは必要ない」

「酷い話しだ。しかし、それなら神々の代理戦争なる言葉は、必要あるまい」

「鈍い男だな、訳が判らない話しで相手を惑わせる。一対一で交渉などすれば、そこには現実がある。相手も警戒をする。まして一人から狙われると判れば、防ぐ方法も考えてくる。最初にゲームだと話されれば、そこで人は思考停止に陥る。事実、順平もそれに陥ったろう」

「……たしかに敵は大勢と思った。けど、それは警察がやるようなものか」

「たしかに、そうだ。しかし、神々の代理戦争の組織は、そのときには警察であっても警察ではなくなっていた。そんな組織が一旦、動き出したら止まらなくなる。多くの人間が集まれば、そこには必ず強硬の意見と穏健な意見ができる。開かれた第三者の目に触れる場での議論なら第三者の目を意識して、ほどほどの意見に集約ができる。そんなしがらみのない閉鎖空間では、そうは行かない。その時、方向を示せるのは、その組織の指揮者だけ。しかし、その指揮者が少しでも強硬論に傾けば穏健な意見は弱腰、裏切り者の批判で片づけられる」

「そんな事が内部で起きたのか？」

「ああ、次第に陶醉しはじめた組織に、歯止めは利かなくなった。組織にとって邪魔だと思えば、神々の代理戦争に加えれば排除が出来るとの考えが浸透した。ついには警察法改正に否定的な意見を持つ者も加えだした。それは、まさに自分達が神に成ったと思ったのだろうな」

「歯止めのかからなくなった結末が、神々の代理戦争とは……」

「まあ、私は警察が強くなれば良いとの立場、どちらでも良かったが」

自嘲するように沖子がいった。

「一つ教えてくれ」

「なんだ」

「組織のトップは誰なんだ？」

「話せると思うか？」

「駄目だろうな」

「順平がしようとしている事に、その人間は必要か？」

「トップが誰かは是が非でも知りたい……」

「甘いな」

「そうだな、沖子の立場では、簡単には話せないな」

「実に、お目出度い人間だよ。順平達は。それでは狡猾な人間には太刀打ちできないぞ。狡猾な人間とは、どんな事態になっても自分を安全な場所におく。しかも、そんな人間は同じ手を得て

して何度でも使うものだ」

「何度も使う……」

「ああ、長い時間を使ってな。狡い人間とはそのようなものだ。そういえば、甘いで思い出した。木曾さんも、お前を甘い男だといっていた」

「木曾が俺について？」

「そのとき、おかしい事をいった。その甘さが、組織を救うとな。なんの意味か私にはさっぱりわからんが」

「俺が甘い男か、自分では、そうは思っていないが……」

それには答えずに沖子は話しを続けた。

「最後に木曾さんの伝言だけは伝えないとな」

「木曾からの伝言？」

「何処かで伝えて欲しいといわれていた。今が、その時期なのだろう」

「……………」

「俺は情報工学分野でなら、神坂に負ける事はない。……これが木曾さんから伝えてくれといわれた、そのままの言葉だ。――そう言えば、それを話した後に木曾さんは、これが解けないようなら神坂でも、この事件の処理は無理だともいっていたな」

「わかった。木曾からの伝言は確か受け取った。それより沖子、逃げる事を考えろ。お前の周りに居るのは全員が警察だ。俺がお前を知ったのはすぐ知られる」

「私も警察組織の人間、今更逃げる訳にも行かない……」

そう言うと電話は切れた。

三十七

慌てた順平が何度も神さんの携帯に電話をしたが、二度とはつながらなかった。

「駄目か？」

「電源を切られました」

そこには霧島幸恵では駄目であったのかとの櫻井の、悔しそうな顔があった。

「無駄ではありませんでした。沖子は、首謀者を教えてくれました」

「首謀者を？」

「首謀者は警察庁の金城次長です」

「金城次長、田所ではないのか？」

櫻井に限らず、高木や尾道達も怪訝な表情を浮かべた。金城次長といえば元々、法案に反対をしていた人物で神々の代理戦争のターゲットとして、早くから名前があがっていた人物である。

「……信用してよいのか？ 霧島は、こちらについての訳ではないだろう。相手は犯罪心理分析官、こちらを混乱させる意図かも知れないぞ」

金城次長が首謀者とは、すぐには櫻井には信じられなかった。

「……神々の代理戦争は、疑う事で成立をさせるゲームです。俺達は、健吾さんに相談をする

とき、ここからは人を信じて見ようと話しあいました」

尾道達が、順平の言葉に、頷いて見せた。

「俺は霧島幸恵としてではなく、俺のアドバイザーである沖子の言葉として信じようと思います」

櫻井が少し不安な顔をした。

「そうか……」

櫻井が考え込むと、有田が順平に聞いた。

「順平、どうして、沖子の話から金城に行き着く」

「沖子は、あのリストは、木曾が上層部の許可を得て知らせてきたと話していた」

有田が頷いた。

「問題は、神さんの上層が、実在者を早い段階で俺にどうして教える必要があったかです。木曾が勝手に教えてきたのなら、それは木曾の意思だけど、そこに上層部が絡めば、上層部にとっても、何らかのメリットがあったと考えるのが普通です」

「上層部のメリット？」

「ええ、その前に、俺と健吾さんの関係を調べてあったとも言いました。それは俺から、健吾さんに指名者が知られるとの意味です」

櫻井が頷いた。

「更に沖子は、俺達はお目でたい人間だと言いました。それは俺だけではありません。俺達とは、おそらく健吾さん達、警察を含めてとなります」

健吾も、そこまで話しを聞くと、なるほどと思うものがあつた。同じ警察に神さんのリストが知られたとき、神さんが警察の仕組んだものだと知った人間は、そのリストの人物は神さん組織の人間ではないと判断をする。

「代理戦争のターゲットの中に居る。……そうか、自からを神々の代理戦争のターゲットとしておけば、何があっても疑われない」

櫻井の言葉に順平は頷くと続けた。

「決定的だったのは、狡猾な人間は同じ手を何度も使うと言いました。それも長い時間との念押しを沖子はした。それに当てはまるのは金城次長だけです。金城次長は、最初は法案に賛成をしていたが、法案成立が絶望となると反対に回っています。裏に回ったり表に回ったりして目をくらます。自分をリストに載せるやり方に通じるものがあります」

順平達は徹底的に名前があがった警察関係者の経歴を調べていた。順平がいった金城次長の経歴は、順平の頭に記憶されていた。沖子が話しをきたときからピンとくるものがあつた。

「しかし、順平、そうなると代理戦争の中に身を置いて危なくはないのか？」

少し尾道が首を傾げて聞いた。

「それが、そもそも間違いなんだよ。神々の代理戦争の対戦相手は、あの組織が自由に決めている。俺のような力を持たない人間に知らせたところで、何もできないとわかっている。そして、警察である健吾さんに伝わる。そこまで計算されていた」

上手い事を考えたと尾道も思った。事実、順平の口から出たとき、その人物は選ばれた側であって、仕掛けをした側から外される。特に櫻井のような警察官が代理戦争の実態に迫ったときに、神さん組織の敵として映る。

「まさに小狡い奴の、考えそうなものだな」

有田が、吐き捨てるようにいった。

これで首謀者のめどはたった。ただ、もう一つ、順平は解かないとならない謎があった。

沖子の話しから木曾は、組織の内部に食い込んでいたのが判った。盗聴やハッキングまで木曾がしていたのなら、木曾は資金の流れも掴んでいた可能性を持っていた。

(沖子は木曾が俺を神々の代理戦争に引き込んだといった)

その木曾は情報工学分野なら負けないと、沖子に妙な伝言を残して姿を消している。

聞いただけでは、木曾の負け惜しみとも聞こえる伝言であるが、そんな伝言をわざわざ伝えてくるとも思えない。

――携帯電話は情報工学の固まりのようなものである。

沖子から順平が与えられた物といえば神さんの携帯電話だけである。その携帯電話を作ったのが木曾だとすれば、もし、木曾が自分に対して何かを託すとすれば、それは携帯電話になる。木曾なら携帯電話がバラされるのは予想していた。いや、事実、こっちはGPSを止めている。それを知っている上で伝言を残していた。そこまで考えたとき、順平はハッとした。

順平は傍らのバックから、精密ドライバーを取り出すと神さんの携帯電話を分解しはじめた。

「どうするんだ、その携帯？」

有田が順平の手元を覗き込みながら聞いてきた。その姿を櫻井達はじっと見ていた。

「なかにメモリーカードか、何か組み込まれている」

「メモリー？」

「木曾の伝言だ。俺が携帯電話を五月にバラしたのは木曾も知っている。おそらく一度くらい分解しても、見つからないように俺は仕込んだよと言っているのが、あの伝言の情報工学なら負けられないとの意味に思う」

メモリーを仕組んでいる。順平には思い当たるものがあった。組み込まれた骨伝導回路の下に黒い台座が使われていた。ただ、五月に携帯電話をバラしたときは、電気回路絶縁用の物だろうと思い、深く考えはしなかった。しかし、今、思えば大きき的にはマイクロ規格のメモリーカードなら、台座の中に治められる。

順平は手際よく携帯電話を分解した。回路の下に見える黒色のプラスチック台座は、小さなネジ四本で止まっている。回路に接続されたフィルムケーブルを引き抜くと、順平は四本の小さなネジを取り外した。回路ごと台座を外すと下からメモリーカードが現れた。

順平はメモリーカードを取り出すと、尾道が用意したパソコンに差し込んでみた。パソコンがメモリーカードの内容を読み出した。

現れたのは警察が集めた、裏金の流れを示すものであった。

(なあ、木曾、俺の考えた処理方法は正しいんだよな)

それが解けないようなら、この処理は無理といった霧島の言葉が、順平の頭のなかを駆け回った。

警察以外の人間に裏金の流れを託す。警察は裏金であっても表には出せない。そこで思考はとまる。しかし、警察に属さない神坂なら裏金を表に出すことに躊躇^{ちゆうちよ}はない。

木曾清孝、警察のなかにあって工学馬鹿と揶揄^{やゆ}され、組織からはみ出してきた男。それだけに警察組織内においても、誰より冷徹に警察組織を見る事ができた男。だからこそ神坂順平という警察組織を外から見られる男に、全てを託したのだろう。

三十八

首謀者は金城次長と順平から告げられた櫻井達は、金城次長の身辺を洗った。しかし、金城が首謀者であるとの確証はもてなかった。

金城次長は、何れは警察庁長官も狙える程、頭の切れる男である。その金城は、現在は警察法案に消極的と黙されている。ただ、その金城も九年前の法案提出前までは、賛成派の一人であった。九年前といえば、与野党の力は均衡し政権交代の風潮が強まりを見せていた。もし、金城が、この政治環境の変化を敏感にかぎつけ、警察法案が否決されるのを讀んだうえで、その頃から今を見据えて消極論に転じていたとすれば、まず尻尾を出すような事はない。

櫻井は難しい立場にあった。

櫻井の頭のなかでは、この後、どうするか決まっていた。首謀者を特定して首謀者との直接交渉。今は、それしか櫻井に道は残されてなかった。それだけに首謀者を間違える訳にはいかないのであった。

たしかに霧島幸恵を信用すれば、金城次長は怪しい。

(信じてみるか？ 順平の勘を、そして霧島幸恵を)

いつまでも得られない確証に拘って、時を無駄にはできない。腹を決めた櫻井は、今回の事件の首謀者と見られる警察庁金城次長に会う事にした。しかし、何の証拠がある訳でもない、会ったからといって相手もすんなりと、はいそうですと認めるほど簡単なものでないのも知っていた。しかも、上手くかわされれば、その後に神さん組織から、どんな反撃を受けるかも知れない。それだけに櫻井にしても用心をして、かからないとならなかった。

櫻井は、警察庁の金城次長室にいた。櫻井は金城次長に神々の代理戦争の全容と、関わったグループの詳細を述べていた。金城が鋭い目を向けて聞いていた。

「これが神さんの代理戦争の正体です」

櫻井が話しを終えると金城は、目を閉じ、しばらくじっと考え込んでいた。

「話しはわかりました。これは警察としても由々しき問題です。長官を含め話し合わなければ、結論など出せる問題ではありません」

「次長、時間はありません。すぐに結論を出さないとならない問題です」

櫻井が、険しい顔で詰め寄った。

「神さんの代理戦争の組織は警察内にあるのです。そして、その警察が政治家を落としいれた。これが外に漏れれば警察は政治家の逆鱗に触れ、解体的出直しを求められる。次長も、それはわかりだと思えます」

「解体的出直しか、そうかも知れない。しかし、それだけに簡単に結論の得られるものではない」
困った表情を浮かべた金城がいった。

「次長！ いいのですか？　すでに、この問題で命を狙われてる者が居るのです。私の持つ情報の大半は、そこからのものです。私がきちんとした報告を持って帰らないと、自らの生命を守る為、その人物は、これらの件をすぐにマスコミに流すと言ってます。そうなったら手遅れになります！」

櫻井は相手が次長であるにも拘わらず、語気を強めていった。金城は唇を噛んでいた。それが悔しさであるか、警察にとっての不祥事を危惧したものか、櫻井は見極めるために、じっと金城に目を当てていた。

金城は机の上で組んだ手の指先を、忙しく動かしていた。

「君も警察組織が大切なら、その人物を君が保護すれば良いではないか！」

金城の口調も荒々しいものになった。

「簡単に言わないでください。その人物は警察からしつこく命を狙われたのですよ。私も、その警察の一員です。信頼されて情報を与えられたと次長はお考えですか？」

「.....」

「信頼などされていませんよ。もちろん警察もです。そんな私や警察が保護するといっても素直には応じませんよ」

「だから、そこは君の力でなんとかできないのか？」

ここまで話せば、金城が、神々の代理戦争を組織した張本人であれば、どんな反撃が待っているかわからない。櫻井も、中途半端でやめるのはできない。

「無理です。相手も知っているんですよ、警察から身を守る術を。それが一刻も早い公表です。だから、私は信用のできる次長に相談をするからと相手に話して、時間を引き延ばしているんです」

「.....まずいよ君、何があっても神々の代理戦争の件を表面化させるのは」

――引っかかったと櫻井は思った。その時、櫻井は金城が首謀者であると、はっきりと認識した。櫻井は罨を仕掛けていた。

櫻井は次長との話において、神々の代理戦争とは話さず、神さんの代理戦争と名前を少し変えて話した。神々の代理戦争なる言葉は、関係者以外は知らない。勿論、金城次長が、その関係者でなければ。

相手を興奮させる。それが一つの櫻井の狙いであった。この計画を立てた張本人にとって、一番の鬼門はマスコミに知られるものである。それを弄^{ろう}して櫻井は金城を興奮させた。

相手が興奮すれば使いなれた言葉である、神々の代理戦争の名称は何処かで口にすると読んでの仕掛けであった。

金城が首謀者だとわかった櫻井ではあったが、それには気付かない振りをして話しを続けた。

首謀者とわかれば、ここからが本当の勝負になる。

「君、不味な、一般人に知られているのは」

「そうですね、それじゃ次長、取り引きをしませんか？」

「君は、何を言うのだ。取り引きとは何だ」

「警察を救う処理の仕方があります」

金城が不思議そうに櫻井を見た。内心、金城は、これは警察内部の人間には到底処理のできるものではないと高を括っていた。それだけに警察を救う処理などある訳はないと櫻井を睨んだ。

「方法は至って簡単です。警察が裏金を認めて、真摯に国民に謝罪をするのです」

「裏金？」といったきり、しばらく金城は怪訝な表情で櫻井を見た。

「警察の裏金が使われていたのは、はっきりしています。裏金を表に出せば、全てを壊せます」

険しい表情で金城は櫻井を見た。それは組織が使った裏金まで櫻井が知っているという驚きのようでもあった。

「……しかし、そんな事では神々の代理戦争が、表に現れるのは防げないだろう」

「いえ、できてしまうのです。何故なら、神さん連中も元々は、警察を強くしようとしている者達の集まりです。その強くしようとの気持ちを持った連中なら、捕まったからといって神々の代理戦争を自ら口にするとお思いますか？」

順平の考えた裏金での処理は、神々の代理戦争に荷担した人間は、金城に限らず警察組織を強くしたいとの考えがあり、警察組織の崩壊を望む者はいない。だから使えるのであった。

仮に、この後に別件で神さん組織の人間が逮捕されても、その考えがあれば、神々の代理戦争を自らは口にはできない。まして、逮捕された者が神々の代理戦争の存在を明かそうものなら、そこには警察官殺害や総理襲撃などの大罪が待ち構えている。それが警察の裏金に伴う詐欺等での逮捕であれば、逮捕者から、この一連の事件の真相が語られる事はないのであった。

金城ほどの頭の切れる人間であれば、ここまでくれば、それがわからない筈がなかった。

「……相手は口に出せない。それで裏金で誤魔化す。なるほどな」

「仕方ありません。警察としても事実を公表できません。主立った者は、裏金の横領及び詐欺罪で逮捕すれば良いのです」

「……………」

金城は内心、そんな処理の方法が残されていた事に忸怩たるものがあつた。

(櫻井は、取り引きといった) ーなるほどなと金城は思った。すでに、この男は自分の正体にも気付いていると感じた。

金城は、それでも平静を装い、頭を目まぐるしく動かしていた。ここまで調べ、ここに櫻井という男が乗り込んでくるには櫻井単独でできるものではない。今更、この男を処理しても、それでは事は治まらない。まして警察内部で紛争となれば、神々の代理戦争は隠し通すことは無理となる。

「……裏金か、裏金で処理をするとは、君もよく考えたものだ……」

政党設立や組織の資金には、不正に集めた警察の裏金が使われている。その裏金を表に出せば

心理新党や、そこから活動資金を得ていた下部組織などは立ちゆかなくなる。神々の代理戦争を不問として裏金によって関係者を逮捕する。

絶対に警察組織では処理は出来ないと思っていただけに、金城は、そんな処理方法が残されていたかと驚くとともに、警察に処理方法があったのでは、早晩事は敗れると認めざる得なかった。

渋々ながらも金城にしても警察の今後を考えれば、櫻井の提案に頷くよりなかった。

「それと次長にも身の振り方を考えて頂きます」

少し金城の目が厳しさを増した。俺の首を欲しがっている。やはり、この男は、全て知っていると金城は櫻井を睨んだ。そうなれば、この勝負は金城の負けであった。

そのとき、金城の目が光った。

「しかし、私は、その組織のターゲットだろう。たしかに、裏金の問題では責任を感じるが、私が責任を取る問題かね」と言いながら金城は櫻井の様子を見ていた。

それは金城の開き直りととれる話しであった。櫻井の口から金城が神々の代理戦争のターゲットにあるとの話しは、まだしてなかった。その金城が、自ら、その様な話しをすれば、神々の代理戦争に関わりがあったと自ら述べたようなものである。それに気づかない金城ではない。

何故だと一瞬、櫻井の脳裏に疑問が起きた。しかし、櫻井にしても金城が、首謀者だと知った上で話している。金城の言葉にいちいち反応すれば、問題をより深刻にするだけであった。櫻井は気付かない振りをし、さらりといった。

「ええ、それが取り引きの条件です」

しばらく、金城は考えていたが「良いだろう」と苦々しくいった。櫻井は金城に頭を下げて部屋を出た。その櫻井の後ろ姿に、金城の目が鋭く注がれていた。

三十九

数日後に警察は、裏金の存在を公表すると、心理新党の代議員四人、警視庁総合管理室から七名、警視庁から三名、計十四名が警察の裏金を騙し取ったとして詐欺容疑で逮捕した。これまで神々の代理戦争の影響外にあった心理新党であるが、代表を含む四人の代議員が逮捕されたのでは一溜まりもない。心理新党は解党となった。

巨額の裏金の存在を明かした警察も、マスコミなどからの批判は凄まじいものがあった。しかし、それは仕方なかった。ただ、警察はこれまでに何度も、マスコミなどの追求を受け裏金の存在を明らかにしている。その意味では、すでに国民の間には警察の裏金に対する免疫がある。一時的な警察に対する非難は起きても、これまでと同じようにやがては沈静する。事実、一方においては警察内部の自浄作用によって裏金の件が明かされた事に、一定の評価をする向きもあった。

法律論や常識論をもって しゃくしじょうぎ 杓子定規に語れば、順平達の考えや、櫻井達の行いは非難されて叱り。ただ、世の中には杓子定規に解決できないものもある。亡くなった大畑には済まないとの気持ちだが、櫻井にも高木にもある。しかし、それも、どうしようもないのであった。

櫻井の計画は大方は予想通りにいった。裏金問題は警視庁の田所部長が、主導的な役割を果たしたとして田所部長が逮捕され決着をみた。しかし、誤算もあった。金城次長の辞職の話が一向に出てこない。

櫻井は仕方ないと思った。金城に関しては、金城の犯罪を問おうとすれば、神々の代理戦争を表にださないとできない。しかも金城には、その物的証拠さえもない。すでに櫻井にできる事ではなかった。未だに神々の代理戦争と金城との関わりは警察内部にも知られてはいない。金城次長は、これからも安泰であろうと思った。

悔しさは残るが、神さん組織は壊滅して、警察組織は崩壊を免れた。櫻井としても、それでよしとしないとならなかった。

四十

事件が一応の解決をみた頃、櫻井は金城次長からの呼び出しを受けた。櫻井にすれば逢いたくはない人物になる。

すでに神さん組織は崩壊し、法案改正を目論んだ神々の代理戦争も ^{しゅうえん}終焉を迎えた。今更、金城一人では何もできるものでもない。それについての心配は櫻井にもなかった。ただ、金城とは地位の違いがある。櫻井は警視庁に居るとはいえ、元々は警察庁のキャリア採用、従って形としては警察庁からの出向となっている。金城なら計画を潰された腹いせに、櫻井に対して人事での報復くらいは簡単にできる。まあ、其れも仕方ないと覚悟を決めて、櫻井は金城に会っていた。

「警察に対する風当たりは、相当、厳しいが、これ程度で済めば仕方ない。まずは君にも礼を述べる」

そう言って金城は櫻井に頭を下げた。

「ところで、君は警察が好きか？」

「天職と考えています」

「そうか、それなら君に取って良い話だ。警察庁企画課課長の席が空席になった。君、そこに座らないか？」

おかしい雰囲気、櫻井は一瞬戸惑っていた。報復があると考えていた櫻井にすれば、それは悪い話しではなかった。櫻井とて、これから警察で不遇の扱いを受けるより、出世した方が良いに決まっている。たとえ、それが金城からの口止めの代償であっても。

「……………」

「不服か？」

「いえ、そうではありませんが」

「君の優秀さは、今回の処理を見れば明らかだ。唯一、細く通った道を使い上手く処理をした。尤も、この事を知るのは、警察庁と警視庁の幹部数人だが。しかし、君が裏金問題で監察官として多くの警官を厳正に処分した。それは警察官なら誰もが知る。この人事に反対する者はいない」

おかしい成りゆきであった。形の上では、裏金を巡る事件で終わっている。しかし、裏金を表

に出された事は警察にすれば、腹立たしさはあっても、素直に喜んでいる幹部などは、そうは居ない。

「私の方で根回しはしておくので、よろしくな。ところで、君は偉く組織を大切に作る人間だ。警察の鏡といって良いだろう」

嫌な持ち上げ方だと櫻井は警戒をした。

「君くらい組織の大切さを知る警察官は居ない。だから、今回、このような思い切った手によって警察を守った」

「……………」

「しかし、まだ守り足りないのではないか？」

「次長、何を仰りたいのですか？ 話しの意味が、私には理解できませんが」

櫻井の表情は、険しいものになっていた。

「君のように警察組織を大切に思う人間は、組織を潰すとの考えは持たないから、私も安心して話せる。どうかね。一般人が何もかも知っている、それは警察として困るのではないか？」

それは神坂達を指しての事だとわかった。

「彼らは、この案を考えた者達です。警察が困るような事ではないのではありませんか？」

「そうかな、人の心は移ろい易いものだ。時間は怖いものだよ」

「彼がいなかったら警察は、こんなものでは到底すまなかった」

「それは判っているが、あの男が、今後も話さないとの担保は何処にもない。警察の為だ、なあ、君、もう一仕事してくれないか？」

櫻井はハッとした。それらの話しは金城は、自らが神々の代理戦争の首謀者だと認めながら話しているものであった。このとき櫻井は、先の交渉時、金城は自らターゲットであるのを告げてきた。あれは自分を試すためのものだったと気付いた。何の為に試そうとしたか？ 櫻井はやられたと思った。櫻井が神々の代理戦争を表に出せないと決めていれば、櫻井の前では、今度は逆に、堂々と自らが神々の代理戦争の首謀者であると認めでも、櫻井に打つ手はない。それを金城は計算していた。

出世を餌にして、神々の代理戦争の首謀者を前面に押し出し、その後処理で櫻井に汚い仕事をさせる。それがどうやら金城の狙いのようにであった。

俺は、とんでもない勘違いをしていたと、そのときはっきり櫻井は気付いた。金城に対して仕方ないと諦めていたが、金城にすれば自分の秘密を握られている櫻井は、警察内での危険人物であった。しかし、それも櫻井が犯罪に手を染めれば、イーブンの関係にできる。

「巫山戯るな！ もし神坂達に手を出したら、全てをぶちまける。わかったな」

憎しみを込めた目で、ぐっと金城を睨んだ櫻井が叫んだ。その目を受けた金城があざ笑うかのようにニヤリとしていった。

「出来ないさ、君には」

櫻井は目の上がぴくぴく痙攣^{けいれん}する感覚を覚えたが、無言で部屋をでた。廊下を歩きながら、櫻井は何処まで腐った男だと金城を罵倒していた。そのとき自分が応じなければ、金城に従う部

下は、まだ居るのに気付いた。

櫻井の表情が青ざめた。すぐに櫻井は、万一を考え、順平に綾子や友人達としばらく身を隠してくれと電話をした。

櫻井が順平達の心配をしている間に、金城の手は警察庁内部に向かっていた。数日後、霧島幸恵が部屋で自殺をしたとの話しが、櫻井に伝わってきた。しまったと櫻井は思った。その瞬間、櫻井の体は怒りに震えていた。

四十一

「次長、警視庁の櫻井監察官がお見えです」

「中に通してくれ」

人払いがされた次長室には、櫻井と金城だけがいた。櫻井の顔は、すでに怒りに震えていた。「どうした。私は君が絶対に警察を裏切らないとわかっている。だから君を残した。わかってくれたかな」

冷たい目で、あざ笑うかのように金城がいった。

「霧島幸恵が死んだ。次長の差し金ですか？」

「彼女は、一度、組織を裏切った人間だ。また、裏切らないとの保証はないからね」

「そんな馬鹿な！」

「組織を守るとは、このような事だ」

金城の顔からは笑みが消えると、獲物を狙うかのような鋭い眼差しで櫻井を睨み付けた。

「そうですか。組織を守るには知った人間の口を塞ぐのが一番、安全ですか？」

「そうだ、死んでしまえば何も話せない。これ以上安全な方法はない」

良心の呵責^{かしやく}もなく二人だけになると、あからさまに話す金城の姿に、これが権力の頂点を掴もうとする男の執念かと思うと、櫻井はへどがでる思いがした。

「どんな理由があろうとも、警察官がする事ではない」

「私には、その資格があるのだよ」

櫻井はどきっとした。金城が資格があると言ったときの目は、何処か狂気を帯びていた。そんな金城の目を、櫻井はじっと見た。男の目はすでに正常ではない。その目は神々の代理戦争に取り憑かれ、神になったと物語っていた。

神々の代理戦争、まだ終わってなかったと、その目に触れたとき、櫻井の背筋には冷たい物が走った。櫻井は、フーと大きなため息をついて悪寒を払いのけた。

「……たしかに次長の言う通りかも知れませんが、それだと、もう一人、口を塞がないとまらない人間がいる」

「君自身なら心配はない。君は優秀なキャリアだ。私は信用しているよ」

金城が平然といった。

「私ではありませんよ、ここには、もう一人全て知っている人間がいます」

さすがに金城は、むっと表情を変えた。

「それは私か？ 馬鹿をいうな、私は警察官だ」

「そう、彼女も警察官でした。その何処が違いますか？」

「組織にとって要か、不要かを決めるのは私だ」

「組織、おかしな事を言わないでください。組織を守ったのは貴方ではない。霧島幸恵や神坂だ。貴方が守ろうとしているのは、貴方自身の地位だ」

「いや、全て組織の為だ！」

「全て組織の為、その通りです。警察官を殺したり一般人を狙ったりする貴方は、警察組織にとって一番危険な存在なんですよ」

いつのまにか、櫻井の手には拳銃が握られていた。一瞬、金城の顔色が変わった。

「君！ 君は自分が何をしようとしているか、わかっているのか？」

「これが俺なりの組織の守り方です」

その言葉に、金城が再び、笑いを顔に戻した。

「君には撃てない。何故なら、ここは警察の中だ、組織を守った君に、警察組織を崩壊させるような事はできない」

警察は何とか裏金という処理で、組織を守るために一連の事件を闇に葬った。しかし、大きな批判の渦にある。再び、警察内で警察幹部を撃ち殺すような、大事件が起きれば警察組織は持たなく成る。この男に警察組織を壊すのはできないと思うと、金城はニヤリと笑った。

その様子を櫻井はじっと見ていたが、やがて、寂しいような表情を浮かべた櫻井がいった。

「……甘いですね、次長は」

「俺が甘いだと」

少し怪訝な表情で櫻井を見た。

「そうです。それは次長が誰よりも御存知でしょう。霧島幸恵の件が早々と自殺で片づけられた理由を。そう、今、この時期、警察は絶対に問題を起こせないのですよ」

「あっ」と金城の口から小さな声が出た。

「わかりましたか？ そう、ここは貴方の居る次長室だ！」

櫻井の怒りを含んだ言葉に、そんな手があったのかと金城の目は、かっと見開かれ顔からは汗が噴き出した。

ここは警察庁の次長室であった。そんな場所で殺人事件が起こる。今の時期、警察がまともに発表できるものではない。しかも警察施設の中なら、警察はどのような隠蔽もできる。そして、なによりも、この時期の警察高官の死であれば、裏金の責任を取っての自殺とすれば国民の憐憫^{れんびん}の情を誘い、警察組織への風当たりを弱められる。

――金城はしまったと思った。そうなのである。仮に同じような事が金城の前で起きたら、金城は迷わず、そのように事件をもみ消す。それが判るだけに金城の体は、ガクガクと震えだした

。

神々の代理戦争 完

小川 真知貴

『神々の代理戦争』以外にも、幾つか作品があります。

よろしければ、そちらもご覧ください。